

¥1500 画報 風俗奇譚

目で見る風俗絵巻

悦虐哀美女体緊縛写真集
鞭打恋慕被虐絵画名作展

第5集

10月号

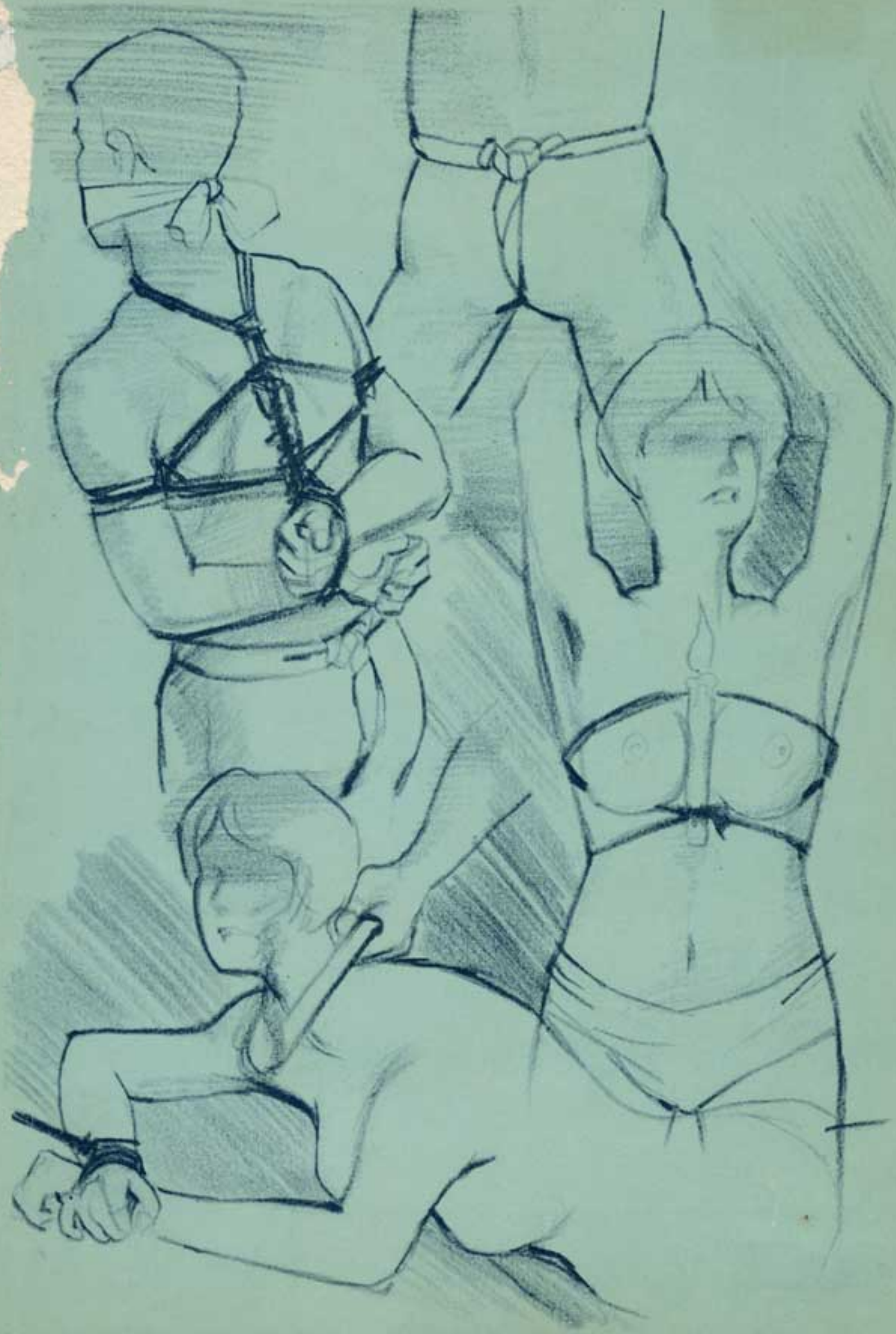
昭和35年10月15日発行第1巻第5号(毎月15日発行)
昭和35年8月30日 国鉄東局特別換水部第8八三号

画報風俗奇譚

5

目で見る風俗絵巻

定価 180円



画報風俗奇譚 第5集

定價 一八〇円

昭和三十五年十月五日印刷

昭和三十五年十月十五日発行

編集発行人 高倉 一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の三五

発行所 文献資料刊行会

振替東京四二四九四番

電話東京(291)二四三〇番



白い肌のいけにえ



縄が 奇妙な感觸を 女体の奥からよび
出す うつとりと放心のままなざしが女
の官能を ありありと 見せつけている

石の壁は冷たい

肌にくれる石の壁の冷たい感じと 肌にくい入る縄の緊縛の痛
さが 女をさいなみ 女を官能の電波のなかに身もたえさせる



暗黒の世界

視界をさえぎられて 暗闇のなかを手さぐりする思い その手を縛られて いるの
では 女の生きる世界は ほかにないの



首輪しばり

うしろ手にしばった縄が首に巻きつき
胸をしめあげる その緊縛のなかに女
は生きる境地を見いだして 陶醉する







画報風俗奇譚 第5集 目次

〈多色口絵〉

白い肌のいけにえ……………三
 石の壁は冷たい……………四
 暗黒の世……………五
 首輪……………六

第1グラビア

憂愁のひと……………(一)
 まひるは静か……………(二)
 スタンドの白魚……………(四)
 柱を背負わされて……………(六)
 椅子の上の残虐……………(八)
 荒縄の受……………(一〇)
 縄の受……………(一二)
 首を受け……………(一四)
 棒責め……………(一六)

〈口絵〉

熱気むし・さかさ髪づり・手首宙づり・うしろ手づり……………田上恵子(四三)
 犬になりたい・鉄の輪まわし……………小田利美(四六)
 ハナ輪責め器・ネズミをお食べ……………江馬美久(四八)

第2グラビア

お膳の上の生きづくり……………(二七)
 クサリしばり……………(三〇)
 憂いの花……………(三二)
 投げだされた姿……………(三四)
 変わった木馬……………(三六)
 石の荷物……………(三八)
 カゴの襲撃……………(四〇)
 からす天狗の襲撃……………(四二)

第3グラビア

ピアノのある風景……………(五一)
 静かなる苦悶……………(五四)
 鼻をつままれて……………(五六)
 目かくしとさるぐつ……………(五八)
 窮屈な姿勢……………(六〇)
 肌を噛む……………(六二)
 屈辱のボクサリ……………(六四)
 カギで責める……………(六六)

奇妙な絵画展覧会……………

ジョン・ウィリー……………(六七)
 ほか……………

トリックによる残虐……………佐村弘(八三)

〈絵物語〉

続・悪徳の栄え……………田上恵子・サド(八六)
 ワナにかかった令嬢……………小馬村伸太郎(九六)
 女密輸船……………小田西利美・え郎(一〇六)

アブチツクなアルバム……………

ギユスター……………(一一〇)
 ほか……………

五十万人の大虐殺……………磯部乙彦(九二)
 死にまざるアヒル行進10マイル……………津村静治(九四)
 生きながら射撃標的にされた男……………田島末雄(一〇二)
 サソリ谷の死の戦い……………村中浩作(一〇四)

フォト・ストーリー 奇妙な媚薬……………

赤木圭介……………



憂愁のひと

曇り日とはいえ まひるの光のなかで女
はひとり 孤独を噛み 憂愁に溺れる





まひるは静か

人気のない庭の片隅に しばらく
て 女がひとり ひっそりと う
ずくまる まひるの静けさに息づ
いて おまえは いったい 何を



考え どんなんもの思いにふけつて
 いるのか 縄の感触が じわじわ
 と 肌をとおして 身内ふかくし
 みわたり ほのぼのと 官能の火
 をかきたてる やわらかい肌に
 輝きが増し 白い乳房が かすか
 にふるえる そのひとときに 女
 は すべてを賭けても 悔いない

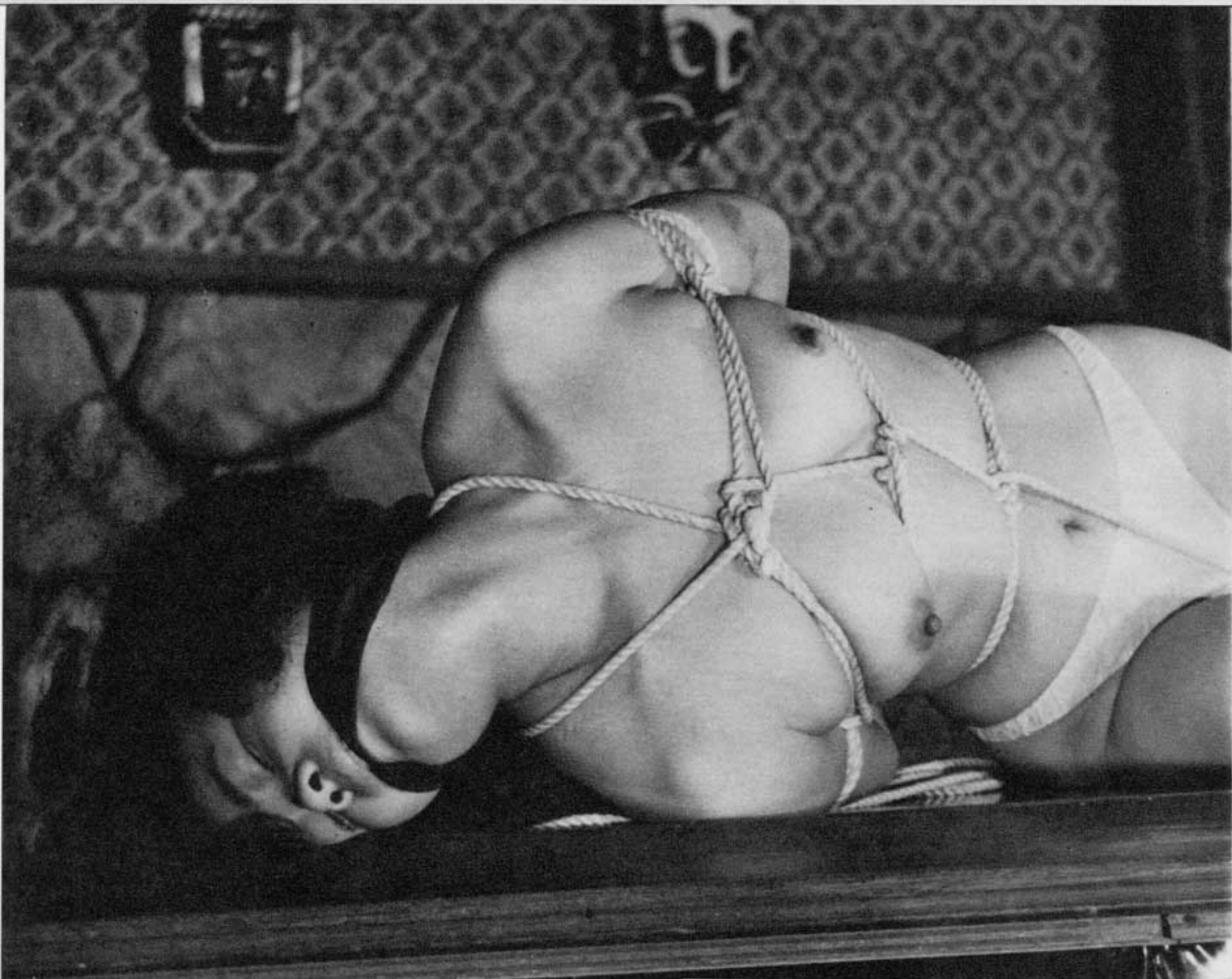
スタンドの 白魚

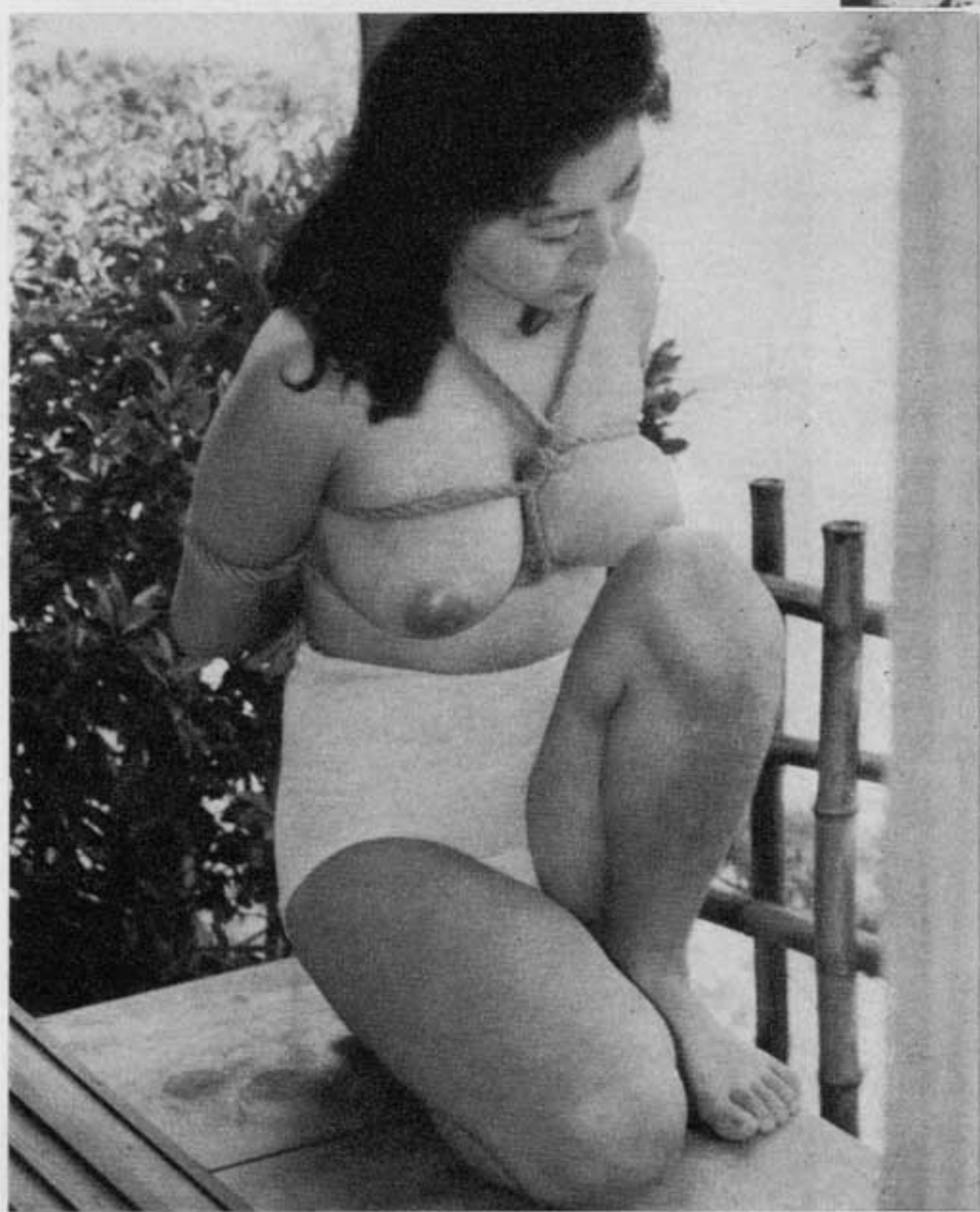
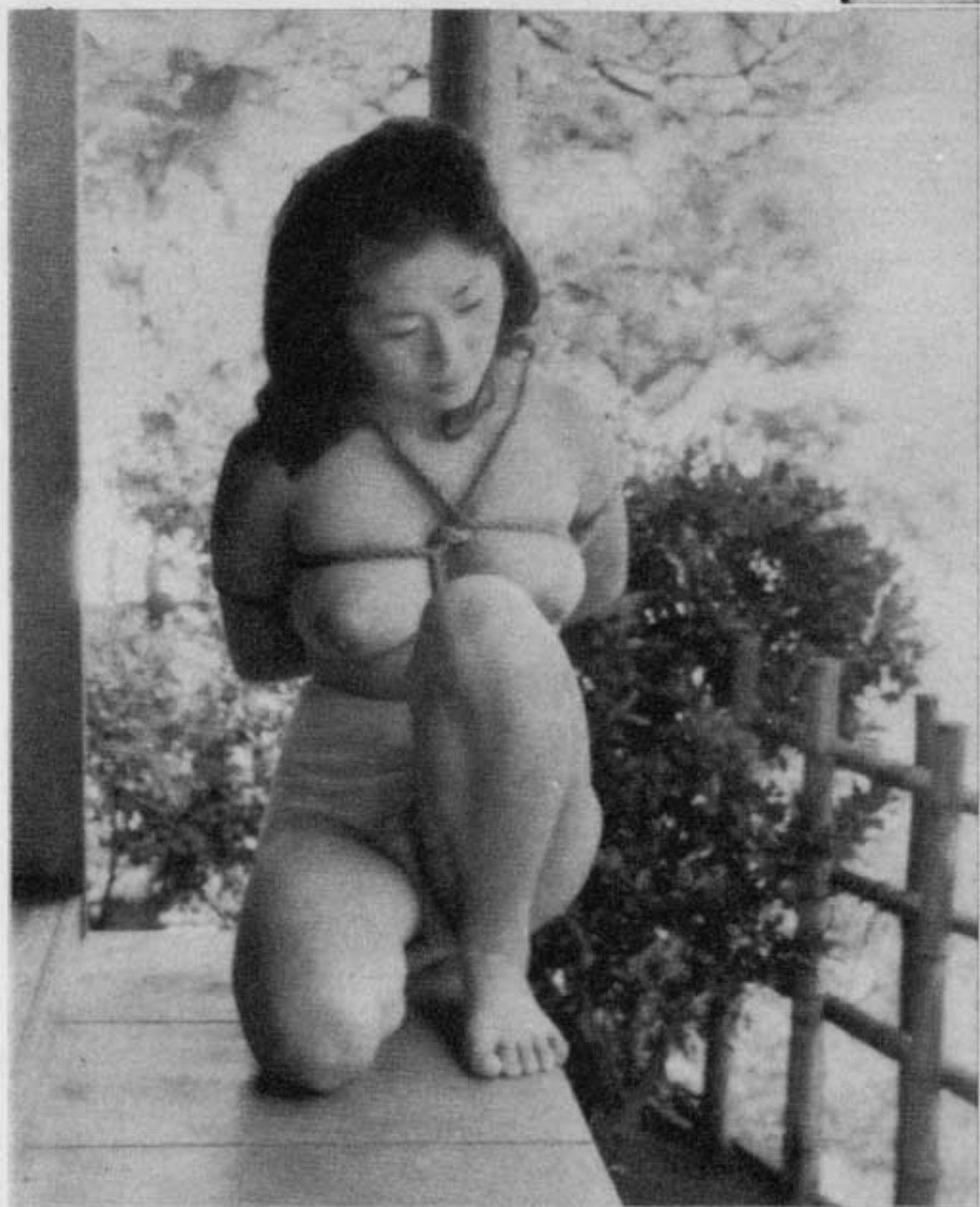


白魚は かなしからず
や 縛られて 身を投
げ出して このひとと
きに 身を焼くという
このひとときに 生き
の命を 燃やすという

昼間のバーは ガランとして
さびしい うす暗がりに浮く
女の肌が 白魚のように び
らびらして 燐光を放つ 青
白い炎を燃やして 妖しいム
ードをかもし 異様なまでに
峻烈な空気が はりつめる！



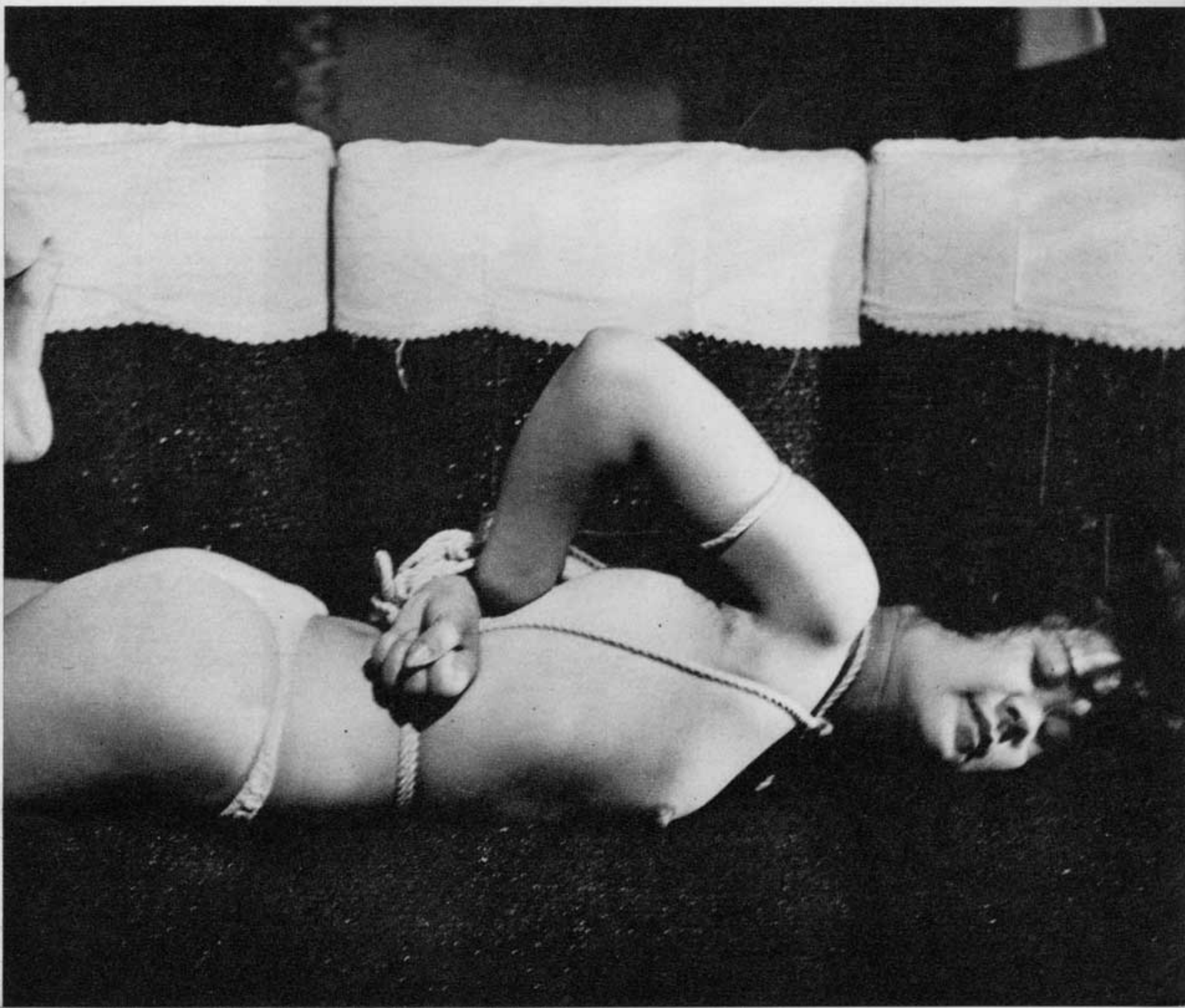




柱を背負わされて

海に見える丘の上に建った一軒家 その濡れ縁の柱にしばられて 風にさらされる女ひとみの奥に 妖気がただよい やがて火を噴いて それは 冲天にふき上げるだろう

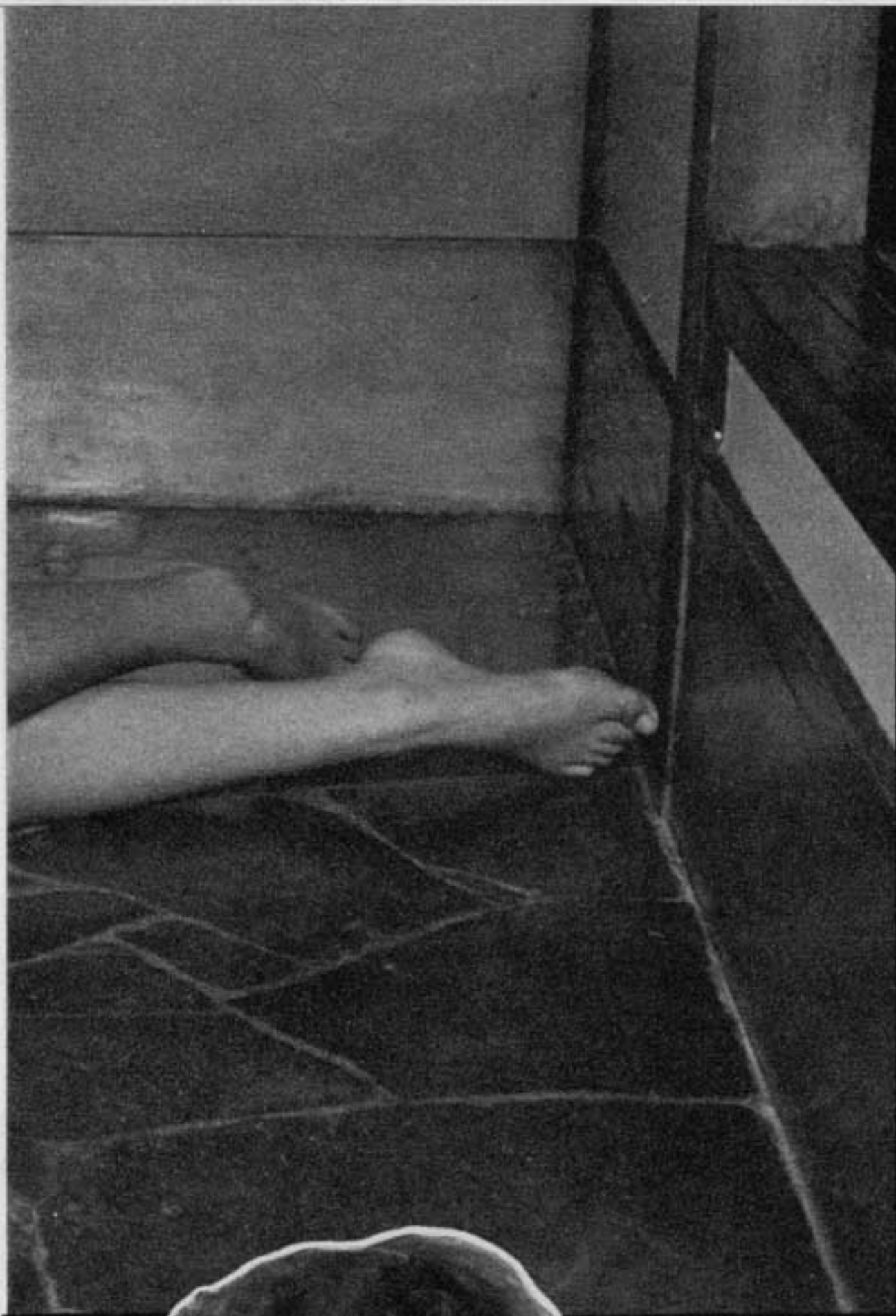






椅子の上の残虐

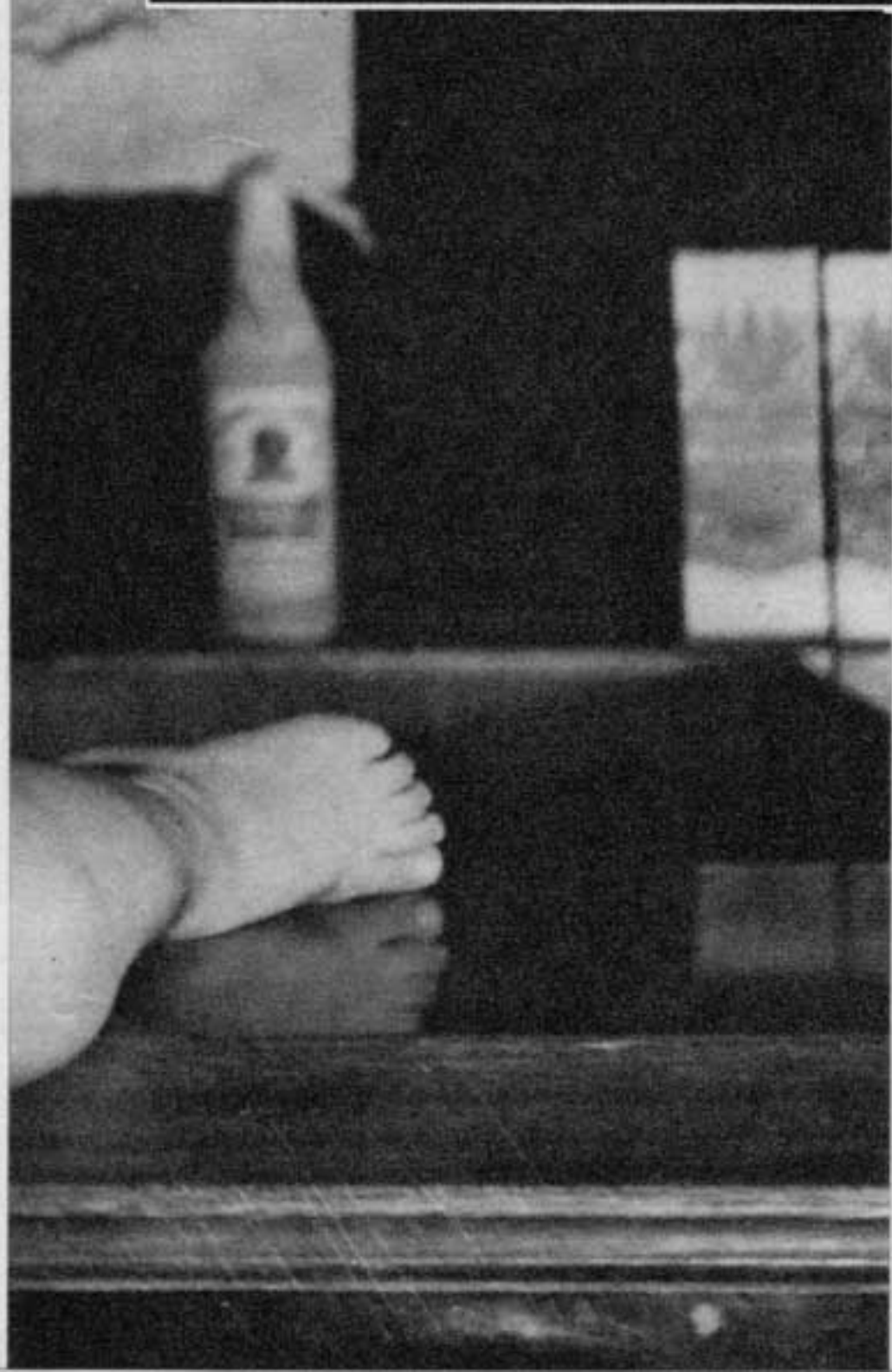
うしろ手にくくられた女は 椅子の上に転がされて どんな嗜虐のイケニエになるのだろうか くすぐられようが ムチ打たれようが 逃がれるすべはないし 避けられる方法もあるまい それでも 女は 運命を甘受する その魅力 その強烈な引力は どこにある？



荒縄の受縛

荒縄のごわごわした肌ざわり 冷たい敷き石の感触
そのなかから生まれ出る 不思議な官能 ことばでは
表現できない怪しげな雰囲気 それにひたって 女は
情熱の炎をかきたて 身もだえする 荒々しい手ざわ
りのあしらいが 女を興奮にかりたて 法悦の門をひ
らくのだ 条理を越えた 女の生理から生まれるもの





縄目を受けて

縄は 奇妙な生きものだ 女の肌にまといつき 乳房
をしめあげ 手足の自由を奪ってしまう それでいて
女を 歓喜の頂上に導きあげ 法悦の淵にひたらせる





首つり人形

あたしはあやつり人形でなく
首つり人形 言われ
るままに おどりつづけるのが
悲しい宿命でしょう



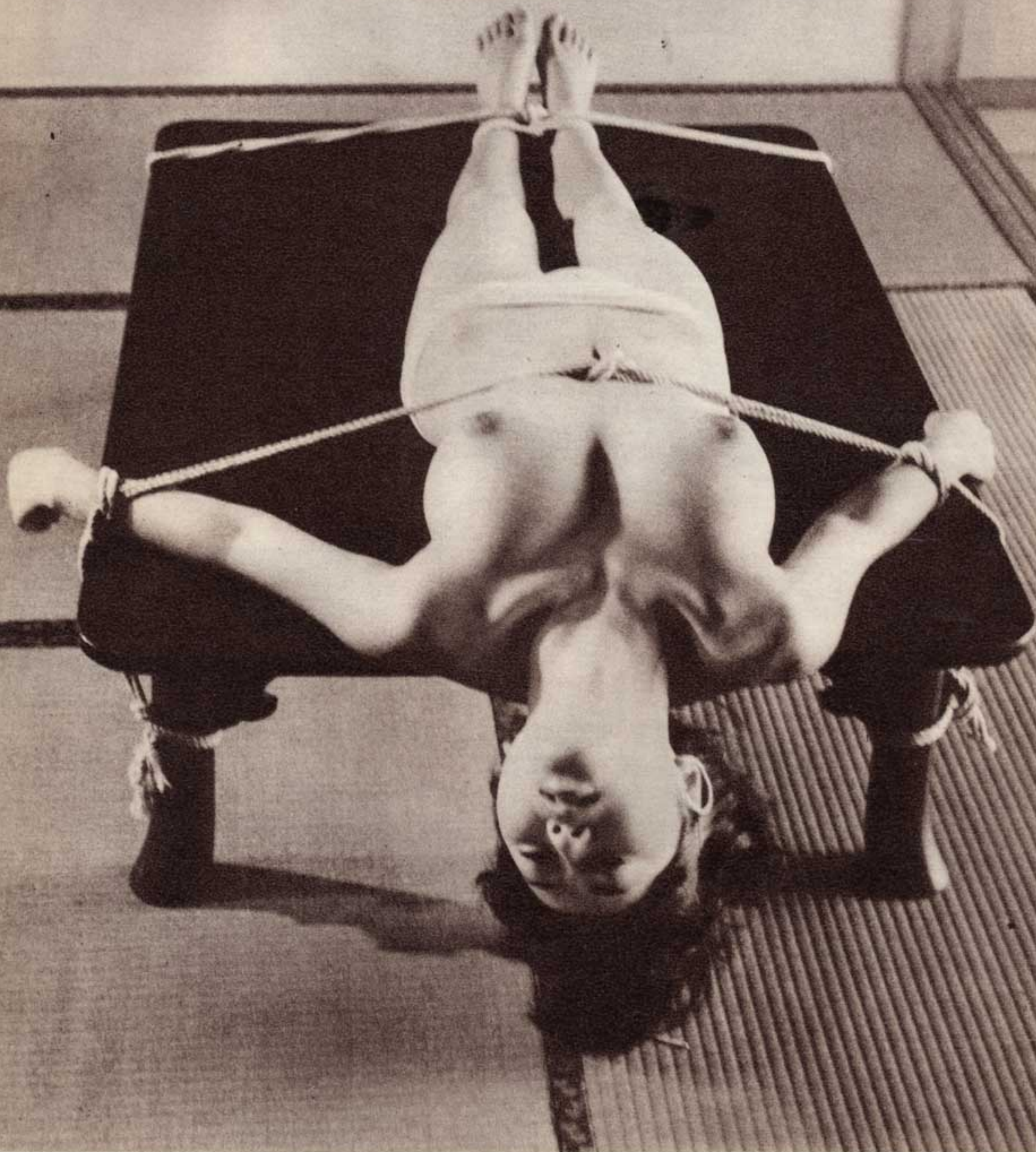
棒責め

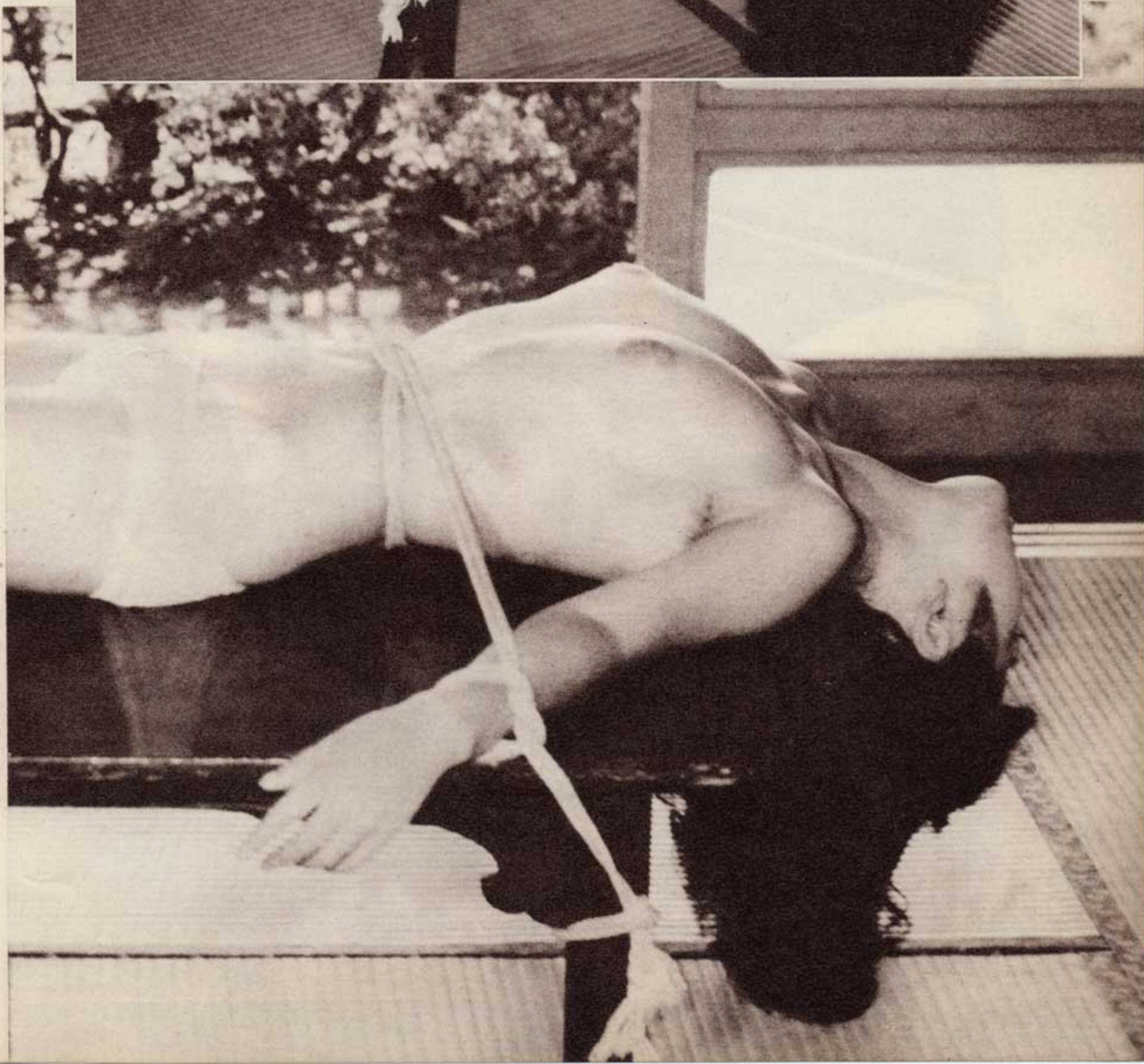
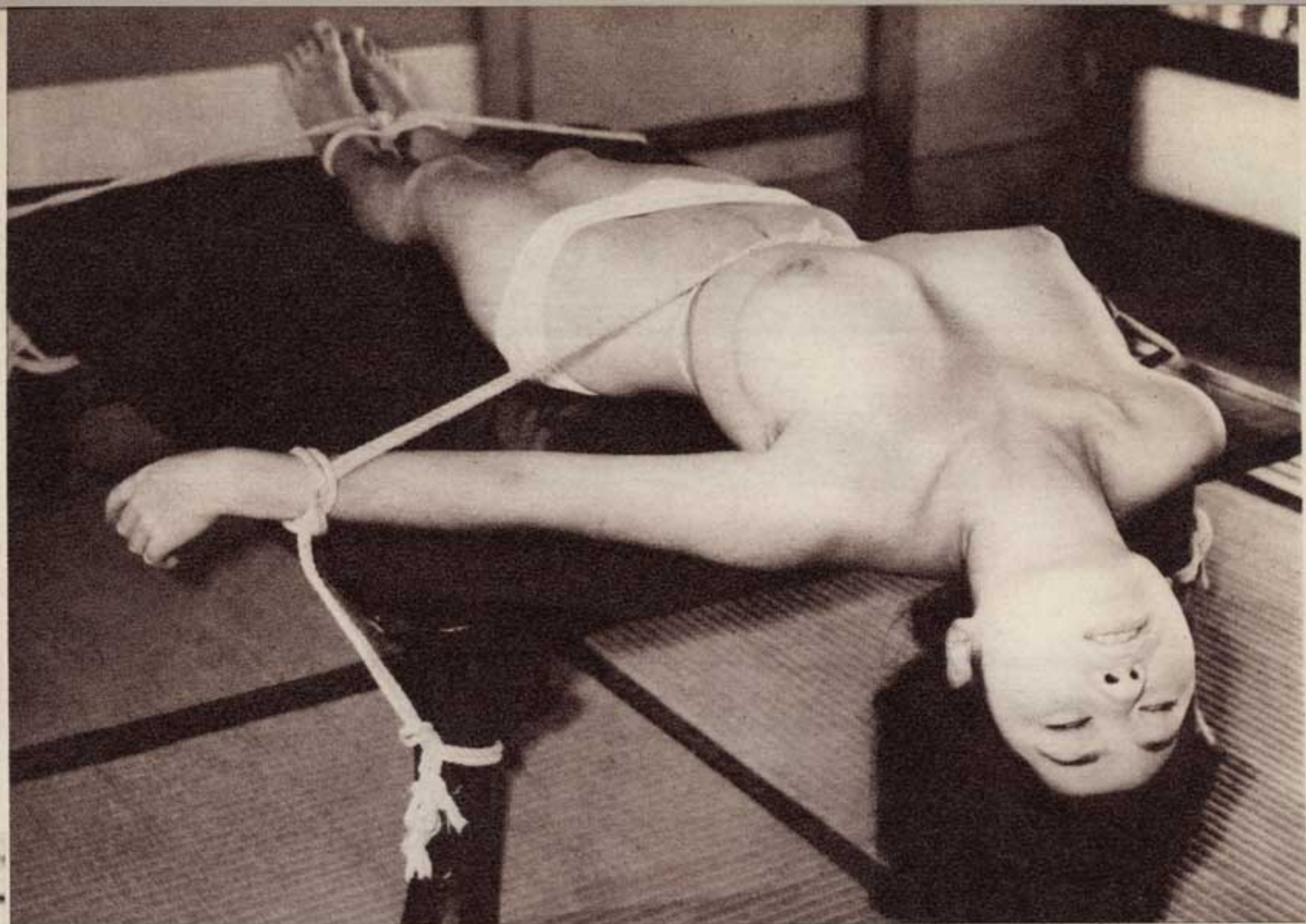
太い重い棒が 緊縛された女の
肉体を責める のしかかる重量
が 縄の痛さを倍加し 身動き
できない不自由さを よりいっ
そう増す この加虐のアイディ
アの果てるとき 女は 意志を
失って 極楽へ昇天するとい
うが その行くえは誰も知らない

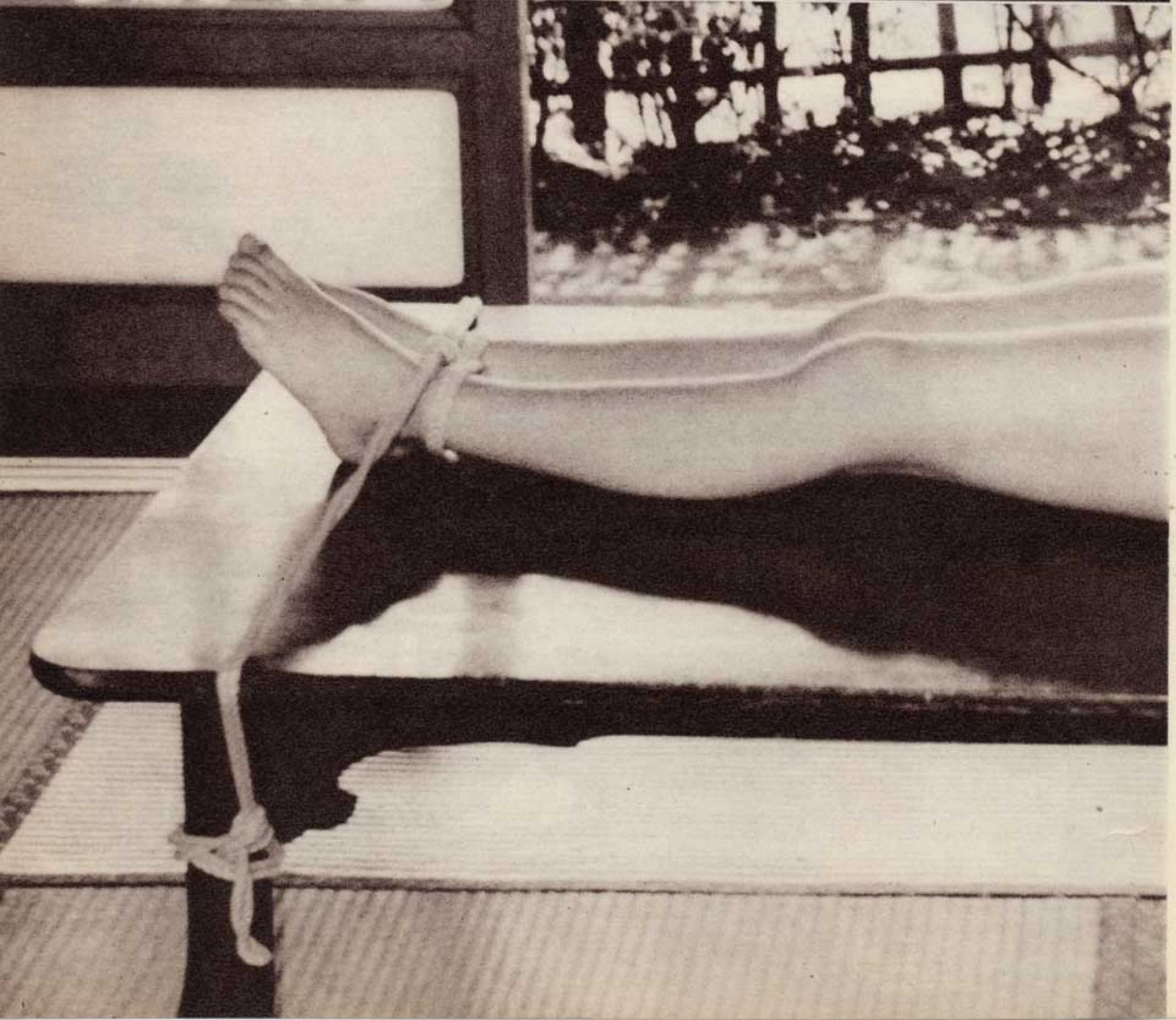
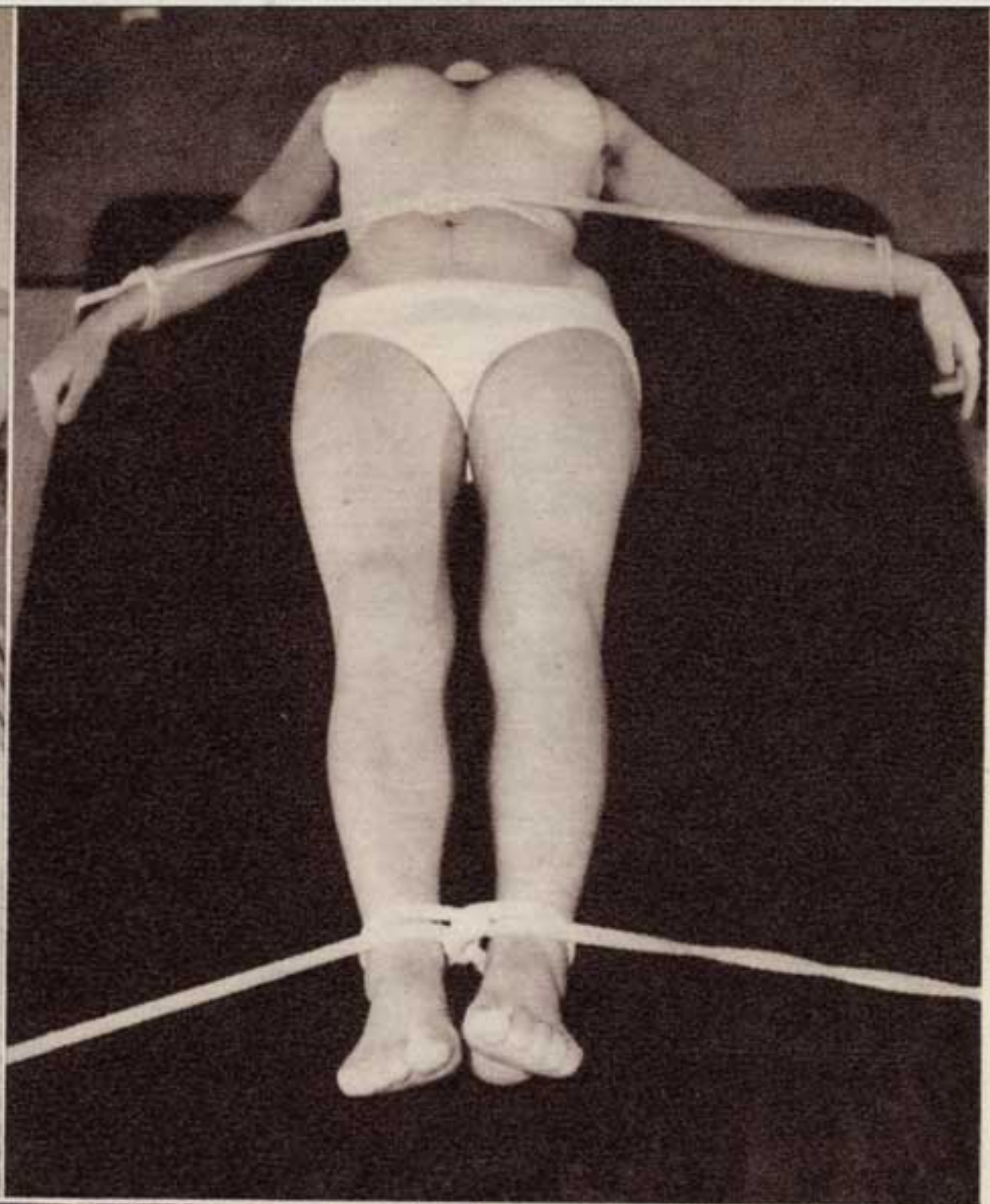


お膳の上の生きづくり

あたしは 捕えられた人魚 お膳にくくりつけられて
サテ料理人は どんなふう to 包丁を入れるのだろうか









クサリしばり

クサリは 荒々しく 肌
を噛み からだに巻き
つく 身動きすれば
苦痛を倍加させる

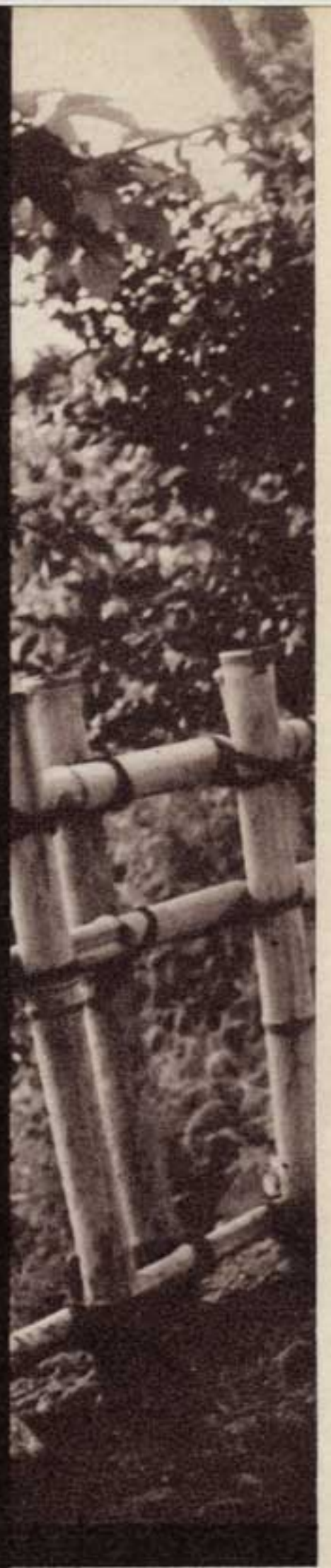




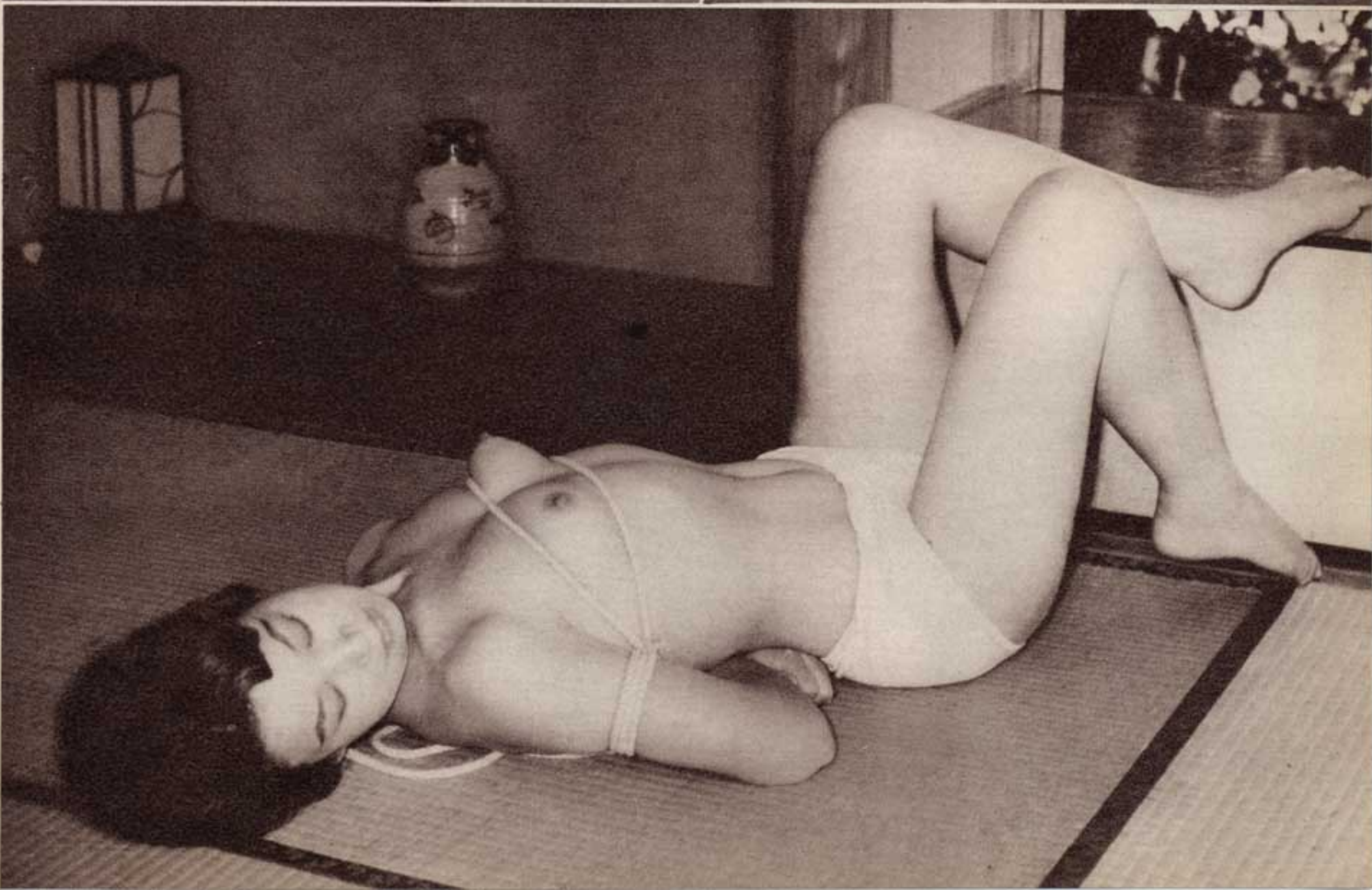
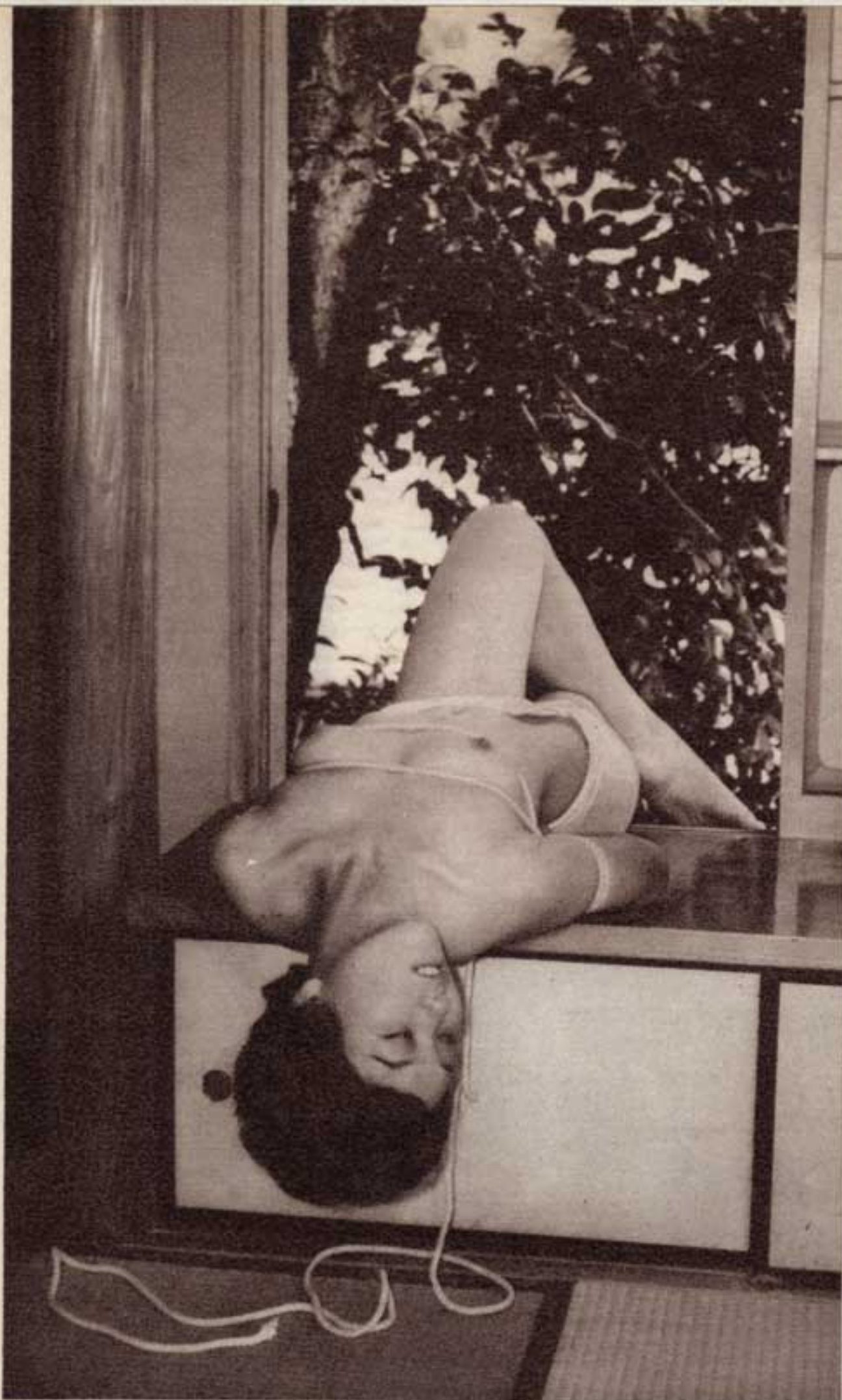
憂いの花

野の 小さな木に咲いた 白い肉体
 つつましく 花ひらいた ひとりの女
 乳房をしばりあげた綱が そのまま枝にのび
 そこで 彼女を つなぎとめている
 たそがれの思いふかく
 憂愁の心にとざされ
 あわれ ひっそりと囁みしめる 受縛の感覚





そこだけが 彼女の生きる世界なのか
静かに ものうく 葉かげに咲く花のように
憂いをふくんでいる ひとりの女





投げだされた姿態

縛られて 投げだされて しかも
首は宙ぶらりん 血が下がり 脈搏
がせまり これから残虐の幕が開く



変わった木馬

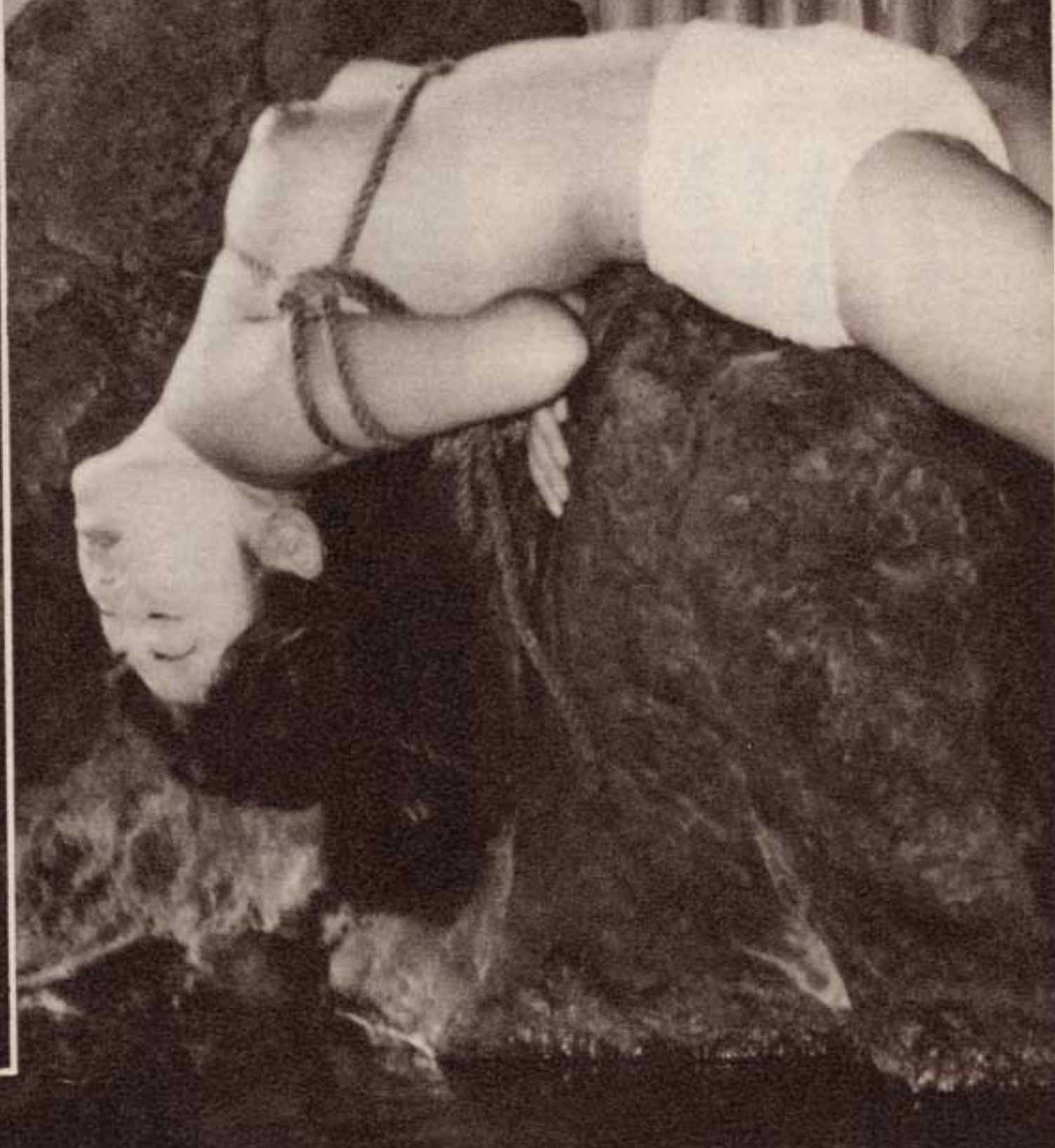
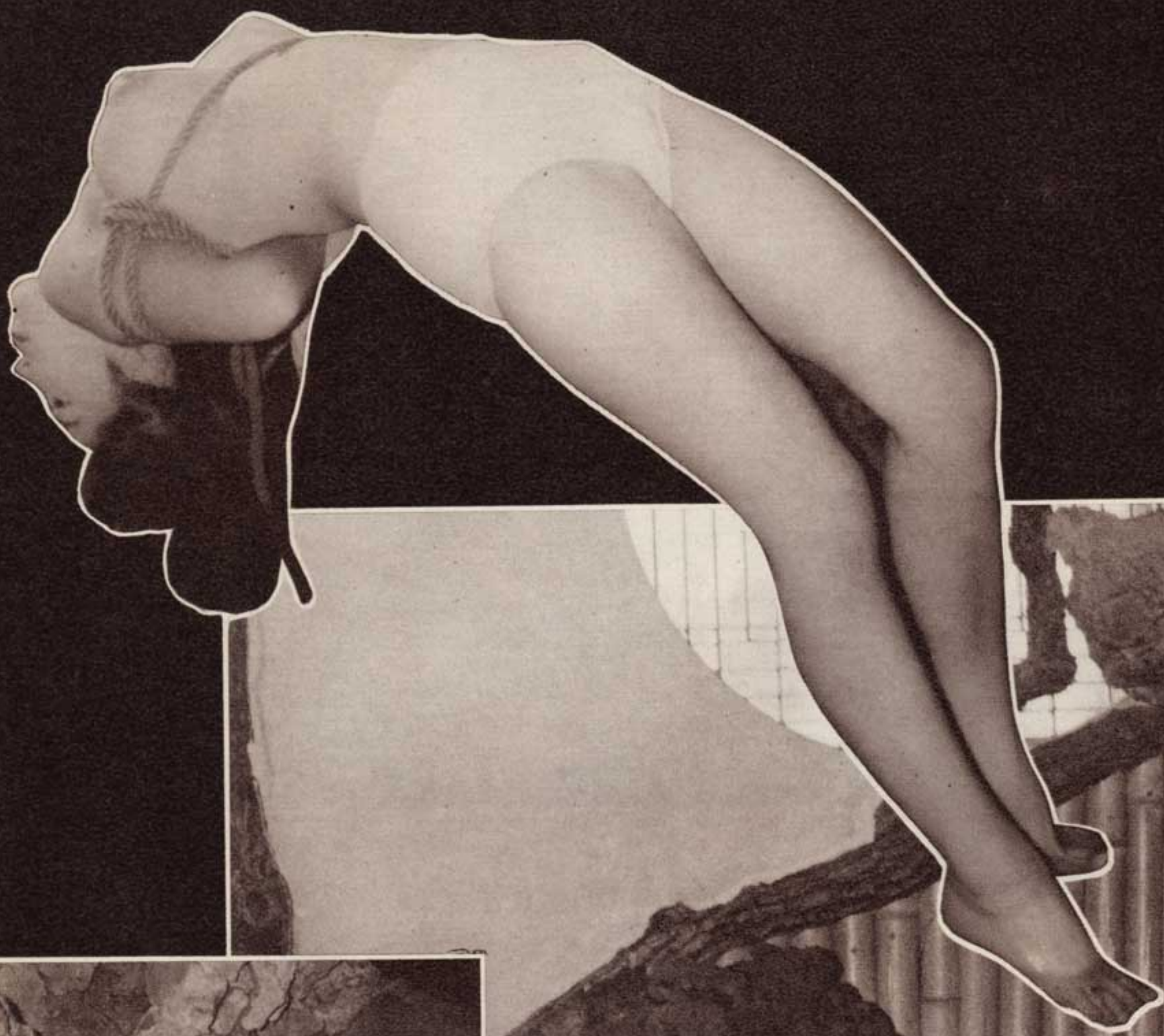
ハイシ ドウドウ お馬で責めりや
 バカバカ ポカポカ からだが痛む
 しかも 手綱は うしろ手しばり
 自由のきかない ハダカの女騎手
 身動きするたび 急所にひびく
 からだを曲げてても かがんでみても
 この責め方は 磐石無類
 どうもがいても 逃がられない
 女を責める 変わった木馬



岩そり

縄でしばられただけでなく
岩にのせられ ぐんと身を
そらされた女の肌に ごつ
ごつした岩の感触が 痛い
身うごきすれば 水に落ち
るし 処置を失った姿態だ







カゴの荷物

カゴに入れられ ハダカの女が ガンジガラメに縛られて どこへ送るのだろうか あて名もない荷物 差し出し人が非情なのだろうか 荷物の女がマゾなのだろうか まことに不思議なカゴの荷物 押し込められた女の肌が 妖気をはらんで光り つやつやと 輝く

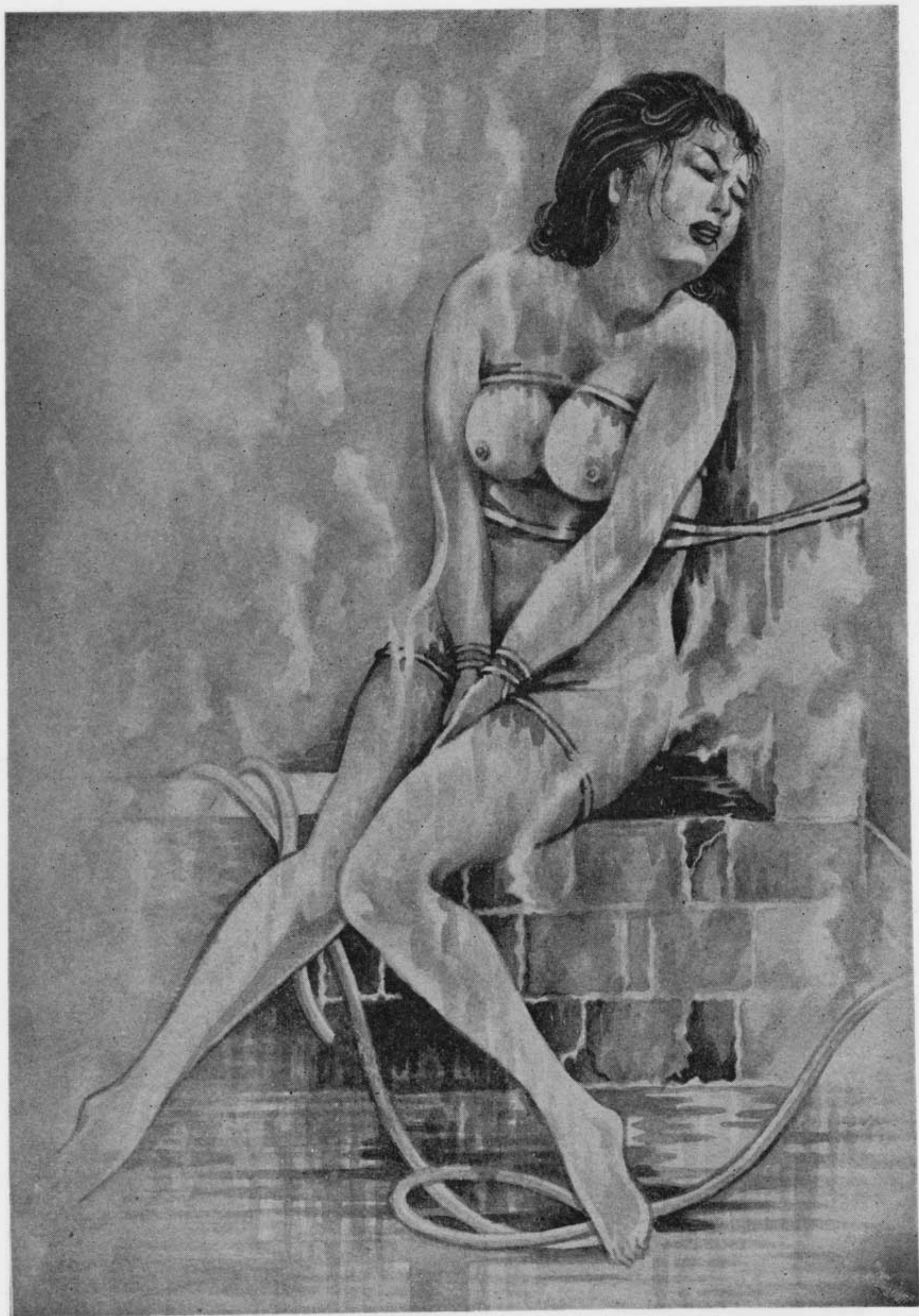




からす天狗の 襲撃

山から降りたからす天狗が 美女
をさらって縛りあげ サテ 八つ
裂きにして食おうというのか そ
れとも 切りきざんで血を吸おう
というのか とにかく 無残な一
幕が くり展げられることだろう

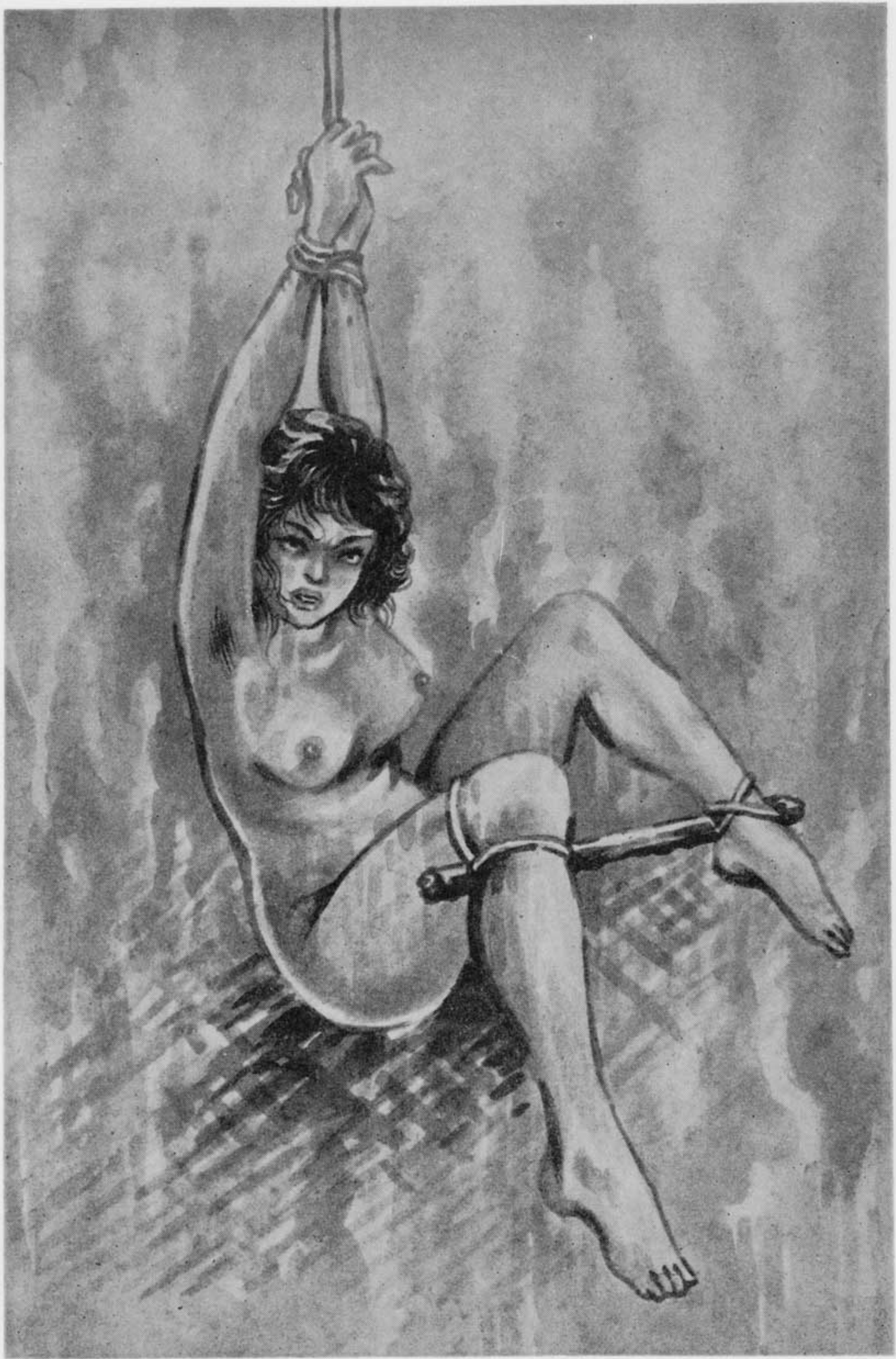




湯 気 む し 縄の感触が湯気に柔らげられ 快いしびれの中の陶醉 田上恵子・え



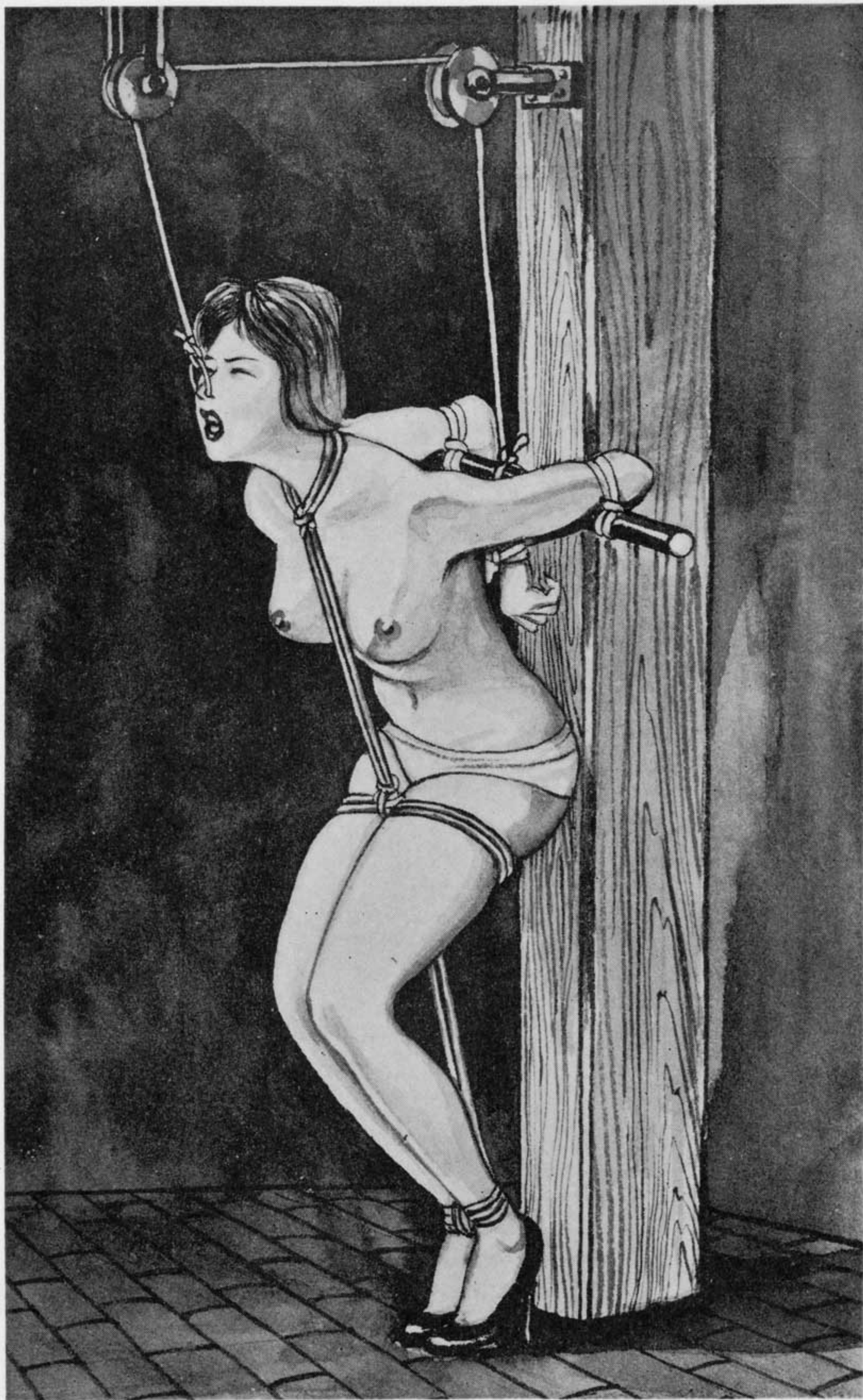
さかさ髪づり 髪の毛と片足で体重を支えている 激的な痛みが走る 田上恵子・え



手首宙づり 両手首に全身の重みを受けて空中の不安定な姿態の美 田上恵子・え

ハナ輪責め器

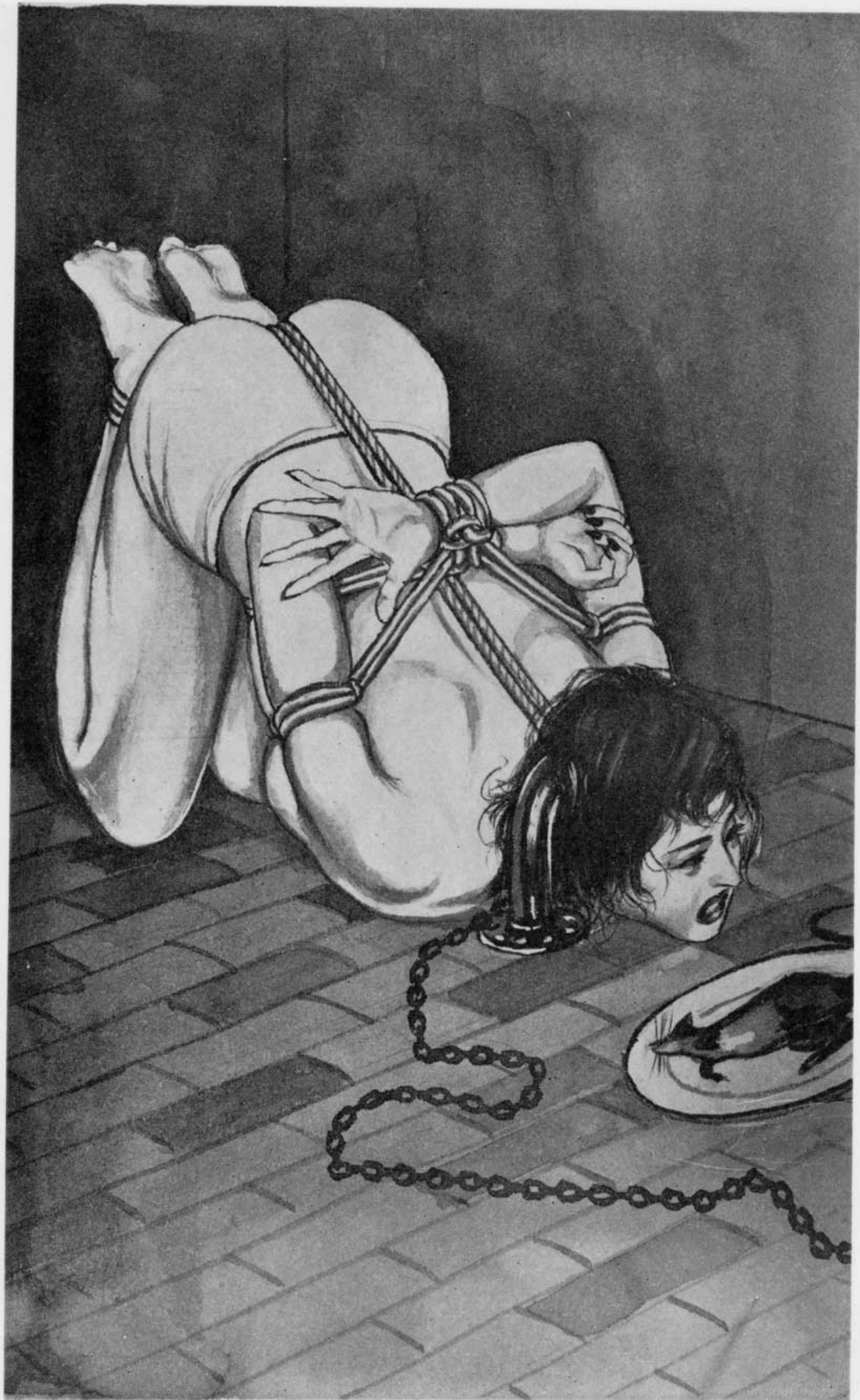
ハナ輪の先の綱が滑車で手をうしろに縛った棒につながっている。手を動かせばハナがつれる。江馬美久・え

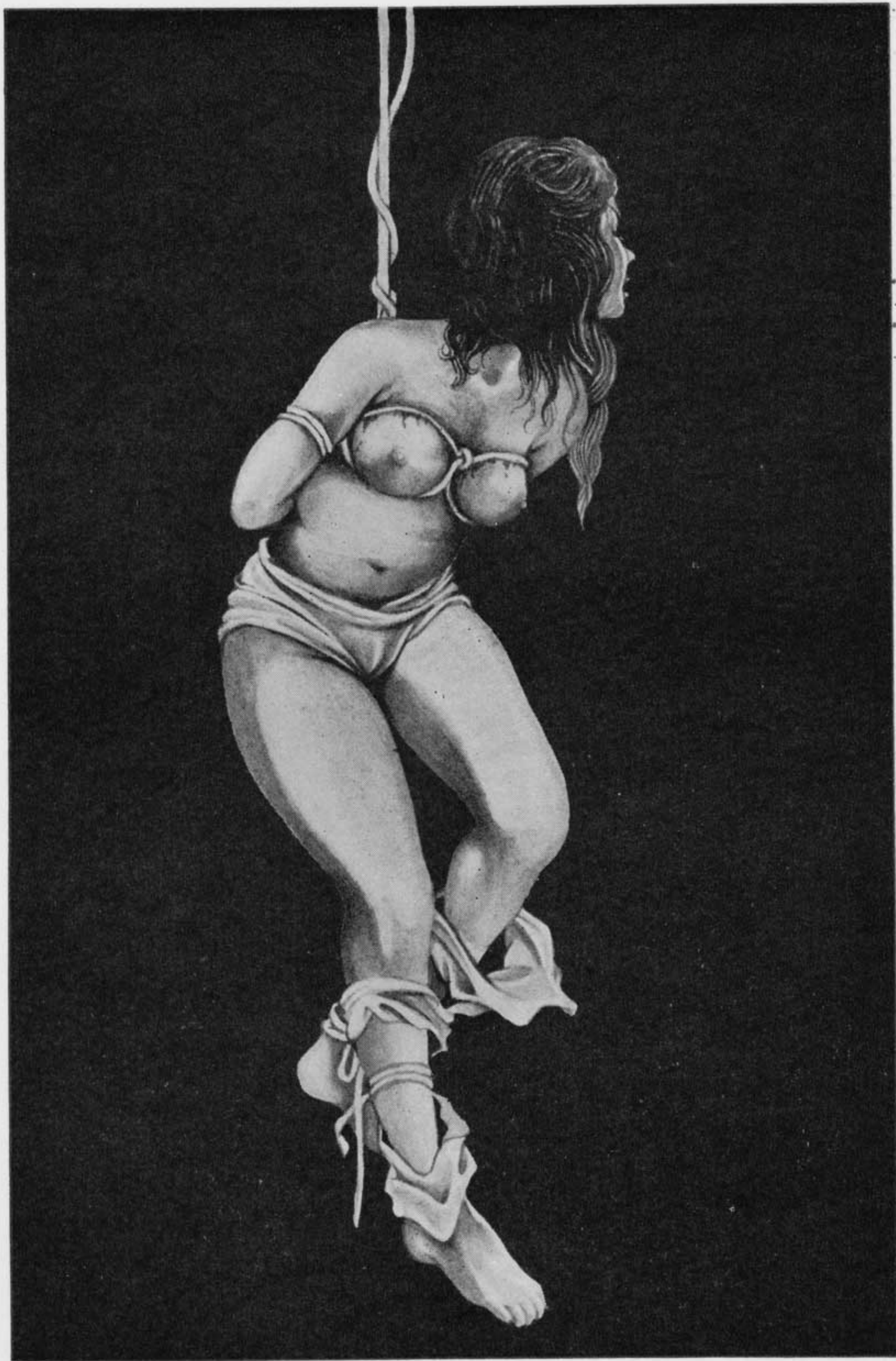


ネズミをお食べ

ワナにかかったからには ジタバタするのじゃないよ 死んだネズミが 格好なご馳走じゃないか

江馬美久・え





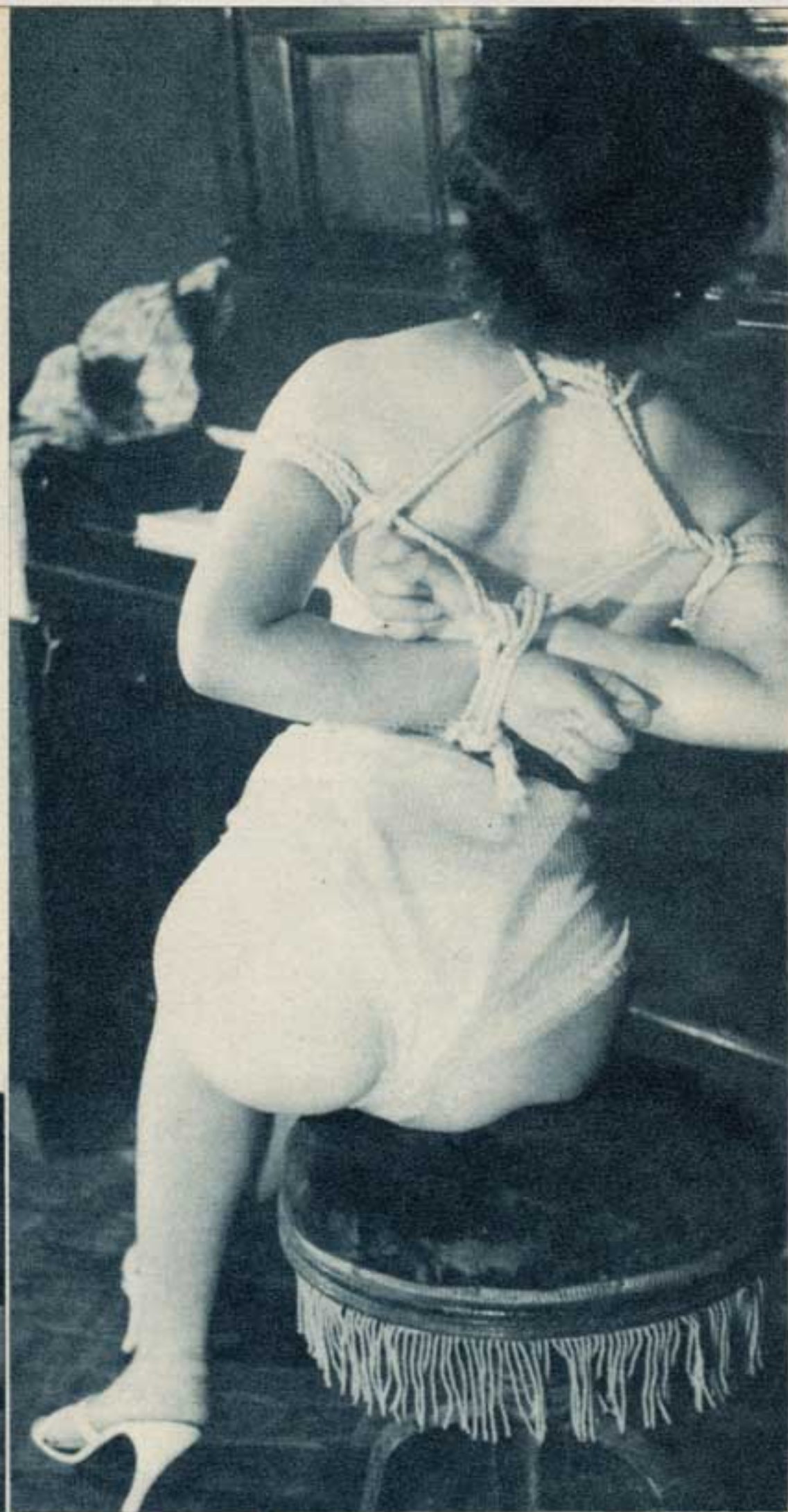
うしろ手づり 乳房には縄のブラジャー それをうしろから吊るんだ 田上恵子・え

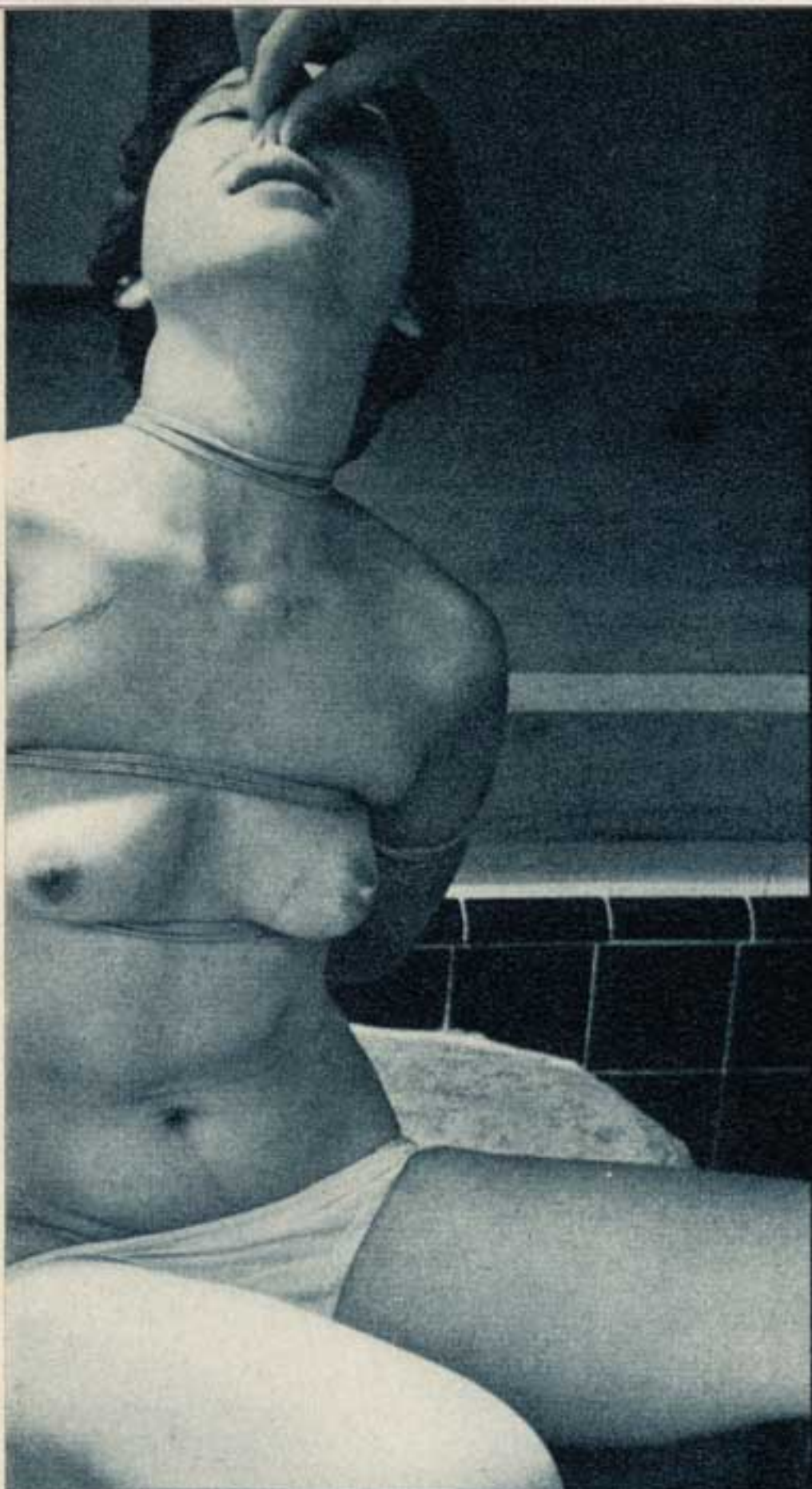
ピアノのある風景

近代的なピアノの黒に 縛られた女の白い肌が映えて この階律が 縄を伝わって女のからだにしみとおっていく そして今度は 縄が音律を早め 緩急自在のピツチカット ああ 女と縄の交響曲









鼻をつままれて

鼻は 女の急所 息をするだけでなく においをかぎ
わけ 甘い官能を伝える器官 だから 鼻をつままれ
ると 女は 息苦しさだけでなく 官能を失う だが
失われたものは 苦痛となって 陶酔の淵に驀進する





静かなる苦悶

女の生理の不思議さは 縄目を受けて
うずきます 女のからだの微妙さは
いじめられて喜びます そこで 女は
夢みます 七色のニジのかかる夢 あ
らゆる花が咲いている天国の庭を歩い
ていく 自分の姿を空想します そこ



では 繩は軽い羽衣 ふわふわ飛んで
遊びます 妙なる樂の音 甘いにおい
なにからなまでに 素晴らしく きれ
いな世界が 女のからだの見る夢です

目かくしと さるぐつわ

目かくしは 視界をさえぎり さる
ぐつわは ことばを拒否する 人間
に与えられた目と口の機能を奪われ
たとき 与えられるものは やはり
苦痛だ 目かくしは 暗黒のなかに
閉じこめ さるぐつわは 呼吸をせ
きとめる だがそこにも 女が棲息
する世界があるのだと彼女らはいう







窮屈な姿勢

長いあいだ 同じ姿勢のままで
おかれると じわじわと 苦痛
が からだじゅうに しみとお
り おもむろに 広がっていく



肌を噛むクサリ

金属の冷たさが 女のからだを冷やし 鉄の堅さが 女の肉
体をさいなむ 身動きをすれば荒々しい苦痛が 肌を噛み
血がにじむ その痛ましさが 女を いっそう 美しくする



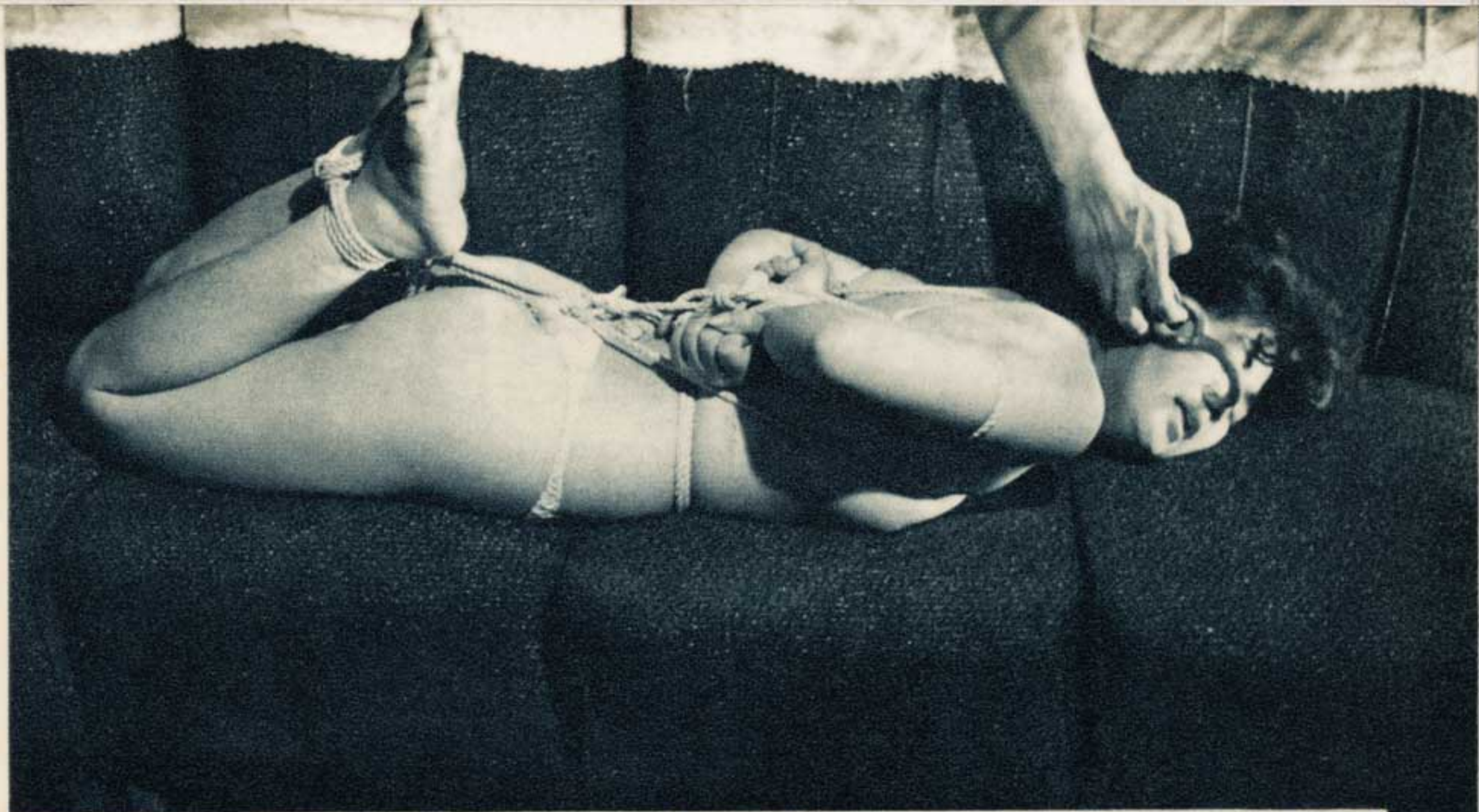


屈辱のポーズ

女が恥ずかしめられるのは 犯される
だけでない 縛られて ムチ打たれて
くすぐられて 痛めつけられて 踏ん
ずけられて すべて 女のプライドを
キズつける この屈辱に耐える 雑草
のように根づよい 女の生命力よ た
くましく ねばりづよい 女の息の長
さは いったい どこで作られるのか







カギで責める

鉄のカギを 鼻にひっかけて 屠殺した肉の
ように吊ろうというのか 見ただけで痛まし
く ハラハラするが これが嗜虐というのか

奇妙な 絵^{BIZARRE}画 展覧会

<解説・森下高茂>

インドの縄芸——という読物のさし絵。脚部の狭窄，上腹の縄の食い込み方，美しい表情，縛りのポイントを余すなくついている。ジョン・ウィリーの作品。





夢の教室——いたずら書きで罰を受ける女生徒と厳格な女教師。この、何十遍か繰り返された画材も、女教師の扮装に、新しい生命を感じさせる。



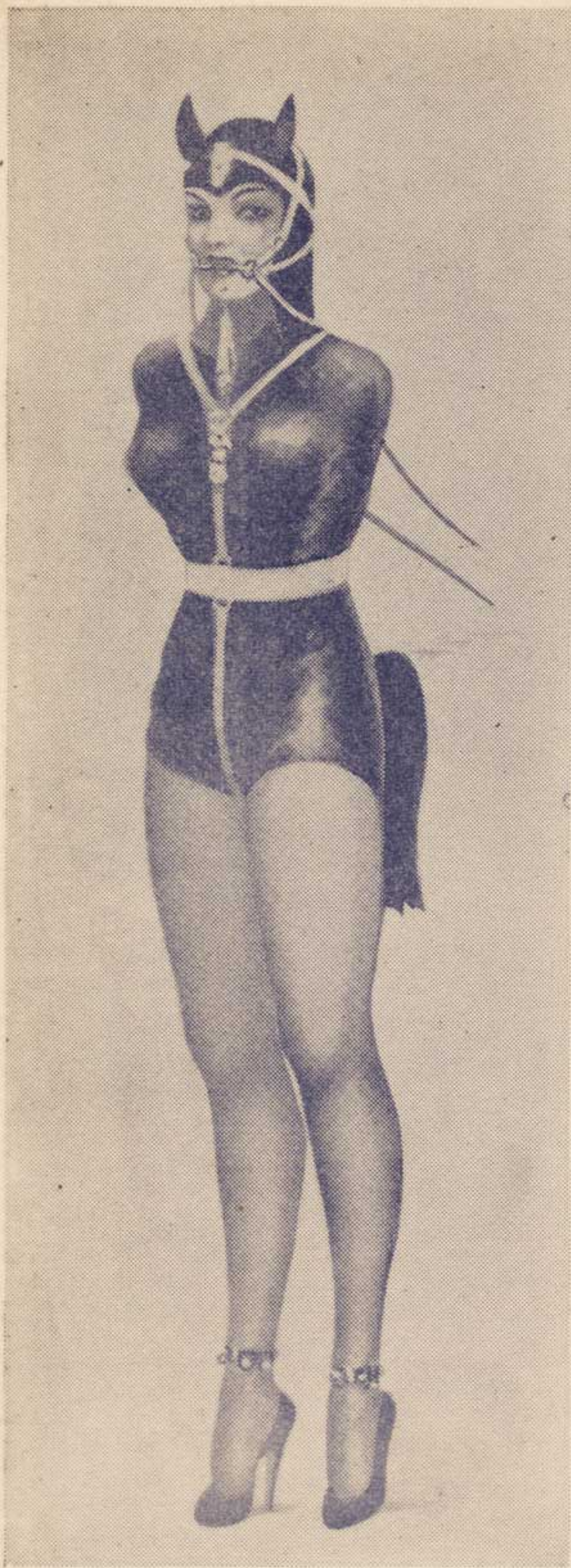
こんな目にあうなら男の子になりたいわ——現代女性の身体美容を諷刺したカリカチュア。「女性の美しさは苦痛による鍛練に起因して完成される」というジョン・ウェリーの主張が窺える。



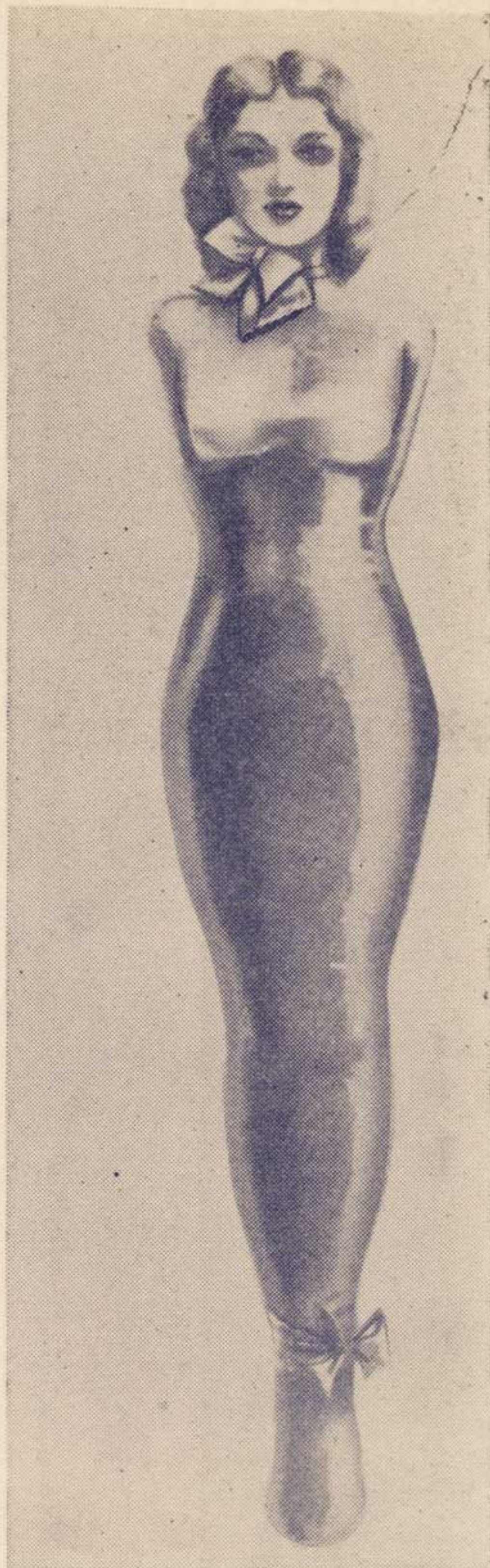
完全なミイラ・スタイル——1972年のモードという諷刺的想像画。完全な狭窄の華やかな考案。ジョン・ウィリー作。



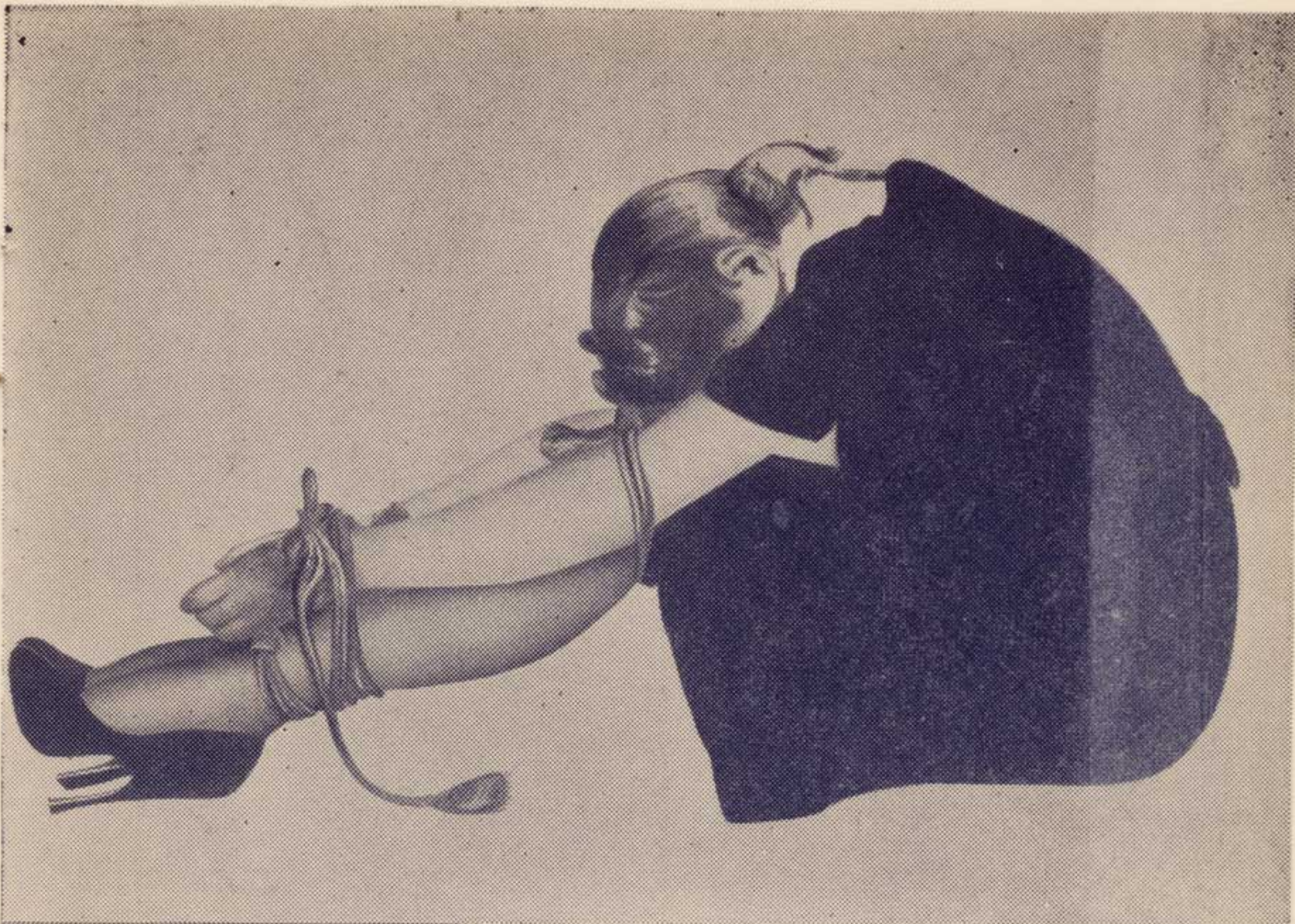
囚人服——仮装用アイディアの一つ。こういったカイエもまた、広い想像の世界を約束している。



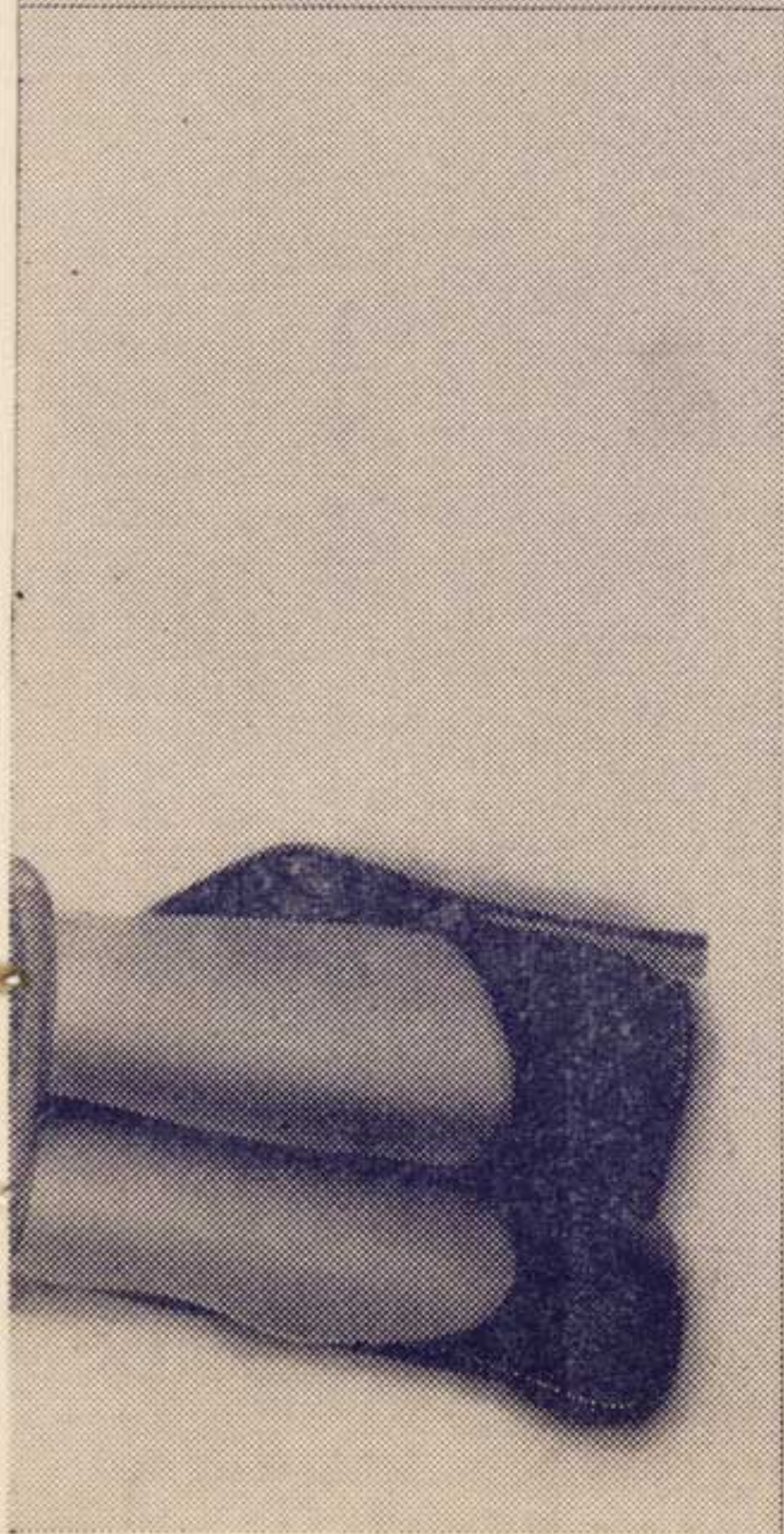
ポニイ——脚に鈴，両手をうしろに，クツワをかまされ，胸がい，臀がいをつけられた人間ポニイ。ジョン・ウィリーの好む画材だ。



ロング・スカートの変遷——タイトを誇張し，手錠，足鎖を加えたもの。タイトはヨチヨチ歩きから縛りの変型と見られる。



こんな目にあわないように——柔道で護身術
を身につけましょ、という題の縛りの写
真。1本縛りの横転したポーズは最も一般
的であるが、モデルの美しさと横転したこ
とによって、迫力のあるものとなっている。



こんな目にあわないように——柔道を学びま
しょう、と題した写真。左の写真と同一系
統のものだが、これは立体的なポーズ。両
手、両脚を一つに縛り、サルグツワをかま
せている。高いハイヒールがアクセント。





猫背矯正器——極度に圧縮したウエストが、
ある種の人々に、たまらない魅力だろう。

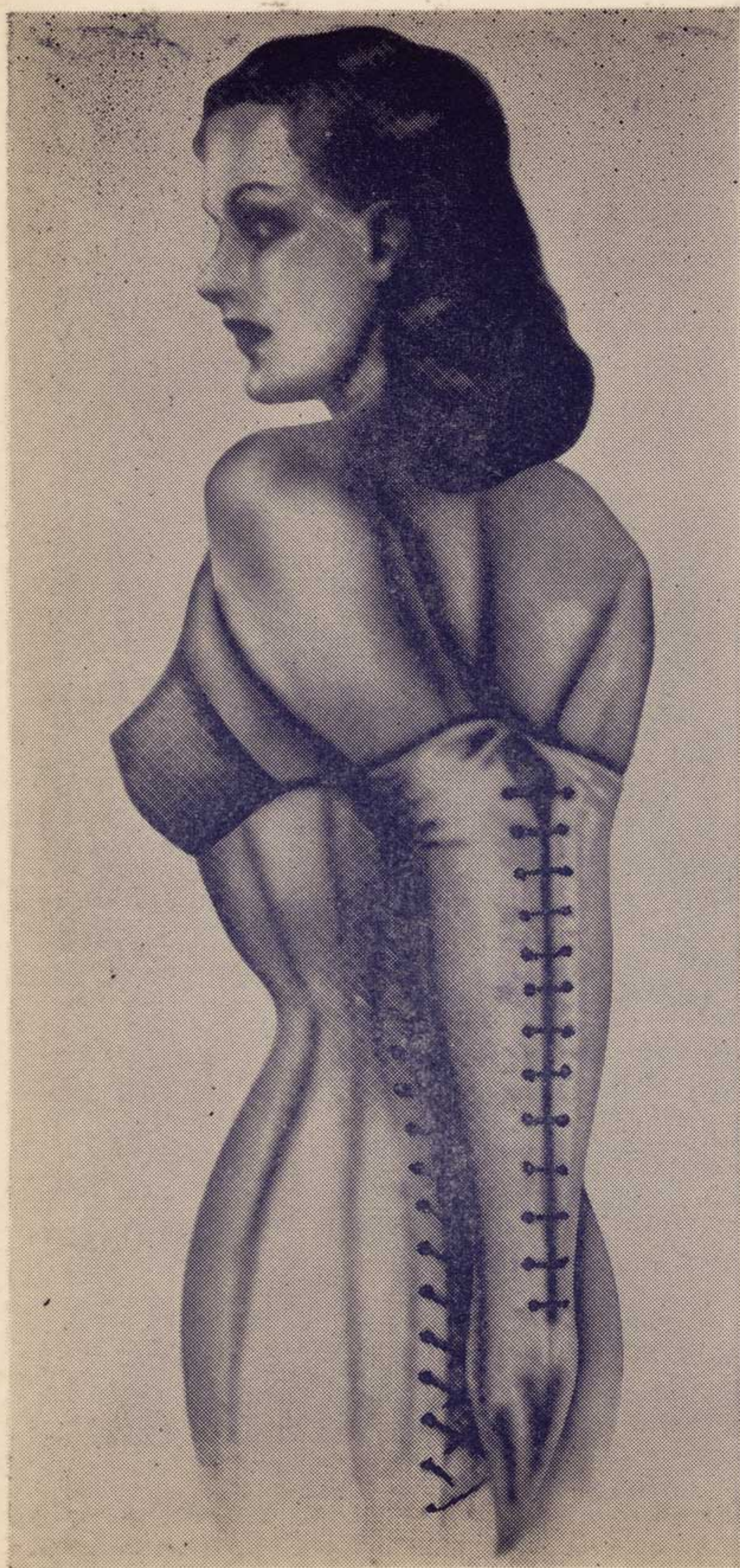


三方締め式胸衣——コルセットもウエスト・ニッパーも、ともに背後で締めあげるものが多いが、これは、三方から締め上げて、完全にウエスト部を圧迫するという想像図。

全身美容の新方式(下)——パトリシア嬢(読者)からの手紙につけたさし絵。両脚を1本にして長靴状の皮袋にはいり、その上から胸部を極度に圧迫したウエスト・ニッパ―をつけてソファに横になるという方法。パトリシア嬢は、このままの姿勢で2時間から4時間15分まで「休憩」するという。

単式手袋(左)——強烈な苦しみを与えるウエスト・ニッパ―と対になっている両腕1本の手袋。もちろん拘束具の変型である。







婦人用特殊靴のパレード——靴フェチシストの夢は、ここに、限りない魅惑と、おびただしい財宝を認めて開花する。それぞれが、特殊な愛撫の目的にかなうよう作られているから。



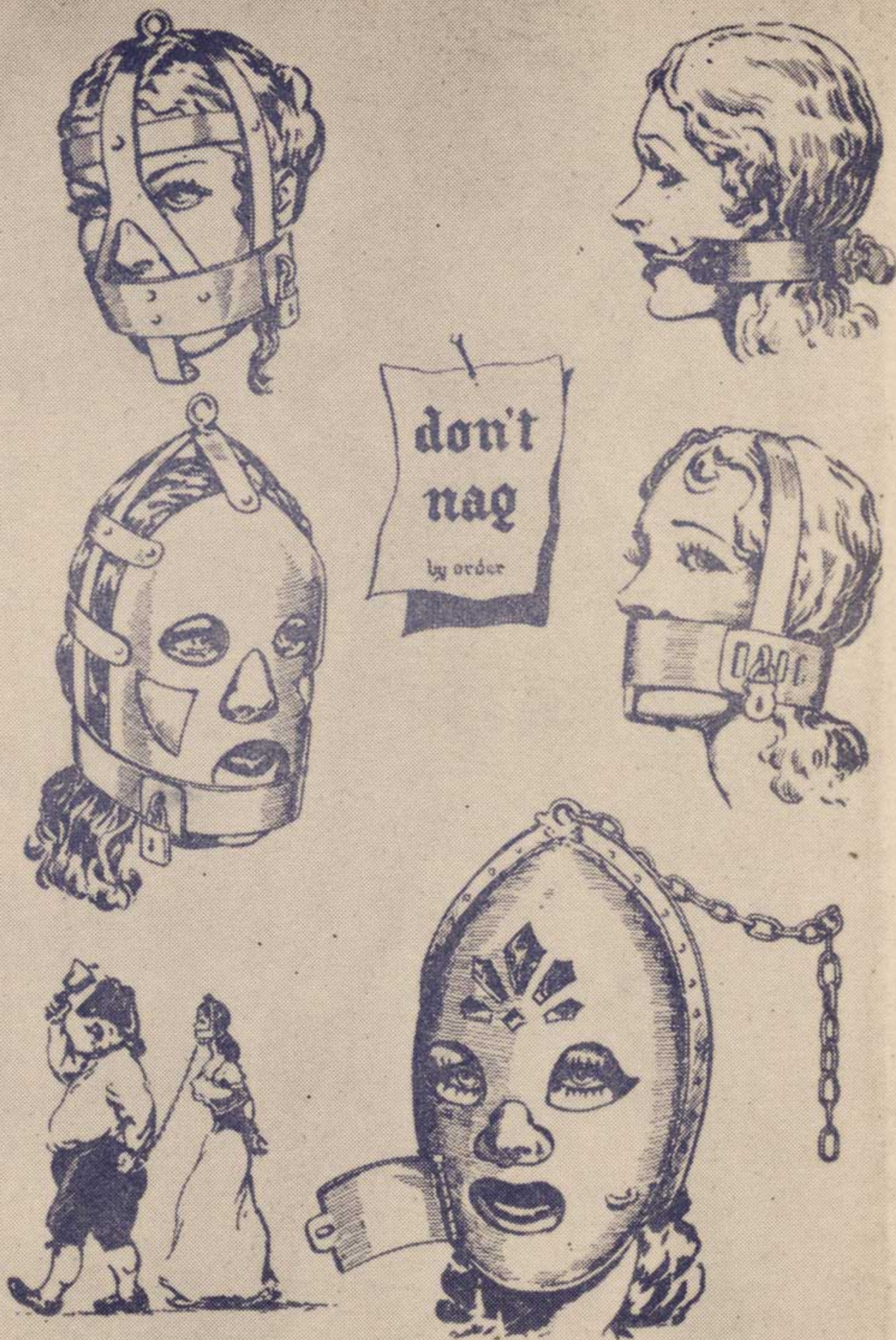
高価で完璧な冬支度——太腿までの、ボタン止め式の皮の長靴は、マゾヒスト用である。色違いのボタンの列が皮と対比して、この靴をはく女性の足下に身を投げだしたくなるものだ。



素晴らしき乗馬服——スペイン風の帽子、長いムチと皮手袋、皮製コルセットと皮製ストッキング(これは断じて長靴ではない)、鋭い拍車、すべてが女性のサディスタックな美の要件になっている。この衣装は、もちろん、人間にまたがるとき効果を發揮する。ジョン・ウィリーのカイエ。



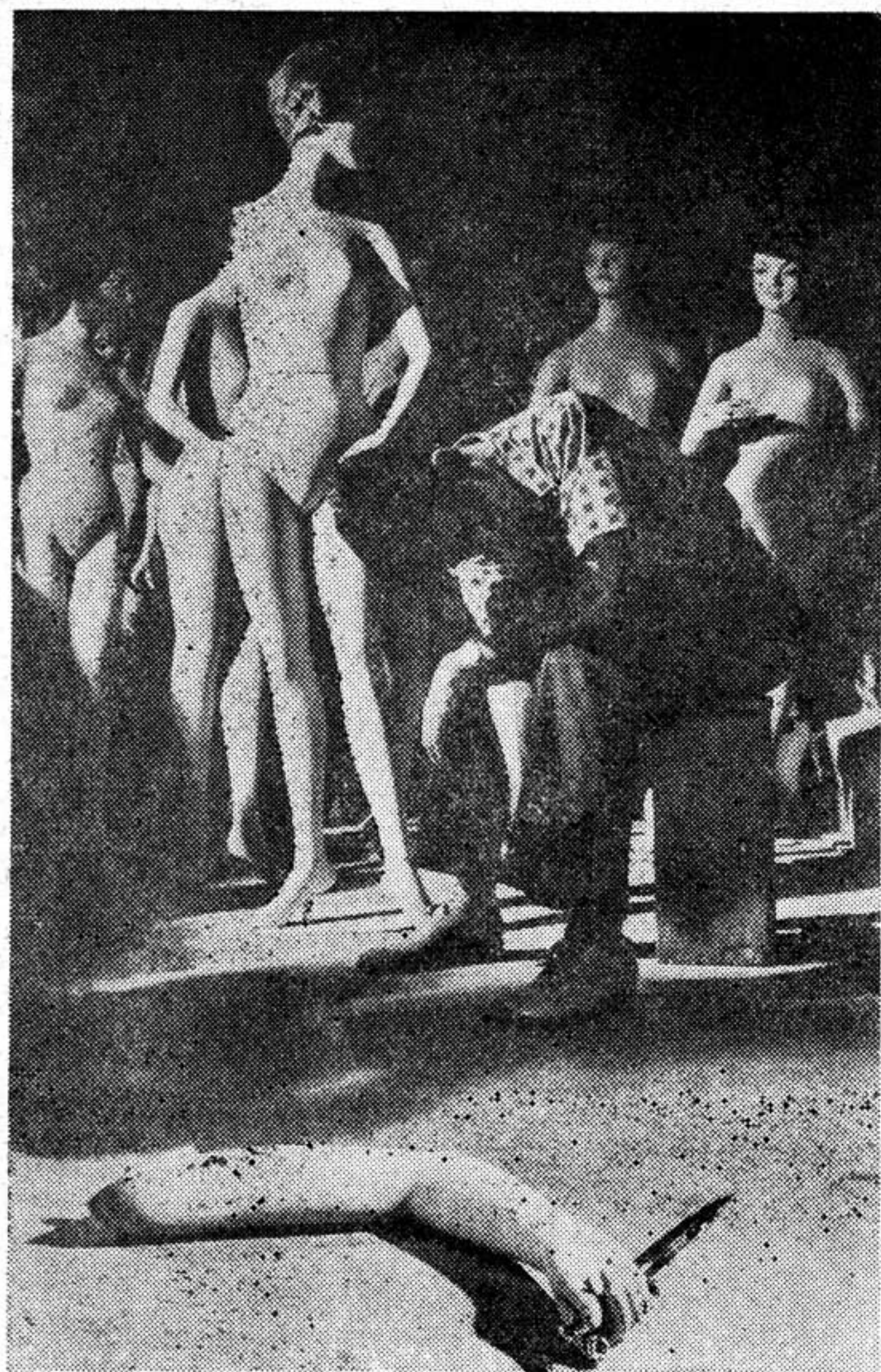
猛獣使い——長いムチ、武装としてのコルセット、長手袋、黒く長い髪と情熱的なひとみ、編み上げ式のハイヒール長靴、異論もあろうが、これは現代のファラ・モロともいえよう。この女性の前に自分がいたらという想定で描かれたものである。



はずしてはいけない——^{かんこうぐ}箠口具5種のデザイン。右側の上と中のもの以外は、実在した刑具である。美しさとあわれさを一つにした表情と考案とが、多くの暗示を与えている。

トリックによる残虐

佐村 弘



先日、ある週刊誌で、おもしろい写真が目についた。ヌーベル・バーグ（新しい波）といわれる新進人気の四人の推理小説作家による、ミステリーの構図というやつだ。

推理小説の作家というのは、いつも、その作品の中で、いろいろな人間を殺している。しかも、その殺人方法に、あれこれと趣向をこらす。それだけに、それぞれの発想がおもしろく、こった場面を想定していた。

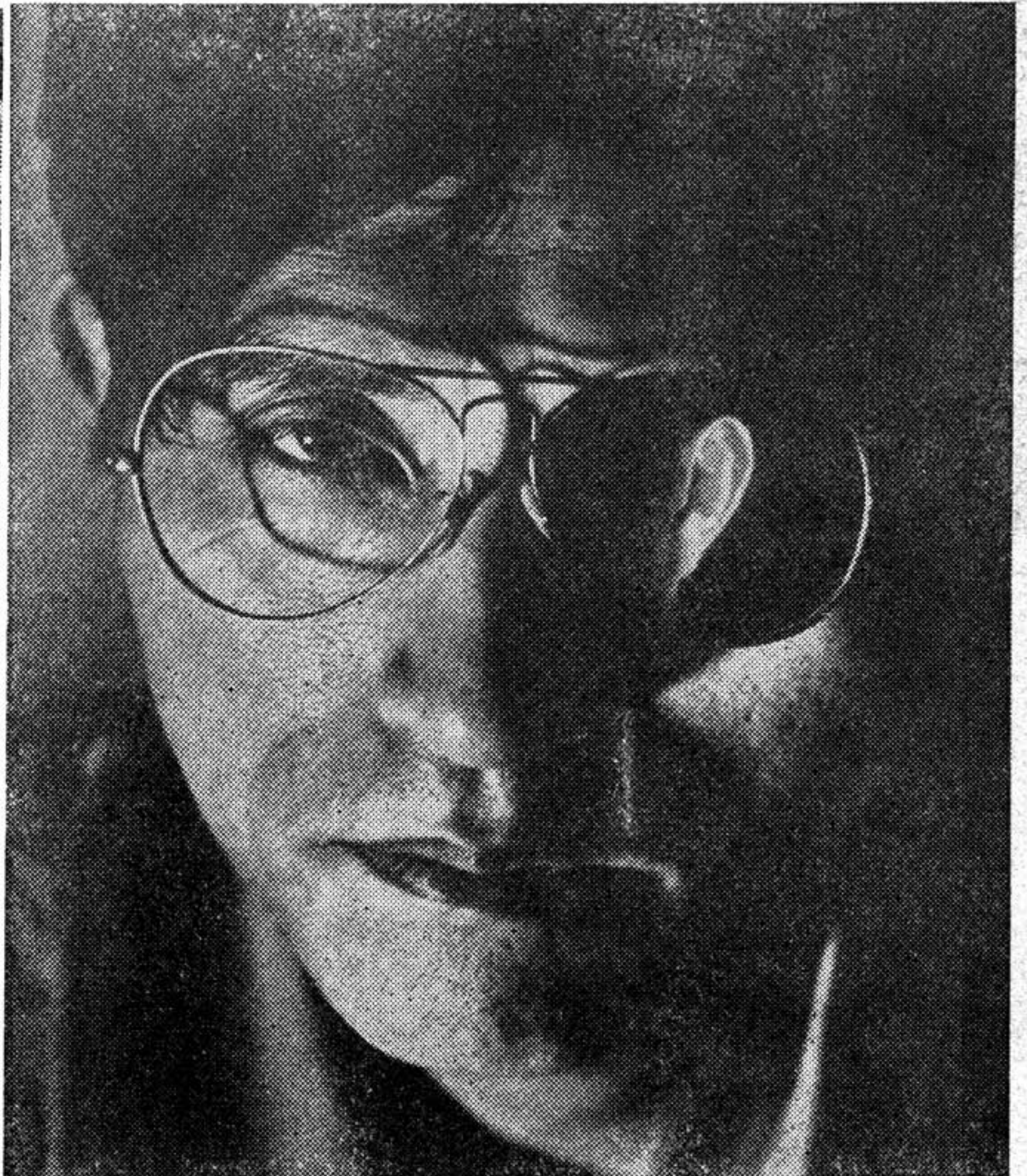
上の写真は「居眠り」と題した作品であるが、作者のことはをかりると、主人公の作者の演技が拙劣なため、死んでいると見えないだろうから、居眠りの夢と思えというのであるが、どうしてどうして、マヌカンの片手ににぎられたナイフが、無気味なムードをただよわせている。

次のページの下の写真は「家宝」と題する作品で、町の中で耳を拾った話を小説にしたのだが、こんどは、その耳が眼鏡に映ったところを写真にしたのだというわけである。

耳というものは、切り落としてしばらくすると、ふくらんでロースのようになり、やがて変色してきて、ついにはシイタケのような乾燥した状態になるそうだが、やはり気持ちのいいものではあるまい。

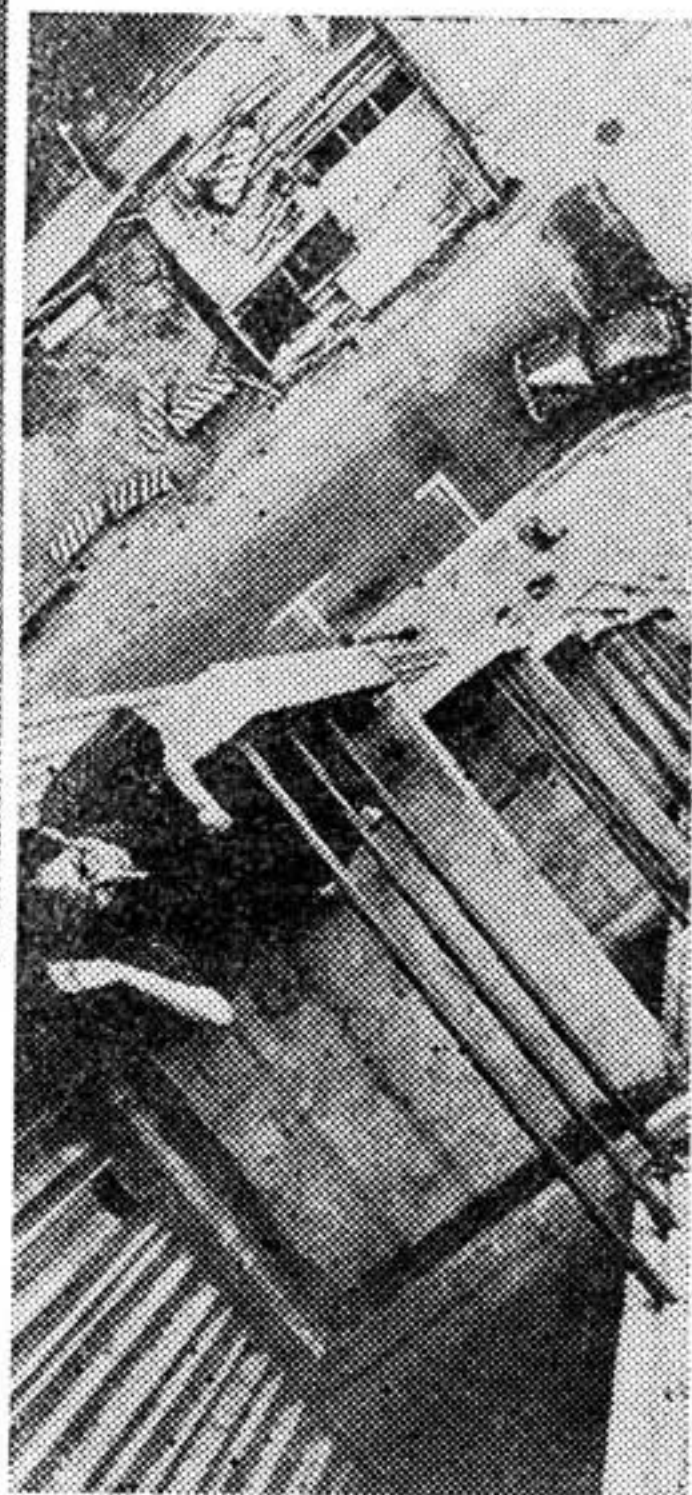
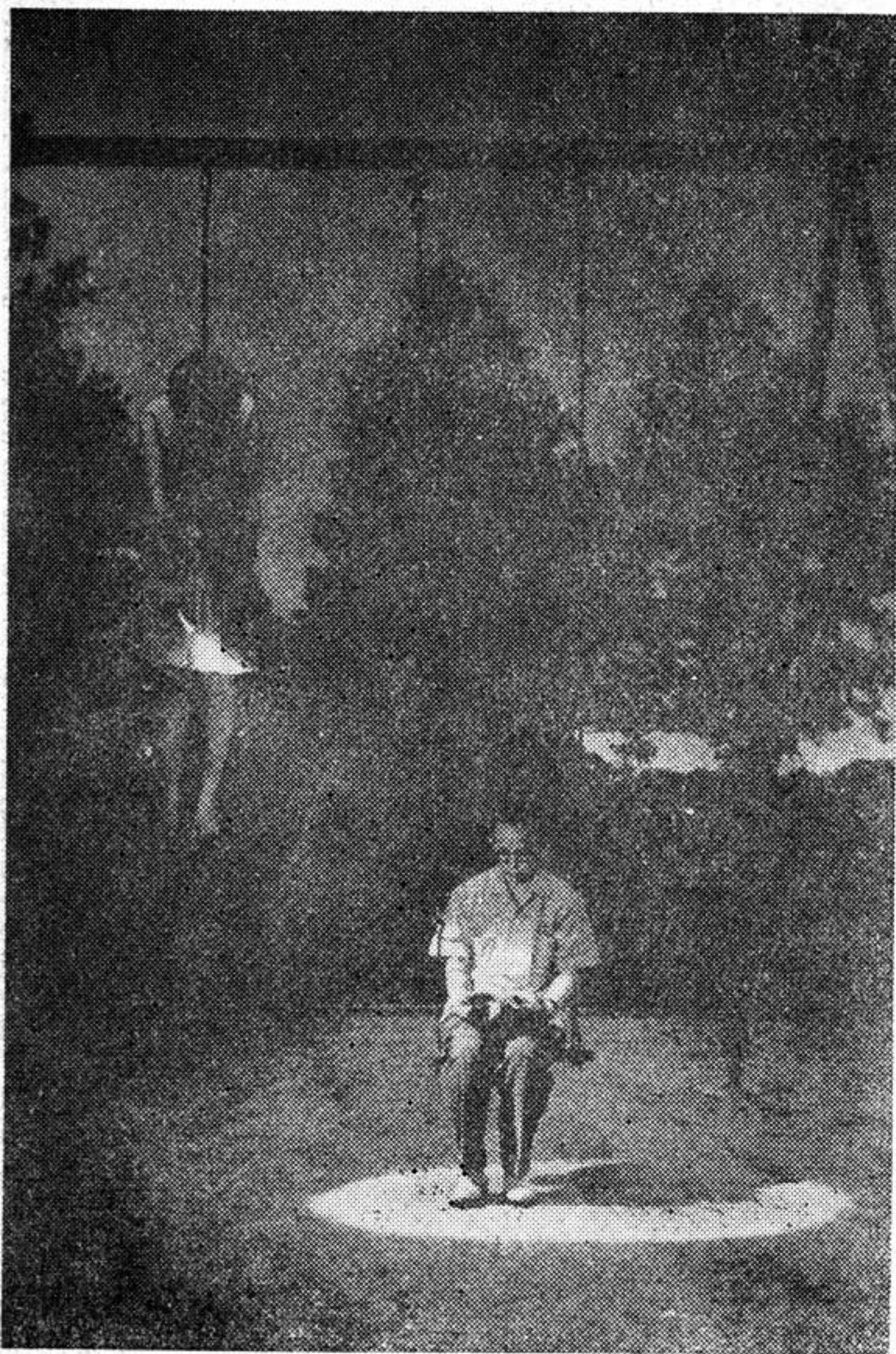
中央の写真は「無責任な傍観者」というのだが、ビルの屋上近くのハリにぶら下がって助けを求める男を、タバコをくわえて冷然と見ている男をとらえている。これは、苦悶するいけにえを、ねばりつく目で見つめているサディストを思わせて、興味がある。

左端の写真は「死人の協力者」と題している。ブランコの支柱からぶら下がった女の死人の右手に懐中電灯がにぎられ、その光で、



ブランコに腰かけた男が本を読んでいるという構図である。

作者は、童話的な気味悪さがただよっていると



成したものが左上の写真である。

それぞれに、特色をもたせておもしろい。鬼気せまる凄惨な写真も、合成によってでき、読者にお目見えできるというわけになる。その場合は、どんな残酷なものもできるわけだし、奇想天外なことも可能となるだろう。

しかも、その写真が、非常に迫真力をもっていることとなれば、写真によって、自分の性向を満たそうという向きには、じゅうぶんに目的が達せられるわけである。

しているが、それはそれなりに、じゅうぶん感じられる。

ところで、この週刊誌では、最終ページで、この「死人の協力者」の写真のトリックを説明している。上段の三枚の写真がそれで、この三枚を合

米国製異色写真

写真入
カタログ
¥100

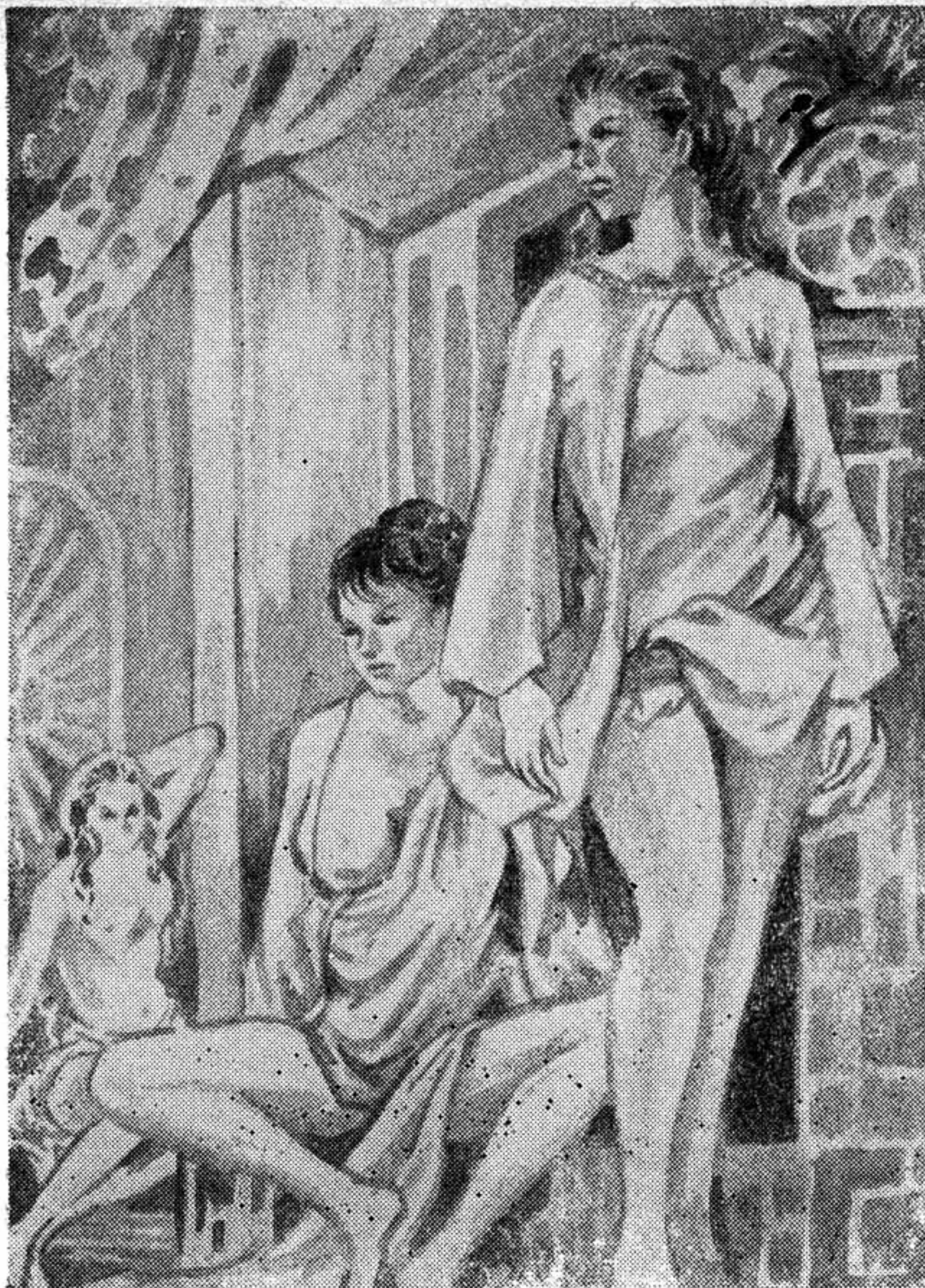
BONDAGE

100
ポーズ

東京北区滝野川7~40
ベスト社

続悪徳の栄え

マルキ・ド・サド原作
田上恵子・え



けんらんたるイケニエの祭壇は、教会の内部にあった。そして、ひな壇に並んだ二十人の少年少女たちが、この堂々たる祭壇をいどっていた。

どの隅にも、イケニエ用のギリシャ風の小さな祭壇が築かれ、十五歳の少女が一人と、二十歳ばかりの若い妊婦が一人、それに、十四歳と十八歳の少年と青年が、そのうしろに立っていた。

いつものことながら、これらの四人のイケニエは、淫蕩な慰みものとなって、生命を絶たれるのであった。

男たちは絵のように美しく、女たちはそれにも増して優雅であった。彼女たちは、腰の上に、しどけなく垂れた、生地のままの薄紗のシュミーズを身にまとい、腰の下は丸出しだった。

薄紗の寛衣チャラフは、幅の広い紅いリボンによって腰のあたりに結びつけられているのに、腰の下は、どこからみても、可愛い臀部を露出していた。

羞恥と嗜虐に満ちたイケニエの儀式は、まもなく、はじまろうとしていた。それは、しびれるような血の快樂をもったプロローグだった。



道楽者レオポルド大公は、七人の裸女のイケニエをずらりとならべ、そのなかから四人の妊婦をえらんだ。その膨満な腹部に、真ッ赤に焼けたコテで有罪宣告文を押し当てようというのだ。焼きゴテには、つぎのような宣告文が彫り込まれていた。

一、鞭打により流産すべし

一、飲み物によりて流産すべし

一、足に踏まれて流産すべし

一、腹を割きて子供を抜き取るべし

とあった。三人の妊婦たちは、つぎつぎに、十分に苦しみと快楽を与えられながら息絶えた。やがて最後の妊婦の番になった。レオポルド大公は、まず、枝のムチによって彼女の臀部を、血でいろどるまで打ちすえた。

つぎのムチは、鉄のトゲのついたもので、その皮房をふるって、見事なまでにふくらみ、脂肪のついた彼女の肉体を巻き込むように連打した。ピュッとふりおろすたびに鮮血がほとばしり、絶叫があがった。

断末魔にあえぐ彼女は、やがて牛の性器で作った堅いムチによって、腹部へまともに強打を加えられた。異様な呻き声をあげた彼女のからだから、赤く火のような肉塊がせり出し、音をたてて引きずり出された。



この世の中に、こうも悲惨で残酷な殺人劇はみられない。その計画は、長い間かかって考えついたものではなかった。淫欲の火の燃えさかるなかに思いついたものだった。

たちこめた熱気をとおして、バラ色にもえた若いからだキラキラと光る。はてることのない遊びの最中、恨み骨髓の二人の犠牲者が貪欲な執行人の手によって浴室に運びこまれた。イケニエの二人の裸女は浴槽にうずくまりながら、快楽と愛の行為にふける姿を見ると、やにわに、執行人の胸板にぶつけるように身もだえして命乞いをはじめた。

やがて浴槽の女が、執行人を手招きした。つかれ果てた二つのからだに、生気が甦った。執行人は、両わきに二人のイケニエをかかえると、浴槽のふちに押しつぶすようにかかみこませ、隠しもった鋭い刃物をふりあげた。女体のなかで、もっとも一番多く血のふき出る部分を、ゆっくりと突き刺したり、えぐったり、切り裂いたりした。

快楽にあえぐ声と、断末魔の呻き声が奇妙に交錯して、みるみるうちに、二人のイケニエから流れる鮮血が浴槽にたまっていった。そのなかで、頭から血をあびた二人の快楽はつづいた。



「ムチでたんと打つがいいわ」

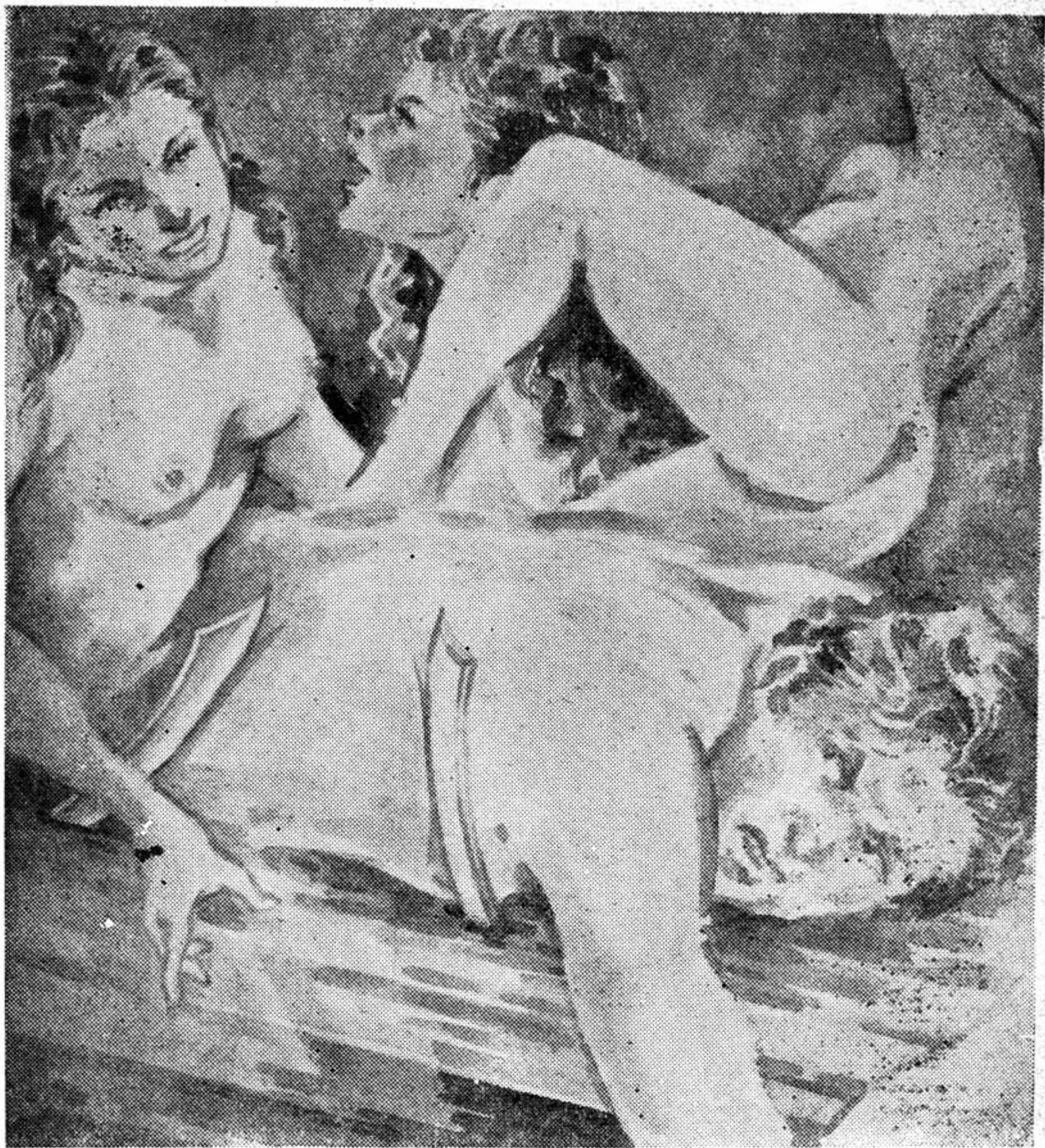
若い娘を裸にむき、下男どもの前に立たせると、あたしはムラムラとその娘に憎しみを覚えた。かつてあたしをたのしませてくれた可愛いお尻が、まるまるとふくらんでいた。「お前たち、その小さなお尻を血だらけにしてやるといい」

あたしは、ドレイのような忠実さで動く下男どもの仕草をみつめた。

娘は狭い腰かけの上に寝かされ、皮ヒモできつく縛られ、その首は鉄の首輪によってぐっと引っぱり上げられているので、身動きができない。あたしは、娘の尻の肌がザクロのようにひきちぎれるまでムチ打った。

やがて娘の可愛いバラ色のお尻は傷だらけになり、きめのこまかい肌が、切り傷と打撲の痕しかみえないようになってしまった。あたしは、娘の髪の毛を、天井の釣り燭台のあった場所に吊るし、それから彼女の両脚に縄をつけて両方から引っぱって、広間の両端に固定した。思いきり開いた彼女のもっとも柔らかい部分にあたしがムチをふるったことはいうまでもない。

そして息もたえだえの娘にゆっくりネライをつけてピストルを一発、あの世に送った。



エンマとソフィーという莫運女の考え出した悪企みというのは、若い男を二人がかりで裸にし、細長い椅子を男に近づけ、手と膝をついて男のからだを椅子の上にかがませた。すると、うつ伏せになった男の両わきからバネがぴんと飛び出し、五体を固定させた。もし男が、恐怖のあまり少しでも身動きすれば、脇腹や下腹には、三本の鋭利な刃が気味悪くふれるようになっていた。

こんな有様を得意気にみつめる二人の女は男の哀れな格好をみて笑いころげた。そして、思い出したように、ムチをとり出すと、狂気のように、そいつを、男の全身くまなくふりおろした。

汗ばんだ表情がおたがいひきつり、男のからだにあふれる血をみると、抱き合うようにして近より、その血をすすった。男は全く生気を失って目をムイタ。

二人の女は巧みに愛をはじめた。それがしだいにももの足りないものに感じると、年上の女が男を弄んだ。

「この犬をなぶり殺しにしましょうよ」
男は悲鳴をあげた。すっかり精気を失ったからだに、再びムチがふり上げられた。
「このア、マッ」男の血の叫びがもれた。



二人の娼婦の最期は、悲情な仕打ちに終始した。すでに殺されたと感じたのか、目の前に置かれた脚立をみると、身を投げ出して命乞いをはじめた。

一人の娼婦が脚立のてっぺんに馬乗りになるように縛りつけられるのに、ものの五分もかからなかった。

そして、残ったもう一人の娼婦は、柱に逆さまに縛りつけられ、かんねんしたように静かに運命をまっていた。

快楽に酔った男女の死刑執行人は、そんな二人の姿をながめながら、愛にふけた。娼婦は目を見開き、その終わるのをまった。

終わった瞬間、死刑執行人が、面白半分、自分たち二人を殺すにちがいないと思ったからだ。

やがて処刑がはじまった。脚立がいくども床に倒された。娼婦はたちまち頭を割られて血をふき出した。背骨が音を立てて折れた。

逆さ吊りの娼婦はもっとひどかった。目かくしをした娼婦のからだの最後の女のいのちをくりぬき、血しぶきにのたうつからだを逆さのまま暖炉の上に吊るし、あかあかともえあがる炎によって全身を焼けたのだらし、煙を十分に吸いこませて窒息させてしまった。

五十万人の大虐殺

磯部乙彦

一九四三年の十月、暖かいある朝のこと、二人の男が、クロアチアの首都ザグレブのハルバトスキー宮殿の将校集会所で、向きあってすわっていた。

一人は、イタリア陸軍の制服をつけているが、カルジオ・マラパルティという、ローマのコーレル・デラ・セラの従軍特派員である。もう一人は、デュサン・マキエド陸軍少佐という、クロアチアの将校で、机ごしに、疑いぶかいヘビのような目で、マラパルティを目つめている。

マラパルティは、イタリアのファシストの新聞特派員として、三年間、フィンランドからウクライナ、ベルリンからブカレストと、前線を駆け回ってきた敏腕の記者である。そして、いま、恐怖の的になっている「アント・パベリク団」の首領マキエド

との会見に成功したところである。

アント・パベリク団——それは、クロアチア人の過激分子によって結成された暗殺団である。彼らは、セルビアの村から町を、シラミつぶしに荒らし回った。そして、男であろうが、女であろうが、いや、いたくない子供たちでも、見つけさえすれば、一人のこらず虐殺し尽くしたのだ。

彼らの通ったあとには、文字どおり死の廃墟と化した。生き残ったものは、犬や猫などのわずかな家畜類だけだった。

その家畜類も、ニワトリはもちろんのこと、牛や馬や豚は、一匹のこらず略奪されていた。馬は乗用として、その他の家畜は食用として——。

彼らは、いわば、ファシズムに躍らされたテロリストの一団である。ファシスト党



の秘密命令によって、反ファシズムをと
える人びとを、片っぱしから、暗殺して
いた。

あるものは路上で、あるものは自宅で、
時と所を選ばず、殺人がくり返された。

ファシストの政策を批判したという風聞
だけで、その真偽を確かめることなく捕え
られ、路傍の電柱に絞殺体の無残なムクロ
をさらしたのも、数多かった。

銃殺は、もっと量的に、大規模に行なわ
れた。何十人、いや、時としては何百人が、
一斉に、その肉体に銃弾をぶち込まれて、
一瞬にして死の世界へ追いやられた。もち
ろん、男女の区別など問題ではない。枕を

並べて、ズラリと銃殺された死体が、何百
メートルもつづいたことさえ、そう珍しい
ことではなかった。

だが、彼らとて、大義名分がなかったわ
けではない。

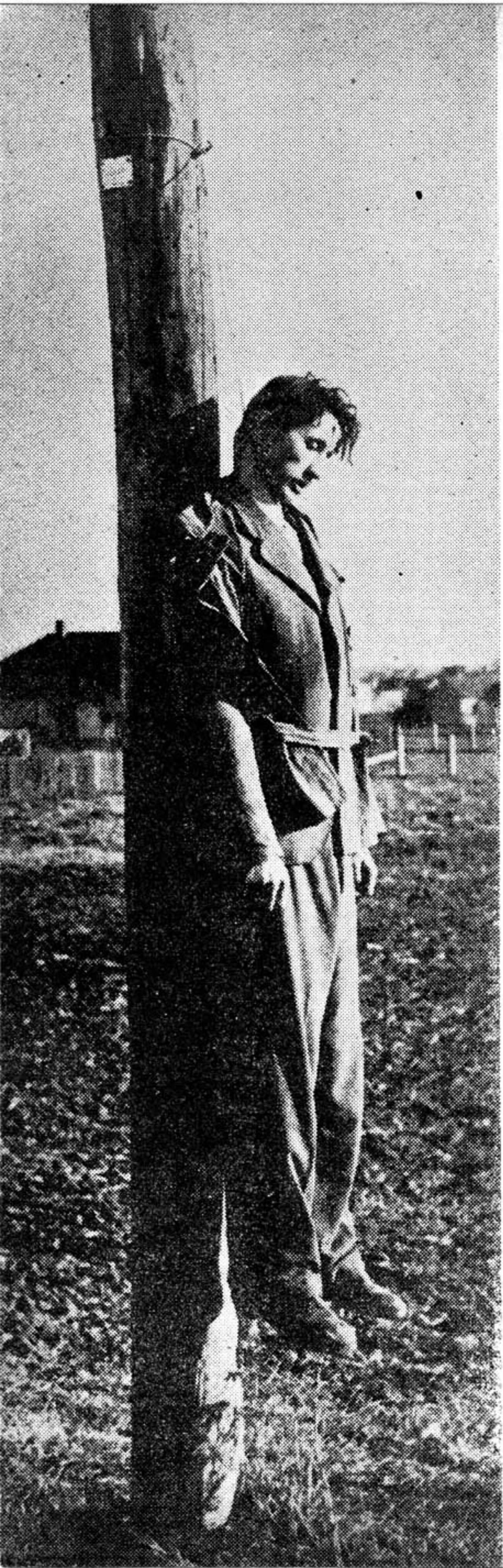
ユーゴスラビアの狂人的な圧政を、も
はや忍ぶことができず、われわれは立ち上
がったのだ、というのが、アント・パペリ
クの宣言だが、それにしても、このクロア
チアのテロリスト暗殺団は、バルカン諸国
の良民たちを、誰彼の区別なく、恐怖の淵
に叩き込み、その生活が無残にもえぐった
のだった。

彼らのテロ行為は、著名人にも及んだ。

ブラダ・ゲオルグは、一九三四年、アレ
キサンダー皇帝を虐殺した。だが、この、
パペリクによって送られた暗殺者は、その
帰途、怒った大衆の手によって殺されてし
まった。

ジャセノバクの集結キャンプでは、独裁
者の激怒にふれた犠牲者が、戦利品として
扱われ、少しでも反抗の気配を見せると、
容赦なく銃殺された。この監視に当たって
残忍なまでの虐殺を行なったのは、アント
・パペリク団の連中だった。

第二次大戦が終わって十余年たつが、彼
らの虐殺ぶりは、今なお、バルカン諸国の
暗い話題となっている。



10マイル

津村 静 治



死にまさるアヒル行進

一九一八年九月二十五日の夜十一時三十分、フランスとアメリカの四千の大砲が史上に前例を見ない、すさまじい弾幕を張った。有名なヒンデンブルグ・ラインの南側面を粉碎しようという、連合軍総攻撃の序曲である。

アメリカ各州連合軍の第三十五師団の第六十九砲兵大隊は、最前線に出ていた。敵との距離は一マイル。

だが、この一マイルは、第六十九砲兵大隊を擁護している、カンサスとミズリーの出身者で編成されている第一三七、一三八連隊の連中によって、「死の一マイル」とアダム名されているところだ。

前面のヴォークォイス丘は、五〇フィートの、せむしのような高地だ。そこは、ドイツ軍によってコンクリートのトーチカと、無数の銃眼で

要塞化されていた。地下には、縦横に道路が走り、弾丸や食糧の貯蔵庫が完備していた。難攻不落をほこる要塞なのだ。

世界大戦は、いよいよ激烈の様相を呈していた。砲弾はひっきりなしに飛びかい、ドイツ軍の防備は堅固であった。

アレックス・スキンカーは、第一三八歩兵連隊の陸軍大尉だった。彼は、勇敢な闘魂の持ち主だった。だから戦線の膠着を、どうしたら解消できるかを考え、ひそかに心に決するものがあつた。

敵要塞の弱点をさぐり出すこと——彼は、そこに目をつけた。単身、この難行をやつてのけようと、機会をねらっていた。

ある夜、暗闇にまぎれて、スキンカーは、ヴォークォイスの丘の斜面をはった。

その夜、ヒンデンブルグ・ラインは、無気味な沈黙を守っていた。その静寂を破った身動きの小さな物音によって、スキンカーは、不運にも、ドイツ軍の哨兵に発見されてしまった。もちろん、捕虜としてつなされることとなった。

戦線の固着化は、兵士たちを、無聊に苦しめていた。そんなときの捕虜は、絶好の

なぐさみものだった。

スキンカーは右手首を右足首に、左手首を左足首に、それぞれ縛りつけられた。そして首に縄を巻かれて、その縄をひっぱられて犬のように歩かされた。

ヴォークォイスの丘の地下を縦横に走っている通路を、その姿勢のまま、スキンカーは十マイル以上も歩かされた。たまたま捕虜になっていたフランス兵が数人、同じ姿勢で、彼のうしろにつながれた。

アヒルの行列だ、といってドイツ兵たちは笑った。確かに、ヨチヨチ歩きしかできないこの姿勢は、言語に絶する苦痛を与えた。まず腰が痛み、背骨がきしんだ。一時間もすると、その痛みは、しびれに変わり、すべての感覚を麻痺させた。静かだが、残忍このうえない刑罰だ。冷たいあぶら汗がしたたり、気を失って倒れるものさえ出た。次の夜、スキンカーは脱走に成功した。スキンカーの報告により米仏連合軍はヒンデンブルグ・ライン総攻撃の火ぶたをきった。もちろんヴォークォイスの地下道を引き回されたスキンカーの見聞を基にしてであった。翌日、ドイツの要塞は陥落した。

ワナにかかった令嬢

小村 伸太郎
江馬 美久・え



東京のような大都會では、どんなに優秀な警察網でも、目の届かない一角が、必ず、どこかにあるものだ。

そういうところでは、日ごと夜ごと、手をかえ品をかえて、犯罪が生み出され、そして、哀れなギセイ者が、オオカミの餌食になっているのだ。

ことに、戦後、急速に膨張し、発展した盛り場では、その観が強い。終戦直後のヤミ市、マッチ箱を並べたようなマーケット——そこには、食うために肉を売る夜の女たちがタムロし、進駐軍横流しの物資が陰で売買されていた。必然的に、女のとモ、ヤミ物資のかすりをねらうグレン隊が寄生するようになったことは、衆知の事実である。

だが、戦後も十余年たつと、世間も落ち着いてきたし、甘い汁を吸うような仕事も、そうザラには転がっていない。

当然、新しい犯罪が生まれた。



「ワァーッ！」

という叫びとともに、男が自動車の前に例れた。

キーッと、急ブレーキをかけて止まった自動車のなかから、若い娘が、あわてて飛び出してきた。倒れている男を見て、オロオロして、どうしていいかわからない風情だ。

「おい、しっかりしろ。どこをやられたんだ？」

倒れた男の連れらしいのが、あわてて男に駆けよった。ハデな背広に、原色のシャツが、一目で、堅気でないことを示している。

「ねえちゃん、どうしてくれるんだ？ この男はおれの舎弟^{しゃてい}なんだからね」

「ころび屋」なのだ。自家用車に、わざと自分からぶつかり、大げさにケガをした風を装って、金をせしめようという、悪質なタカリの手なのだ。若い娘が運転している自動車とねらって、彼らが仕組んだワナなのだ。



「ちょっと、そこまで顔を貸してもらおうじゃねえか」

娘は、それに逆らうことはできない。たしかに、男をひとり、ひき倒したのだから、とにかく、相手の言うとおりにしないわけにはいかない。

連れ込まれたのは、ガランとした薄暗い地下室だった。

ひかれて倒れていた男が、うしろからノココついできているのさえ、娘は気がつかなかった。

「ごめんなさい。パパにそう言っ
て、治療代はいくらでも出します
から……」

「うるせえやい、からだに受けた
ことは、からだに返してやる、こ
れがおれたちのモットーだ。その
キレイなからだに、な」

ワナにかかった女を、彼らが逃
がすはずはない。いわば、血に飢
えたオオカミたちだ。清純な乙女
ほど、祭壇に捧げるに、またとな
い格好のエモノなのだ。すべては
筋書きどおりなのだ。



「キレイな肌をしてるじゃねえかよ。玉の肌ってやったな」

着ているものはがれてパンテイー一枚にされ、ガンジガラメに縛りあげられて床に転がされた娘を見下ろして、男たちの目に、ギラギラと異常な欲望が光っている。

「のどがかわいているようじゃねえか、ビールでもご馳走してやれよ」

兄貴分らしい男のことばで、一人が、ビールの栓をぬき、娘の口へ、もっていった。

「飲みなよ」

娘は口を堅くつぐんで、ビンを拒否したが、男は、娘の鼻をつまんだ。呼吸のできない苦しさ、思わずあけた娘の口にビールびんが押し込まれ、ドクドクと流し込まれた。二本、三本……。

見ているうちに娘の胃袋がふくれあがり、身をもがいて苦しむが、縛られた身では、どうしようもない。男たちの目に、残忍な笑いが浮かんでいる。



「次は、分銅吊りといくか」

たちまち、娘は縛りなおされた。

手をうしろにして、手首と足首を
いっしょにして、逆エビの形だ。

その姿勢のまま、天井の滑車で
吊り上げられた娘の胸に、背から
回して大きな分銅が吊るされた。

「助けてえ……お願いです、もう
許して……」

手首、足首の千切れるような痛
さに、娘は哀願するのだが、男た
ちは、せせら笑っているだけだ。

「ムチをご馳走してやれ!」

兄貴分の男が言う。

一人の男が、部屋の隅からムチ
を持ち出した。バラの木の枝だ。
先のほうに、トゲがビッシリつい
ている。

ピシリッ!

「ヒューッ!」

娘の白い肌にムチが鳴る。枝の
トゲが、白い肌に、繊細な模様を
入れ墨する。血がにじんで、鮮烈
な美しさだ。

ピシリッ! また、ムチが鳴る。



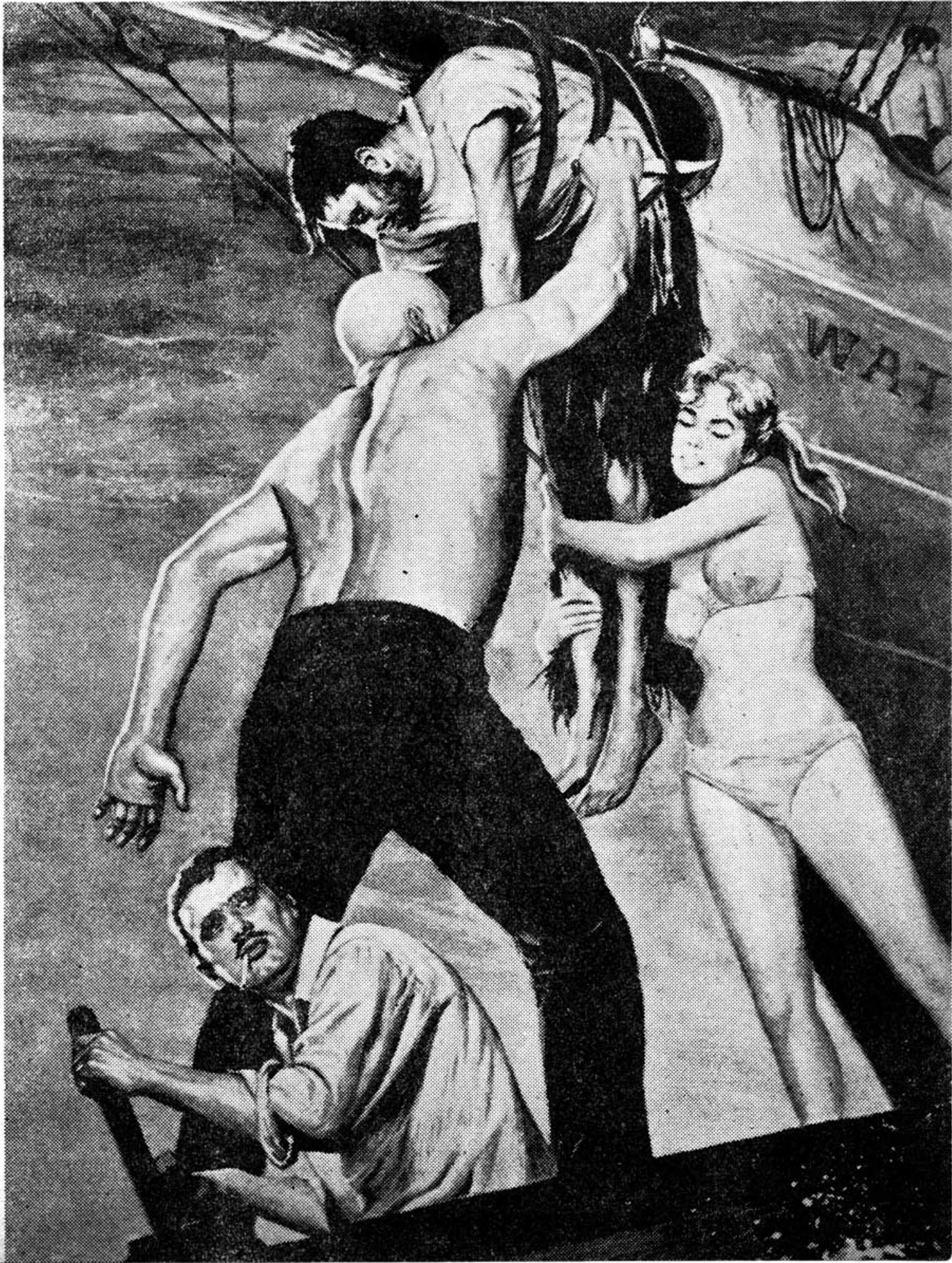
乳房が破れて、鮮血があふれる。
ピシッ！ とムチが鳴っても
もう、娘の口からは、悲鳴も聞か
れない。気を失ってしまったから
だ。

「ようし、水でもぶっかけてやれ」
兄貴分のことばで、娘はまた縛
りなおされた。今度は、乳房の下
で胴をくくって、宙吊りの姿勢だ。
娘の美しい顔は、髪を乱して、
うしろへぐったりと垂れている。
その顔の上から、シャワーの水
が豪雨のような勢いで注がれる。
その冷たさで正気にかえった娘
は、水の勢いで、息もできない。
感覚をなくした肉体と同じよう
に、考える力も失われているよう
だ。すでに、一つの物体と化して
しまったのだろうか。

「おい、いい気持ちだろう」

男の声が、うつろに耳にはいる。
地下室の、こんな地獄図絵をよ
そに、地上では、五色のネオンが
夜空を飾っていることだろう。大
都会とは、そんなところなのだ。

にされた男 田島末雄



生きながら射撃の標的

一九四六年の夏、カリブ海には、灼熱の太陽が、ギラギラと照りつけ、海水さえ熱湯のように煮えたぎっていた。

ルイ十五世島の島陰に、一そうの、奇妙な船が停泊していた。大型の機帆船だが、甲板には、ライフル銃をもった逞しい男たちの影が見える。いかにもぶっそうな船だ。

だが、もっと奇怪なのは、船のへさきに、丸首の海軍シヤツを着た男が、胴中をくくりつけられて、ダラリとぶら下がっていることだった。

髪は乱れ、ヒゲははえ放題で、ゲッソリとやつれた様相が、生きている人間の感じを与えない。着ているシヤツも破れ、ズボンの裾はあらめのようにずたずたに引きちぎれている。もちろん、帽子も靴も身につけてはいない。それでも、ときどき、無意識に手

足をけいれんさせているところを見ると、息があるようだ。

彼はトニー・フレイクという、アメリカ中西部の、ある新聞記者である。

六カ月前、彼は、単身、中米地方の事情調査に出かけた。第二次世界大戦もようやく終結を見て、世界は、恒久的な平和を待望していた。だが、中米から南米北部へかけては、内乱がつづき、物情騒然としていた。その実情を、現地にさぐろうとしたからだ。

フレイクは、大胆不敵に行動した。新聞記者を天職とする彼は、マドロスに変装して、過激な革命派のなかに潜行した。

そして、不運にも、スパイと見なされ、捕えられてしまった。

革命派の裁判は、峻烈であった。そのうえ、血を求める残虐さを秘めていた。判決は、生きながら銃撃の標的とすることに決められた。

ルイ十五世島は革命派の拠点である。ここに停泊した船の船首につるさされ、それを、革命派の兵士たちが、百メートルの距離をおいてねらい射ちにするというわけだ。

だが、革命派の兵士たちには、正規の訓練を受けた軍隊出身者がいなかった。農夫や沖仲仕などが多かった。

そのおかげで、フレイクは、生きた標的にされながらも、何度かの射撃練習に、たった一つの弾丸も、その身体に受けなかった。が、彼は、何日間も、船首に縛りつけられたままで放っておかれた。

カリブ海特有の猛烈な勢いで降るにわか雨と、神経を麻痺させるような強烈な太陽の光が、彼の精神と肉体をさいなんだ。

もちろん、食べ物は何も与えられなかった。口にしたり入るわずかな雨のしずくだけが、彼の飢餓を支えた。それと、不屈な新聞記者魂とが……。

その日も、太陽は烈々の光を投げている。甲板には、ライフル銃をかかえた見張りの兵士がいた。

そのとき、忍びやかに漕ぎよせるボートがあった。フレイクの弟と妹が、力の強い土人を連れて助けにきたのだ。そして革命派の誰にも発見されず、救助に成功した。奇跡の帰還をしたフレイクは、郷里で、凱旋將軍のような歓呼で迎えられた。

サソリ谷の死の戦い

村中浩作

それは、文字どおり、生と死を賭けた戦いだった。猛毒をもったサソリの針が、ちよつとでも肌を刺したら、それでザ・エンド、つまり人生の幕を閉じなければならなかったからだ。

テネシーとカスターは、冒険心に富んでいた。だから、いつも大きな夢を描いていた。一かく千金の夢だ。それも、世の中を、アッ！と言わせるような冒険の果てに、一夜にして百万長者になるというのが、彼ら共通の夢だった。

二人は、古書をあさり、伝説を調べた。そのうち、これは、と思うやつにぶつかった。マンザニロのサソリ谷の話だった。

そこへは、今まで、数知れないほど多くの人々が挑んだが、すべてサソリの餌食となったというのだ。地下に眠っている無尽

蔵の黄金を手中にしようと出掛けて、雄途むなく倒れたと、記されていた。その黄金は、インカ帝国が没落したときの、宝庫に積まれていたものだ。

「おい、黄金だけじゃないぞ、ほかにも宝石なんかがあるんじゃないか」

カスターが、はずむ声で言った。

「うん、オレも今、それを考えていたところだ」

テネシーも、こだまのように、言下に答えた。

二人の心は、その場で決まった。すぐ、準備にかかった。そして三日後には、勇んで出発した。

目的の地は、ふかい山中にあった。土地の案内人を雇ったとき、彼は、危険だからといって、二人をとめた。

だが、そのくらいで思い切る二人ではない。すると、その案内人は、一枚の古い地図を取り出してきた。ずっと昔から伝わっているもので、サソリ谷の間道、つまり、サソリのいるところを通らないで目的の場所へ行く案内図だといった。

テネシーとカスターは勇み立った。案内人の娘が食糧係として同行した。

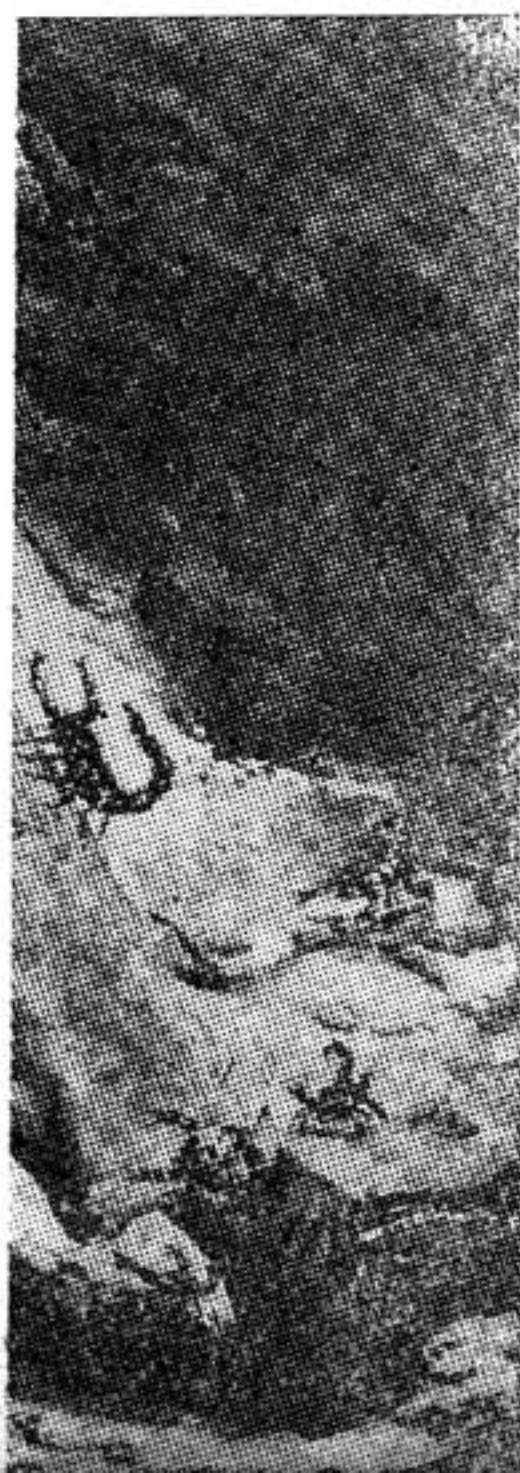
現場は、ふかい洞穴になっていた。テネシーが、からだに縄を巻きつけては行って行った。

洞穴の入り口で、あと三人は、かたずをのんで、見守った。

縄が二十メートルほどのびたとき、「ウワーッ！」

テネシーの叫び声が、洞穴にこだました。カスターは、思わず飛び込んでいった。

見ると、思いがけないサソリの群れ！古



い昔は、一匹もいなかったというサソリが、今では、そこに巣をつくっているのだらう、岩のあいだから、清水しみずの湧きでるように、あとからあとからはい出して来るではないか。しかし、そのなかの何匹かは、もうテネシ一の靴からズボンにはい上がって、しっぽをピンとそり上げ、無気味なハサミをふりたてているではないか。

カスターが持っていたツルハシを取りあげると、夢中でふりまわした。だが、十匹や二十匹殺したところで、サソリの数が減るものではない。この、血に飢え、血を求める生き物は、いまや、生きた、暖かい血を本能的にかぎわけて、襲いかかってくる。

どうやって洞穴をはい出したか夢中で覚えていないが、とにかく洞穴の入り口

に立ったとき、まだサソリの何匹かが、二人にとりついていて、と、思いう出を語る二人も、今は年老いて静かな隠居生活を楽しんでいる。



女密輸船

大西伍郎
小田利美・え



平戸島に近く、人の住んでいない小さな島がある。大時化おおしけがくると、ひと飲みひとのみに波の下に沈んでしまいそうな感じの島だ。草だけがぼうぼうと生い茂っているだけで、人間だけでなく、鳥一羽、けもの一匹さえ住みつきそうもない小さな島だ。

その島陰に、ひっそりと人目を避けるように停泊している一そうの帆船。風を受けてはためいている帆に、黒いドクロの図案が、無気味に浮かんでいる。いわずと知れた海賊船だ。

いま、静かな海面をすべるように、一そうの伝馬船が、その海賊船に向かって、早い舟足で、ぐんぐん近づいていく。

伝馬のうえには、うら若い女ばかり五人、それぞれに縄で縛りあげられて転がされている。口をあやつる船頭のほかに二人の男、みんな、赤銅色しやくどういろに日焼けした膚はだに、一くせも二くせもありそうな面だつらましい。海で暮らしていることが一目でわかる連中だ。

伝馬が、ドクロ船に近づくと、甲板の上に四、五人の男が姿をあらわした。これまた、赤銅色の荒くれ男たちだ。

「オーイ、きょうは、上玉じやうたまばかりだぜ」
伝馬から声が飛ぶ。



利

伝馬が、ドクロ船の舷側に横づけにされると、上から縄ばしごが下ろされた。

荒くれ男どもは、手なれた手順で、女たちをドクロ船にひきあげる。上から投げた縄で女をひとりずつ吊り上げるのだ。簡易起重機といったあんばいで、たちまち女たちは、甲板に転がされた。

まだ反抗の気配を見せて、しきりに身もだえしている若い娘は、手も足も縛りあげられて、そのうえさるぐつわまでかまされているのだが、それでも目にきかぬ気を漂わせて、男どもをにらみつけている。

「いきのいいアマだな。まだピンピンしてやがらあ」

頭分らしい男がいうと、

「そいつああ、ずいぶんと手を焼かせましたぜ。噛みつくし、蹴つとばすし……」

と、伝馬から上がった男が答える。

「フフフ、そんなやつの方が、可愛いもんだよ」

「ハダカにむいちゃえば、おとなしくなりませあ」

ハダカにむかれて、身をちぢめ、羞恥と恐怖にふるえている娘もいる。支那服で転がされている、清国の女もまじっている。



利

秋の日はつるべ落としという。伝馬から女たちを引き上げているうちに、いつか海はたそがれて、あたりに暗闇がひろがっていた。

ドロ船は、いつイカリをあげたのか、かなりな速力で大海原に走り出していた。

そして甲板では、いまや、目を覆う残虐淫靡な光景が展開されている。

肌もあらわに、縛られたままで、節くれだった男に乳房をなぶられている女、ハダカにされて手足を押えつけられ、獣欲の餌食にされている女、太い帆柱にぐるぐる巻きに縛りつけられ、ムチ打たれている女——それは、地獄さながらの無残絵巻だ。

男たちは、世に入れられない不逞浪士の仲間だ。各地から、娘や若い人妻をさらってきては、船で、遠く、支那沿岸から、ジャガタラ、カンボジャにまで売りに行く海賊たちだ。いわば、女の密輸船だ。

船中の無聊をなぐさめるため彼らは、さらってきた女たちの肌に、思いのままに淫虐の限りをつくし、あげくの果ては、金や阿片や、そのほかいろいろな珍貴なものと引き替えるのだ。

そういった異常なことだけに血を燃やす海の無法者たち——



船倉の片隅——雑多な荷物が置かれた小さな一室。ここではまた、ひそかな、それでいて陰湿な「血の残虐」な一幕が、演じられている。

船がゆれても転がらないように荷物を支えて張りめぐらされた太い綱と柱を利用して縛られているのは、さっき甲板にいた清国女だ。責めているのは、海上生活をしながらも日に焼けないのだろうか、無気味に蒼白い浪人者。目に、残忍な血の色が光っている。

刀をぬいて、女の着ている服を、あちこち切り裂く。薄い服の下から、まっ白な、むっちりとよく発達した肌が、のぞく。

その白い肌に、いくつも、薄い血のあとが線となって走っている。

血の色を見て、男の目に狂暴な光が走り、それが狂喜をみなぎらせる。どうやら、女の肌にキズをつけ、そこに欲望の火をもやすアルグラグニーの男のようだ。

女の口からは、もう悲鳴も出ない。恐怖の極に達したのだらう、ぐったりと頭を垂れた姿勢で、血の気のない顔に、淡い灯の色が、異様な美しさをただよわせている。

イヒヒヒッ！

男の口からこみあげる獣めいた笑い——。



利

胴の間では、酒宴がひらかれている。

さらわれてきた女たちが、縛られたまま転がされていたり、柱や梁に吊るされたりしている。たいていの女が、肌着姿で、あられもなく肌をちらつかせている。

「おい、その女に、ムチのご馳走をしてやれ」

太い胴間声でいったのは、首領らしい大男だ。身をふるわせておどしている娘をそばに引きつけて、しきりに杯を傾けている。

「おーッ！」

答えた一人の男が、握り太の竹の棒を持って立ち上がった。

「あれーッ、お許してください」

女の哀願の声は弱々しい。

ピシッ！

「ヒューッ！」

竹のムチが鳴ると、女の口から悲鳴がほとばしり出る。竹の先は、細かくささら状になっているので、たちまち、白い肌に、赤いポタンのような斑点が、ひろがっていく。

ピシリッ！ とムチが打ち下ろされるたびに、女のからだがかねり、苦痛のうめきが高まっていく。乱れた黒髪が、床に流れて、生きていくようにうごめく。



尋常な手段で女を犯すことには満足しない男たちの残忍性は、思いつく限り残虐な責めを女たちにしいるようだ。

それぞれに女を選び、思い思いの方法で女をいたぶるのだ。

ハダカにむいた女に皮のムチをふるう男、ローソクの火で女の肌を焼く男、さかさ吊りにした女のからだじゅうを羽毛でくすぐる男——考えられる限りの責めの様式が、そこでは競いあっている観さえ呈しているのだ。

反抗した、という理由で、甲板の帆柱に、さかさにくくりつけられた女は、気丈にも悪態をついている。

「ケダモノッ！ 人非人！ いっそ、ひと思いに殺したらいいじゃないかッ！」

「わめけ、ほざけ！ 海の上だぜ。助けにくるやつはないんだぜ」

「殺したらどうなんだよッ！」

「売りものだあ、大切にしてくれよ」

男は、不自由なからだをくねらせる女に目をやって、ニヤリニヤリしている。

「月が出てきたぜ。キレイだなあ、夜の海もピチピチと生きのいい女も……」

船ぐるみ淫蕩無残に満たされて、ドクロの帆が、夜風にはためいている。

既刊旧号のご案内

毎号、斯界のトップ・レベルを行く本誌の旧号は、本社に残部が僅少ございます。直接お申し越しください。振替か書留便が、確実に便利です。

画報・風俗奇譚 第1集

好評のうちに品切れ

画報・風俗奇譚 第2集

(二八〇円)

多色口絵・池畔の愉悦

写真口絵・陶酔する女体八景

第1グラビア

鴨居づり・女の置き物

人間荷物・海老責め・水にひ

たされて・緊縛艶姿・脚立責

め・静かなる悦虐

第2グラビア

椅子しぼり・美囚六態・白い

人魚のもだえ・美しき人柱・

ベッドの残虐・亀の子しぼり

・四つの妖花

第3グラビア

暗闇のよろこび・犬になれ・

木に縛られて・座布団も責め

道具・さかさ海老づり・嗜虐

を待つポーズほか

海外残虐譚

人間をステーキにする

熱砂の砂漠(死の逃亡)

愛欲に狂う氷原の情炎

マゾヒチック絵画館

乗馬服の女たち

創刊臨時特集号

(売切れ)

艶妖特集号

(一四〇円)

多色刷口絵・かぎや店先(春信)

写真口絵・肌の十字架ほか

特集・サディズムの種々相

死体に処女を捧げた娘の話

現代女性の変態心理を衝く

蛇淫の怪(現代怪奇物語)

刑罰人の縄の掛け方(江戸時代)

白人女性を征服した黒人男性

嗜虐への誘い(告白)

女の黒髪に埋もれて死にたい

縄で縛った歓喜の抱擁

仮面舞踏会(伊国・四畳半)

王妃マユラの虐殺(インカ悲史)

種馬にされた男の話

変態演出考(ドサ回り告白記)

明治性的珍聞史②

妊婦を殺す変質魔(ある強殺事件)

犬により快楽を求める女

春の臨時増刊号 (二〇〇円)

妖異・猟奇艶笑特選読物25編

多色刷口絵・老女村岡

写真口絵・捕われの白肌ほか

二色刷口絵・小田利美画集

グラビア・責められる肌ほか

変態性欲考(ある性犯罪の分析)

魔の十三号室

死体を溶かす(科学者の犯罪)

女に奪われた処女

獣婚・女と犬(異常性欲)

舌を噛み切られた男

悪魔に肌を許した人妻の話

猫の怨霊(怪奇小説)

若い女の生胆をとる老婆

会員三百人の男色クラブほか

悦虐特集四月号 (一四〇円)

多色口絵・五彩のサタン

小田利美責め絵集

グラビア・美女緊縛ほか数十葉の

嗜虐編(変態の緊縛圧巻)

特集・鞭打の心理と実相

鞭打の心理(ムチ打ちの極致)

鞭打の歴史ムチ打たれる女たち

鞭打たれる悪魔のイレズミ

鞭打から生まれた愛情

焼け火箸の快楽死(小口末吉の妻)

人間と蛇との交情

地獄尼僧院(おそろべき実態)

火あぶり台の女(印度教徒の殉教)

縛りあげた女の可愛さ

情事の部屋のサド・マゾ

ピストルを持ったサディスト

夜の淫魔(夏の夜の犯罪)

明治性的珍聞史③

女の死体に憑かれた男ほか

耽美法悦特集五月号(一四〇円)

折込み口絵・空中人魚

口絵・女と動物ほか

グラビア・捕われの人魚ほか

特集・同性愛

同性愛の種類と実際

女性相男子の恋慕手記

同性愛少年が殺人を犯すまで

白い肌同士の陶酔

マゾッホの被虐待契約書

野獣の夜(フオートストーリー)

女の切腹その心理の分析

女だけに加えられる拷問

ハレムの残虐物語

女の人肉を食べた男

明治性的珍聞史④

吹上佐太郎の性の異常遍歴

性的イレズミ考ほか

嗜虐陶酔特集六月号(一三〇円)

多色刷口絵・痛ましき祭壇

喜多川歌麿の艶画より

鈴木春信吾嬬土産より

グラビア・足づり裸女ほか緊迫写

真数十葉

特集・フェチシズム(淫物症)

マゾヒストの描いた女の絵
ズボンをはいた女たちほか
フォトストーリー・偏奇狂奇譚
絵物語・恋の一念、蛇となる
凄惨、目を覆う殺人現場
絵物語・狂恋吉弥責め
絵物語・ギロチン台の美女
アブノーマル絵画展
鞭打する人々
残酷なる刑罰

画報・風俗奇譚 (秘蔵版)

(二〇〇円)

多色刷写真・まひるの艶肌・盤
上の人魚・柱背負い
多色刷口絵・空中ハリツケ・白
肌への執念・宙吊り
責め絵集・田上恵子・小田利美
・江馬美久の凄艶無残画集

第1グラビア

二人無残・格子にはりつけら
れて・椅子の世界ほか

第2グラビア

裸女キリスト・竹で責める
投げ出された女ほか

第3グラビア

柱しばり・格子責め・異虐図
絵・椅子の囚人ほか

アブチック絵画館

コルセットをする女たち
乳房をしぼる女たち

フェチシズムの実態
毛に関するフェチシズム
排泄物に発情する
フェチシズムの源泉は嗅覚
女の下着に欲情する男
変態名画館(珍画・戯画)
浣腸に魅入られた女
変態王・燕山君(朝鮮秘史)
八十七個の洗濯バサミ
マゾヒストの手紙から
マゾ妻・二代目矢作ヨネ
刑罰はどのように変態的か
明治性的珍聞史⑤
黒い通り魔・女の乳房刺し
変態見世物総まくり
レスボスの日ほか

薫風特別号・夏の臨時増刊

(一八〇円)

多色刷口絵・無残石燈
アート口絵・江馬美久画集
グラビア・デヴァンの狼籍
ベッドの愉楽・受難の姿勢・綾
なすまだら縄・庭園の白魚・逆
さ椅子しばり・裸女無残絵ほか
本誌秘蔵特写フォト百数十葉の
圧巻
世界怪奇残酷秘話
十代の悪の女王・白肌責めの絵
図・愛欲に狂う狼娘・花嫁を突
き殺したサドの夫ほかグロテス

ク読物数編

特集・変態性欲犯罪実録

俺のものをなめる
淫楽殺人魔ランドリーユー
尼僧強姦魔・大米竜雲
マツチの火で毛を焼いて
サドとマゾ女の無理心中
男性チョン切り事件史ほか

怨羞無残特集七月号(一四〇円)

多色刷口絵・落花図絵
口絵・女のプリズムほか
グラビア・恋慕受縛・姐上の白魚
・肌もあらわにほか
海の怪物・山の怪物

特集・食人症

サディズムの極食人症
食人国物語
中国における食人奇譚
人間料理を食べた人々
死を賭けた遊戯(裁判記録調書)
鉄鎖・鉄環・鉄衣責め
ソドム族(あるソドミアの告白)
若い女を硫酸で溶かす
ムチの下で陶酔する女
女忍者(戦国忍者の残酷秘話)
白肌をほう毛虫(時代小説)
変態残酷物語ほか

多色刷口絵・緊縛二重奏
口絵・荒れ小屋の残酷・お針子の

幻妖異虐特集八月号(一四〇円)

多色刷口絵・緊縛二重奏
口絵・荒れ小屋の残酷・お針子の

受難・ウインチづり・つるべ責め

グラビア・スタンドの美女・柔肌
しばり・竹責め・落花の閨・亀
甲しばり・地獄に落ちた男・両
手づり・嗜虐の白肌・こぼれる
妖美・二つ折りほか

特集・レスビアンの実態

東西レスビアンの実態
レスビエンヌ
サディストとマゾヒストの往復書
簡(あなたの犬になりたい馬に
なります)

あたしの悦虐プレイ
男に加えられる責め
ひまわり——死体を肥料に
妖怪変化とセックス
化粧室談義(トイレット考現学)
真珠とり海女奇譚
明治性的珍聞史⑦
少年の臀肉切り・野口男三郎
若い女についた死霊
亡霊に復讐された男女

艶美悶悦特集九月号(一四〇円)
多色刷口絵・空中鞭打
原色写真・巖頭の裸女・つるされ
た白魚・女のポーズ
グラビア・裸女無残・落花の景
二人しばり・柔肌責め・静かなる
地獄・投げ出された女ほか

レスボスの歌

乗馬する女たち

(小説) 永遠の美と若さの泉・ザッヘル・マゾッホほか

画報・風俗奇譚 第4集

(二八〇円)

色刷写真・五輪石塔の前で・水辺の小屋で・緊縛落花ほか
口絵・白肌針責め・納屋の中・焼きゴテを乳房にほか

第1グラビア

水車に縛られて・水責め・ロソク責め・ハナ責めほか

第2グラビア

青い無残絵巻・岩に寝かされて・柱を抱かされてほか

第3グラビア

片足宙ぶり・縛られた肉塊・お灸責め・同性悦虐ほか
世界名作秘画誌上展覧会

サルダナパールの死・ルクレチアの死・足フェチズムほか

絵物語・サド・悪徳の栄え
絵物語・町の野獣たち・野盗と女たち

女体緊縛考(緊縛の実際)

グロテスク画集

世界残酷物語

裸女緊縛30態ほか
(画報はすぐ売切れになります)

特集・女装する男たち

男が女装するということ

女装マニアとその魅力

女性的男子について

女装する男たちの生態レポート

マゾヒストの手紙から③

奇妙な再会(アブ・ストリー)

浣腸のいけにえ(悶える女)

若年における異常の性態

変性男子ものがたり

暗黒街の処刑室(本格的サド小説)

恋虐呪縛特集十月号(一四〇円)

多色口絵・女体知恵の輪・色彩写真・美しき囚虜・あかりも淡く・はなやかな受縛

グラビア・白衣の佳人・石だたみの無残絵図・長椅子と女・浴衣も乱れてほか特写スナップ

特集・サディストの群れ
残酷なるサディスト達
あるサドやぐさの告白
ネクロフィリーの男(淫楽殺人)

私の緊縛の記録(アブストリー)

犯罪からみたサディスト

地下室の吊り責め

生きながら焼かれる女

マゾヒストの手紙から④

明治性的珍聞史⑧

アブチック秘画展

全身くまなく刺青した男

復讐鬼(本格的サド小説)

裏切りの決算(異色小説)

秘蔵版風俗画報ハ特一号V発売

限定版 五〇〇円

毎月驚異的な売れゆきに加えて全国の読者のみなさまから、本誌や、姉妹誌の「風俗奇譚」のグラビアを飾る緊縛フォト以上に、本格的迫真の特写フォトを分譲せよとのご要望が非常に多いのです。しかし、現状では多数の秘蔵ネガから特定の読者のみなさまだけにのみおわかしすることと不可能なわけでございましたが、いよいよ本誌の総力をあげた真の緊縛フォトの総集版をここに完成、発行のはこびとなりました。

総頁百五十数ページ、集録した緊縛フォト三百数十枚、九人のモデルを縦横無尽に駆使し、妖麗凄絶、まさに好事家垂涎のものであることを確信しています。

しかし、この「秘蔵版風俗画報」は限定版でございますので書店販売はいたしておりません。つきましては、確実にお手許に入手する方法といたしまして、直接ご近所の書店にご注文くださいますか、または本社あてにお申し込みください。八振替東京四二四九四番、または現金書留、小為替のどちらでも、ご便利な方法で御注文ください。

月ぎめご購読の方法

画報・風俗奇譚(各送料とも)

一カ月(一冊) 一八〇円

三カ月(三冊) 五四〇円

六カ月(六冊) 一〇八〇円

一カ年(十二冊) 二一六〇円

編集だより

◎ かつて本誌独自のアイディアと筆致でファンを魅了した土井啓子画伯が、いよいよ本誌11月号、および画報11月から構想をあらたにして再登場、健筆をふるわれることになりました。

かつて「風俗草紙」時代にS・Nのペン・ネームで活躍したといえ、ファンの方はきっと思い出されることと思います。ご期待ください。

◎ 姉妹誌「風俗奇譚」11月号は「戦争と性」についての特集です。悲惨な殺戮の間に、人間の本能をムキ出しにした残酷ないくたの事実を、各方面から集めた資料によって本誌独自の方針により鋭意編集集中です。これまたファンのみなさまにご満足していただけることとおもいます。



奇妙な 媚薬

「もっと強く縛って！ もっとひどくいじめてッ！」——クスリを飲まされ
た美佐子は、心で抵抗しながらも、肉体は、快
い縄の感触に、興奮にかられていくのだった。

★赤 木 圭 介★

① 知らない部屋

ハッとして私は目をさました。頭のうしろが、重くにおい。目の前が濃い霧でもかかっているように、うすぼんやりしている。

私は周囲を見まわした。知らない部屋だ。いままでに来たこともないような洋室。ここは、いったい、どこなのだろう？

身を起こそうとして、私は愕然^{がくぜん}となった。両手をうしろに縛られているのだ。身をもがいたが、とうてい解けそうにない。しっかりと縛ってある。

きゆうに恐怖が身を襲った。

私は、誰のために、なんのために、こんな部屋へつれてこられたのか？ 必死になって私は、記憶をよびもどそうとした。

——そうだ、ここは渡部さんのお屋敷だ。

渡部社長がこんなに私を縛ったのかしら？

私はやっと思いだした。

東銀座のバー「ドン・ファン」、そこが私の働いている店だ。どこかの商社会社の社長だという渡部さんが、私をめあてによくかよってきた。金ばなれのきれいな、上品な紳士だった。

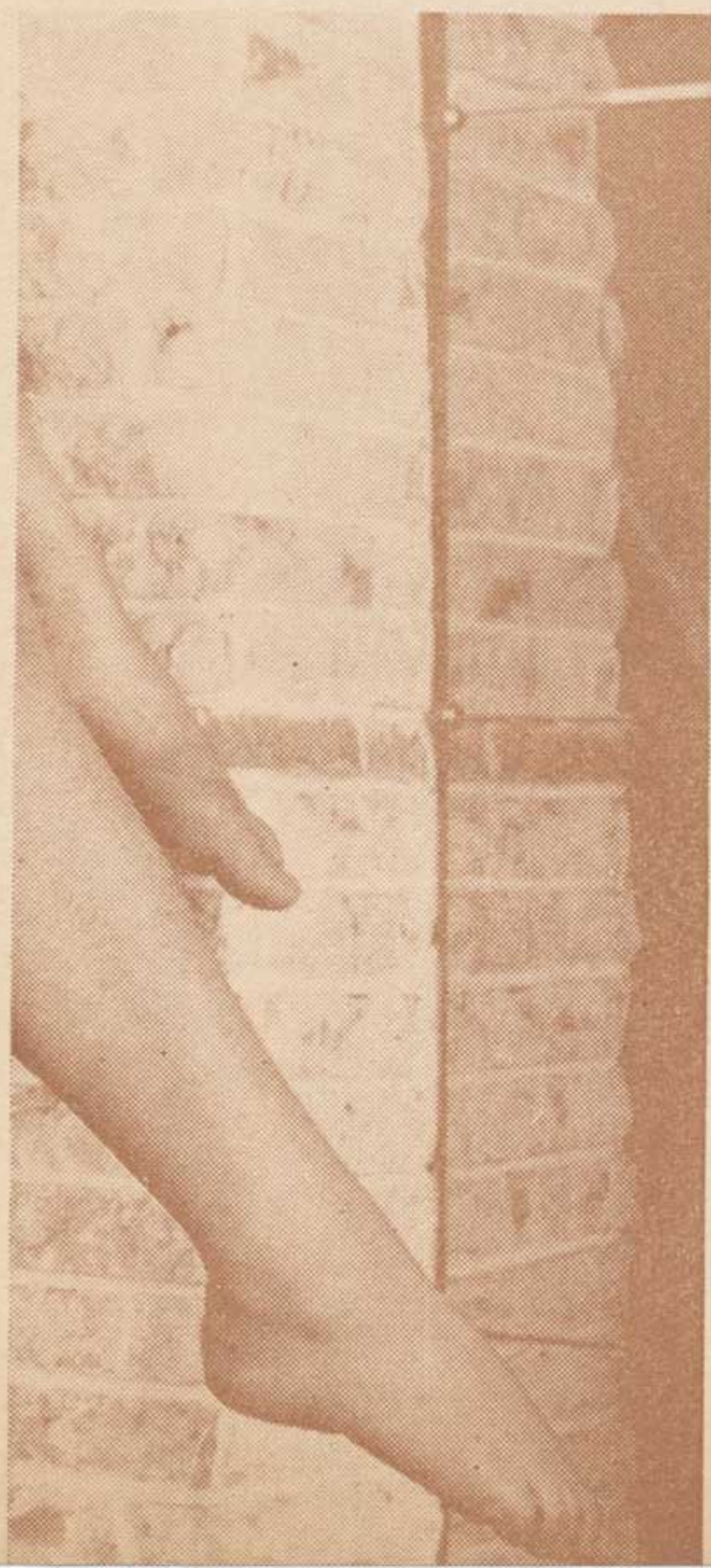
私は、きらいではなかった。

② 睡眠薬

今夜、店を終えてから、私は渡部さんに誘われた。私は、渡部さんの運転する車にのって、このお屋敷まできたのだ。

そして……そうだわ、それから応接間で、コーヒーを一杯ごちそうになった。そうしたら、きゆうに眠くなった……。わかった。あのコーヒーのなかには睡眠薬が入っていたんだわ、眠っているあいだに、こんなにひどく縛られてしまったにちがいない。

「ウフフフ……どうだ、美佐子。縛られると





「このことは、きもちのいいもんだろう……」

ドアがあいて、渡部社長が現われた。いつのまにか、室内着に着替えている。

「あ、社長さん、どうして私をこんな目に私はさげんだ。」

「フフフ……お前はな、そうやって縄を身に巻きつけていると、いっそう美人に見えるんだよ」

渡部は不気味なことをいうのだ。

③ 妖 虫

私は服をぬがされ、裸にされると、またうしろ手に縛りなおされた。

「なんのために縛るの？ 私、逃げたりあばれたりなんかしないわよ」

私は抗議した。しかし、渡部はうす気味わるい微笑をうかべ、私の胸から腰のあたりを、猫のように光る目で、じっと見つめている。

縄は肌に、きしきしと食いこんでくる。ことに胸をしめつける縄が痛い。息がつまりそうだった。

「痛いわ、社長さん、ゆるして！」
私は哀願した。渡部はしかし、黙ってソファに腰かけたまま、ニヤニヤと私を眺めつづける。

と——そのうちに、私の胸の奥底を、妖しい虫が這いまわるような、むずむずした感触が湧きあがってきたのだ。

「社長さん、私、なんだか変だわ」

私は肩をゆすって身もだえた。

「そろそろ、薬が効いてきたな」
渡部がいった。

④ 血がさわぐ

クスリ？ クスリとはなんだろう？

そういえば……縄で縛られていることが、いつか私は、そんなに苦痛ではなくなっていた。いや、堅い縄でぎりぎりとしめあげられた素肌は、たしかに痛いし、苦しい。だが、その苦しきのなかに、私は妙な快感のような疼きを味わいはじめていた。

これはいったい、どうしたことなんだろうか？ ……

両手を縄で、ぎゅちりと背中に縛りあげられている……おそろしいことだ。苦しくて、不安なことだ。それなのに、いま私は、強いお酒を飲んだときのような、胸底のしびれを感じている。

「ウウウ……」

私は身体を前のめりに突っ伏して、うめいた。いまになって、ふいに激しい羞恥が、私の心身を襲ったのだ。熱くたぎった血が、ドキドキと体内をかけめぐる。まだ経験したことのない血のざわめきだった……。



⑤ 奇妙な愉悅

わかった、この不思議な疼きは、いま渡部の言ったクスリのせいなんだ。さっき飲まされたコーヒーのなかには、睡眠薬といっしょに、このクスリが入っていたんだ。

私は、この奇妙な媚薬の誘惑に負けまいと必死になった。だが、駄目だった。

身をいましめられる、ということが、こんなにも愉悅をとまなうものなのか。じわじわと、肌に食いこんでくる縄の不思議な快感。

私は、うっとりした。もっともっと、手も足も、がんじがらめに縛られてみたいような気がした。いままでに一度も感じたことのない、この奇妙な欲望。

「ねエ社長さん、もっと縛って、おねがい、もっと強く！」

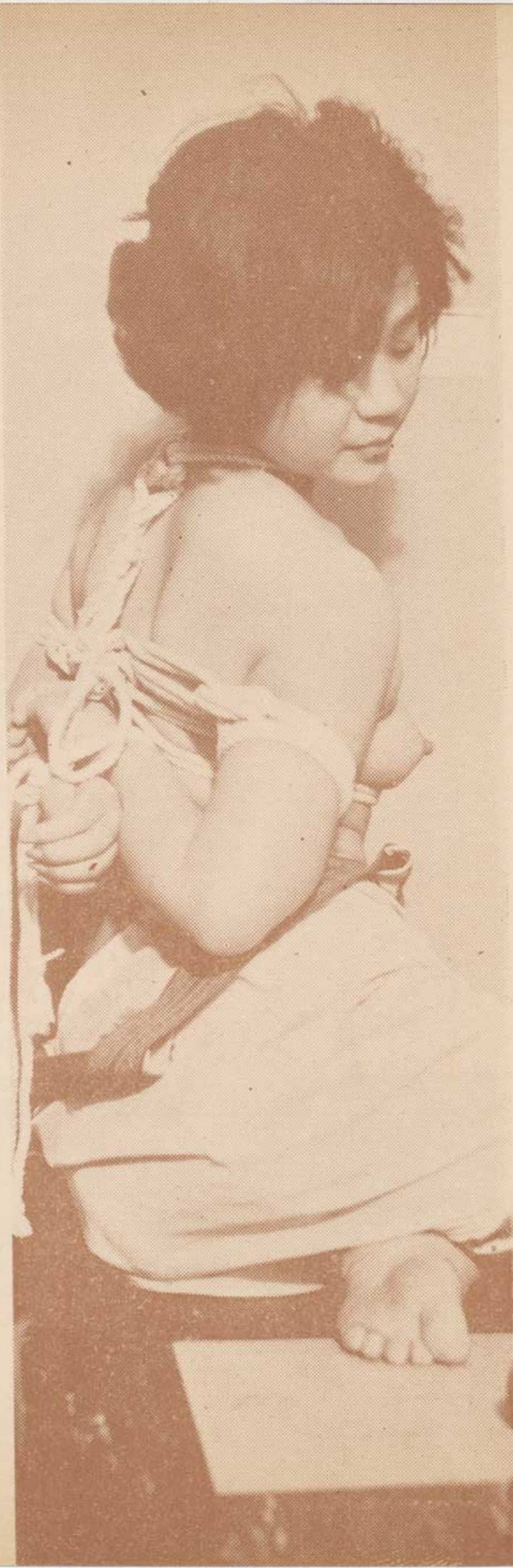
私は、とうとう、そんな哀願をした。みんなクスリのせいだ。私のせいじゃない！

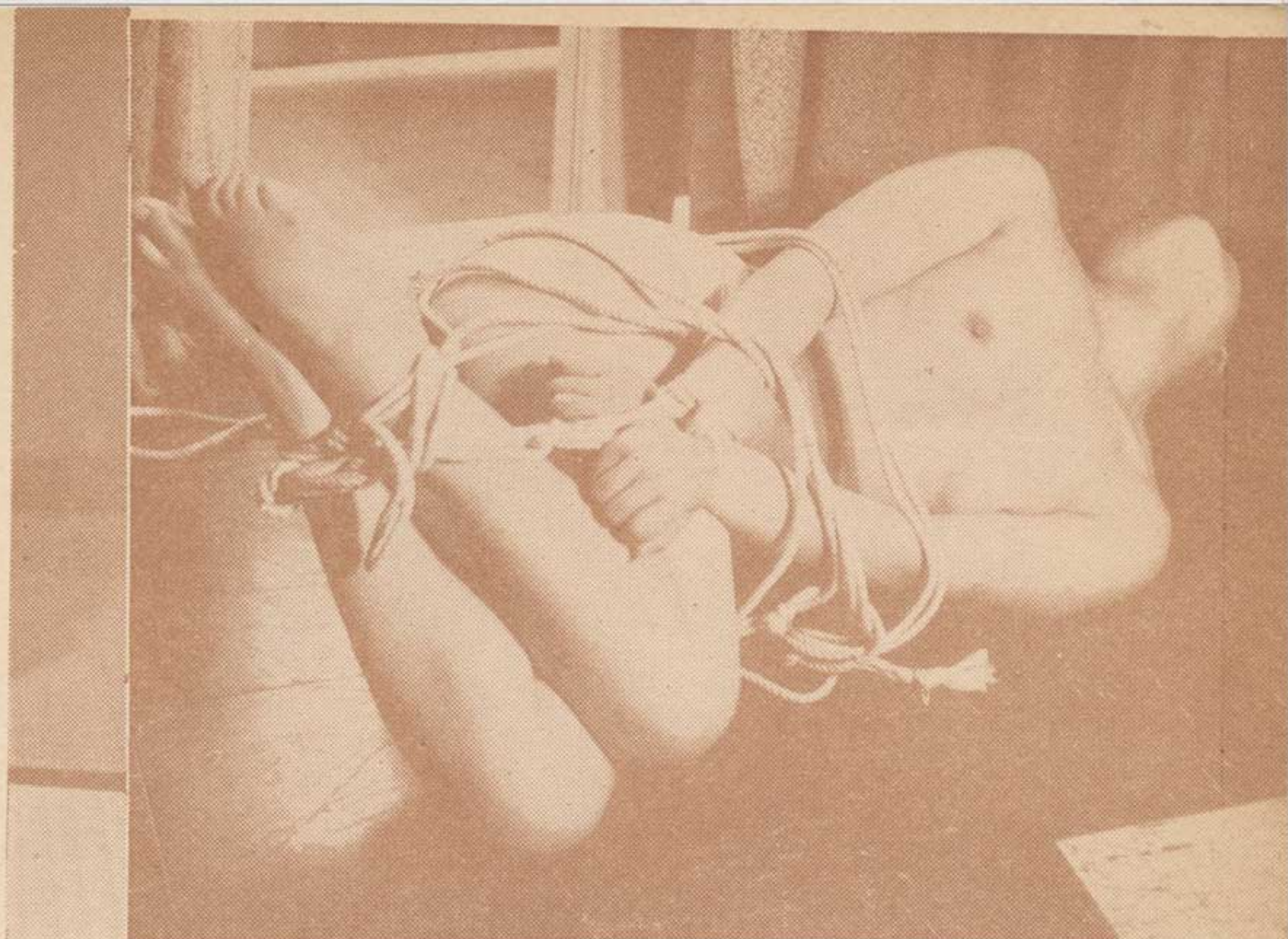
「ウフフフ……そうか、そうか、よしよし、それでこそ可愛い。お前はなんという可愛い女なんだ……」

渡部は満足げに笑った。そして、またべつの縄束を手につかみ、それをくるくると解きほぐすと、私の素肌を、いっそう強く、堅く縛りはじめたのだ。

私は両足まで縛られてしまった。芋虫のようになっちゃったのだ。乳房のなかに縄目が食いこむ。私は顎を前にだして、フウフウと苦しい息をついた。

こんなに不気味な思いをさせられているのに、私はなぜか渡部が憎めないのだ。憎むどころか、愛情さえもつきあげてくるのだ。





⑥ 恍惚の汗

なんという奇妙な、いやらしいクスリなのだろうか。縛られ、いじめられることに、こんな妖しい興奮をかきたてられるクスリとは……。

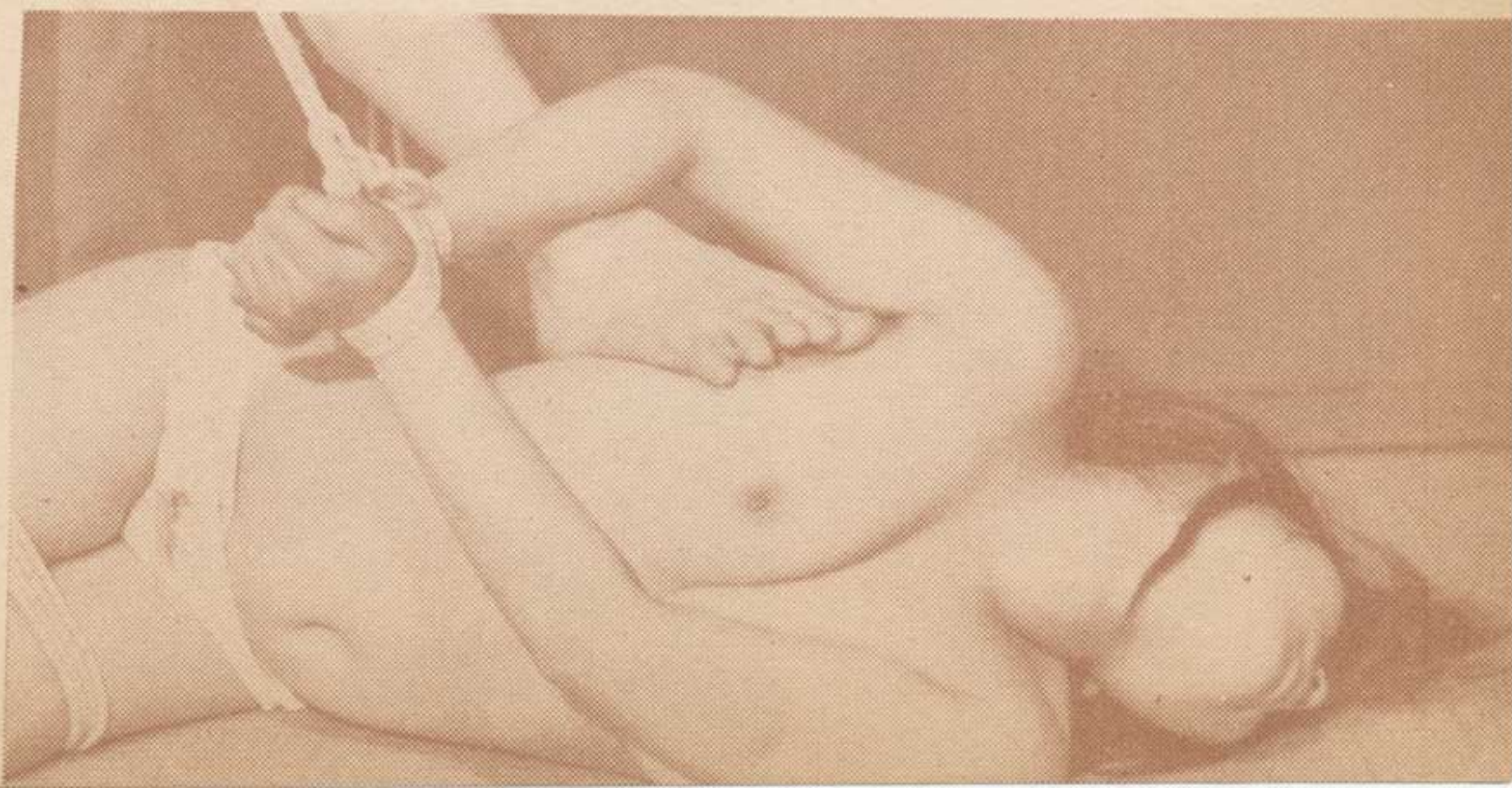
胸に、腕に、胴に、脚に、まるで生き物のような息づかいで責めつけてくる縄。このきびしい束縛感には、苦痛と甘美が織り混じった陶酔がひそんでいる。

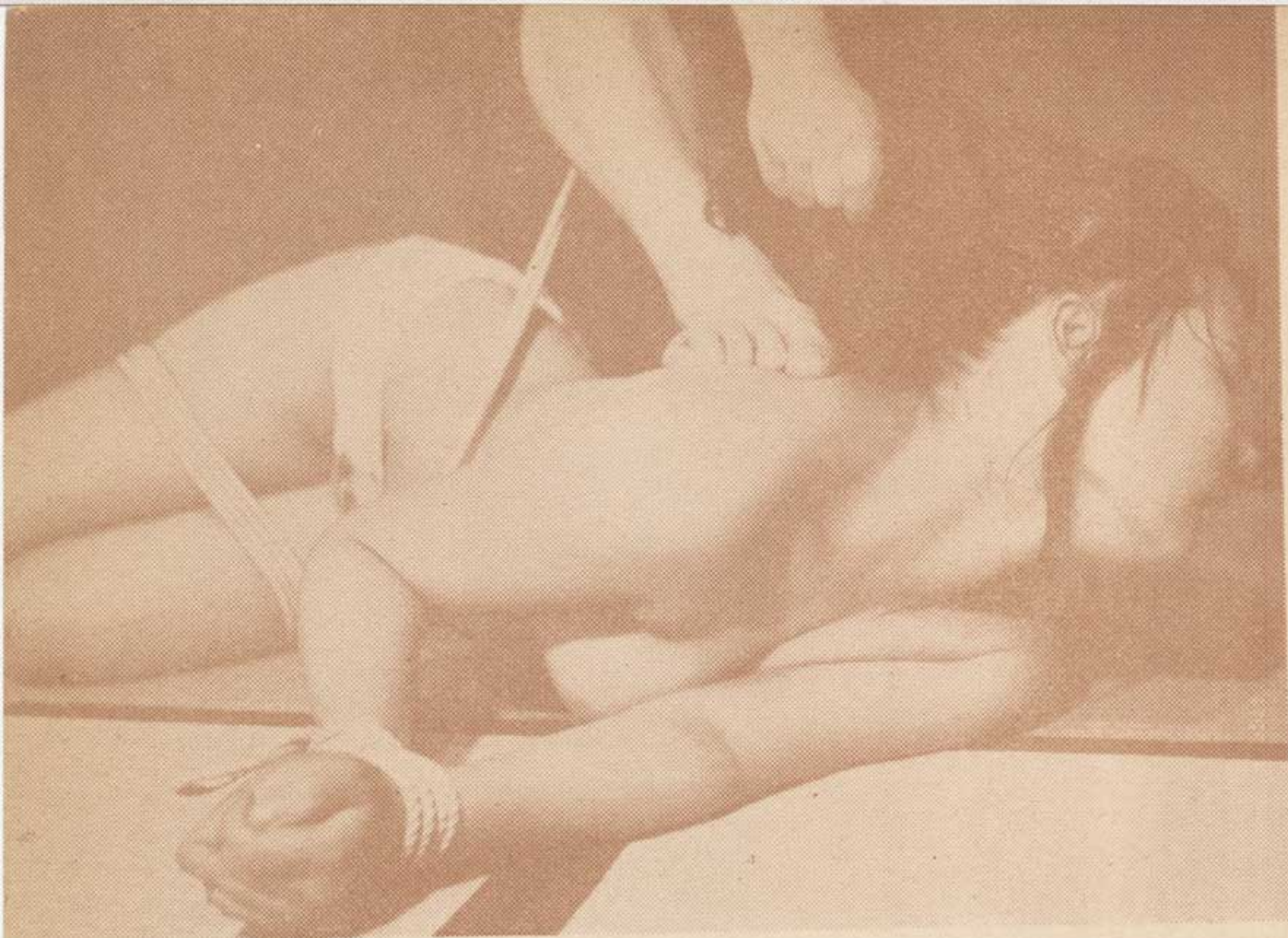
なにやら背徳のにおいのする陶酔が……。それだけに強烈な愉悅が……。

私の皮膚の毛穴から、恍惚の汗がふきだしてきた。これもクスリのせいだろうか。

「もっといじめて！ もっと痛くして！ 社長さん、お願い、私、たまらないわ！」

私はさげんでいた。そして思わず、口と身体で哀願していた。





⑦ 首すじに足

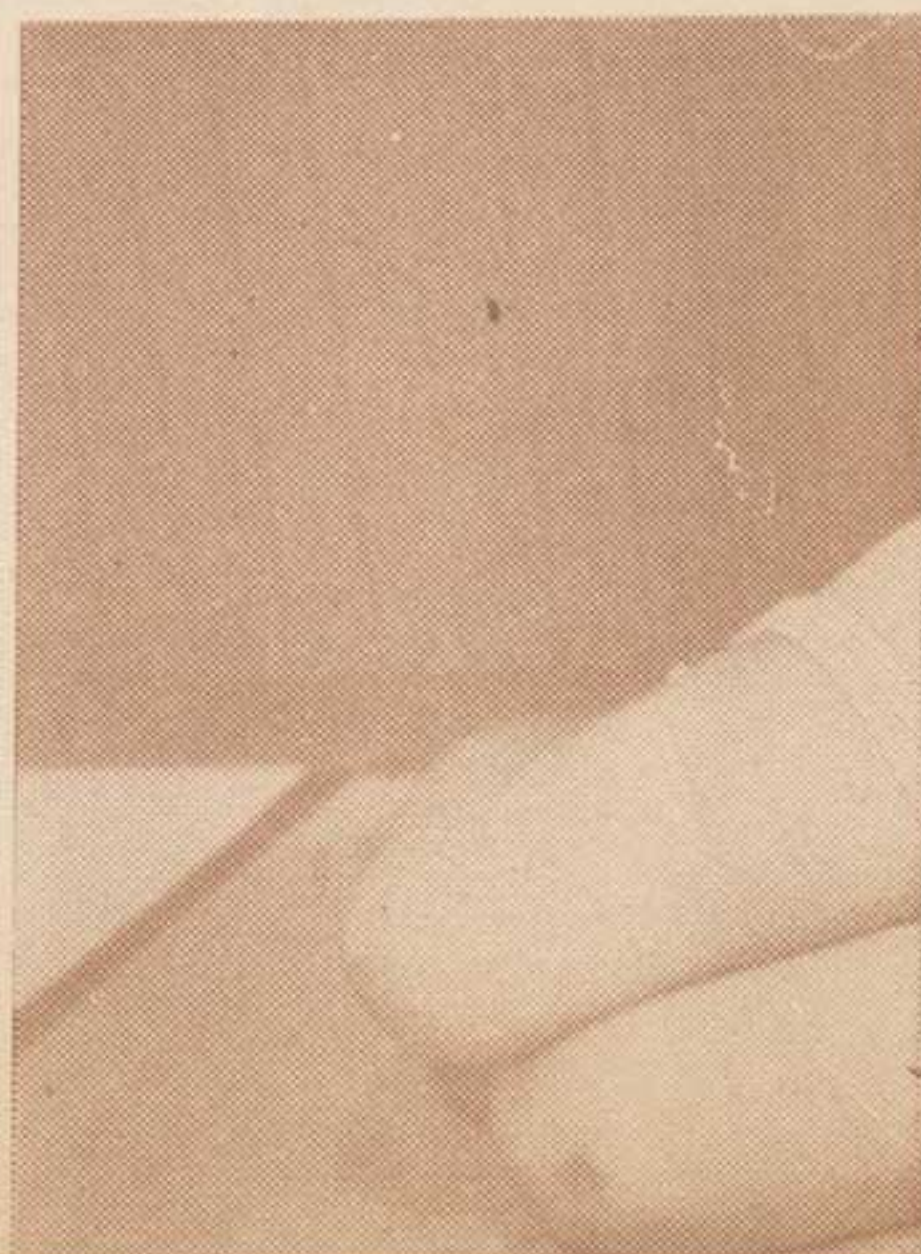
私は縛られたまま、床の上に乱暴に俯伏せの格好で倒された。乳房が床につぶれ、私は思わずうめいた。私の背中の上に、渡部の足がのった。「お望みどおり、もっといいじめてやる」

私の首すじに渡部の足がのって、ぐりぐりと踏みにじった。私は声をあげて泣いた。

⑧ もつといじめて

私は髪の毛をつかまれ、また床から身体を引き起こされた。もうどんなことをされてもかまわない、と私は決心していた。決心というより、期待だった。身にふりかかる暴力への期待！ なんと、あさましい哀れな私になってしまったのか！

「男ぎらいの美佐子」とか、「お高い女」とか言われて、



それで結構、客をつかんでいたのに……。

その私が、こんなぶざまな姿で、「いじめて！ もっと叩いて」と泣いて男にとりすがっているのだ。クスリのせいとはいいいながら。

⑨ 刺激の趣味

渡部は、私の足首に、新しい縄を巻きつけはじめた。私の身体を、逆さに天井へ引きあげる用意らしかった。天井には、そのための滑車までついているのだった。

私は思ひだした。いつかこの渡部社長が、「ぼくには変わった趣味があつてねエ。そのうちに、かならず美佐子に、そのお相手をし

てもらうよ」と、私にささやいたのだ。

その趣味というのが、これなんだ。変わった趣味にはちがいない。だが、なんという悪徳的な、刺激的な遊戯なのだろう……。

⑩ 孤独な心

私の両足首からのびた縄は、天井の滑車をまたいで下に垂れさがった。渡部はその縄尻をつかみ、ニヤリと笑った。秘密の愉しみにふける中年の紳士の、輝くような微笑だった。幼児が、自分の気に入った玩具を、こっそりと

もてあそぶときの無邪気な笑顔に似ていた。

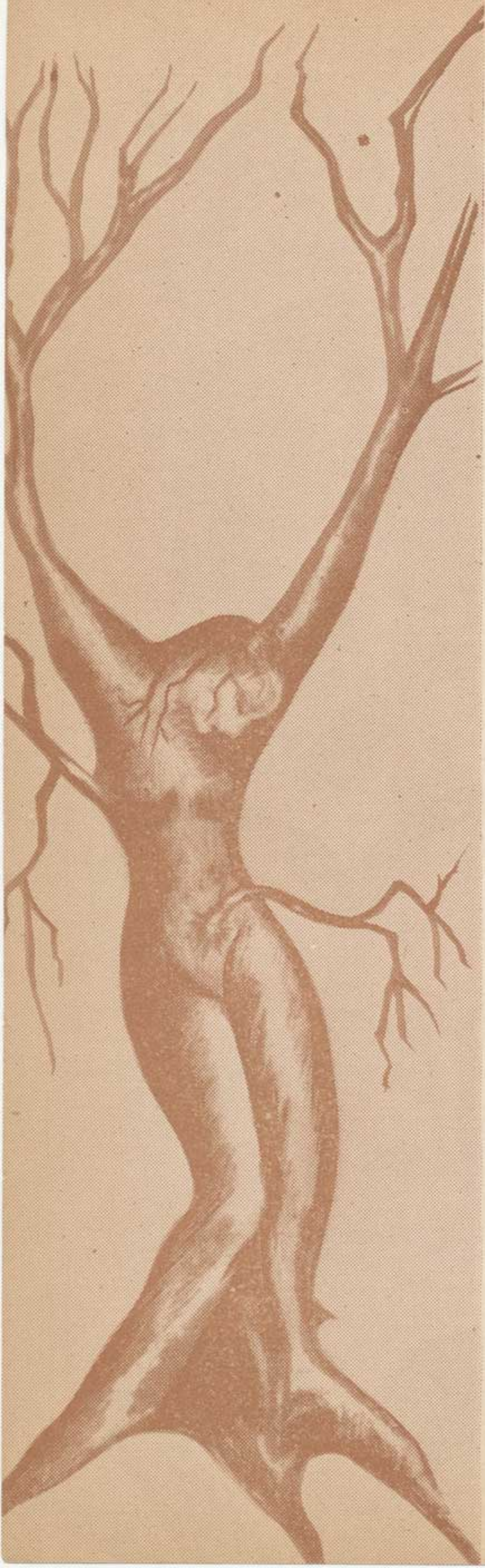
私はこのとき、ふいに、この社長の孤独を知った。この哀れな男の孤独な心を、満たしてやりたい、という気になった。

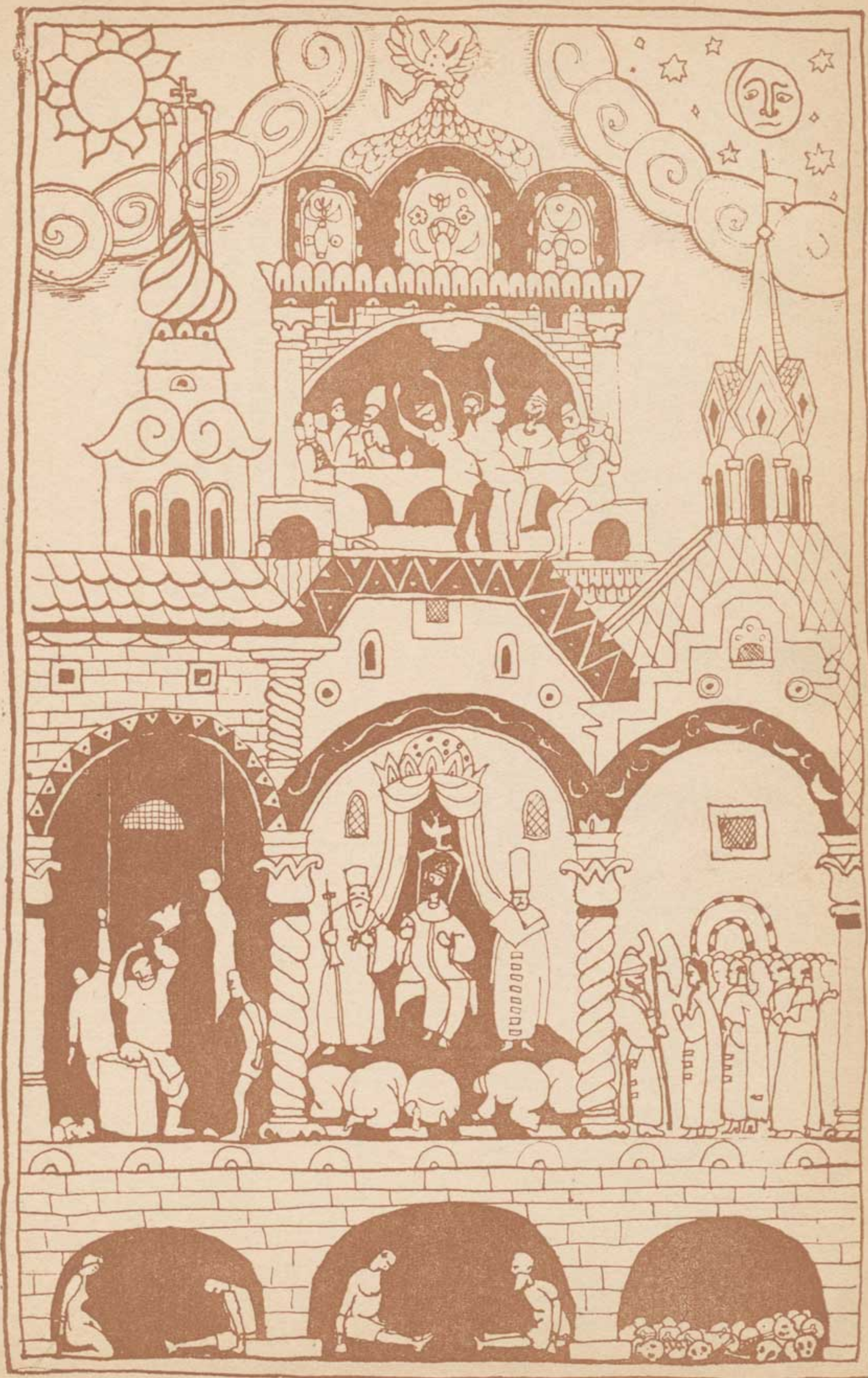
私の身体は、両足首から逆さに、じりじりと天井にむかってのびていった……。



アブチックな アルバム

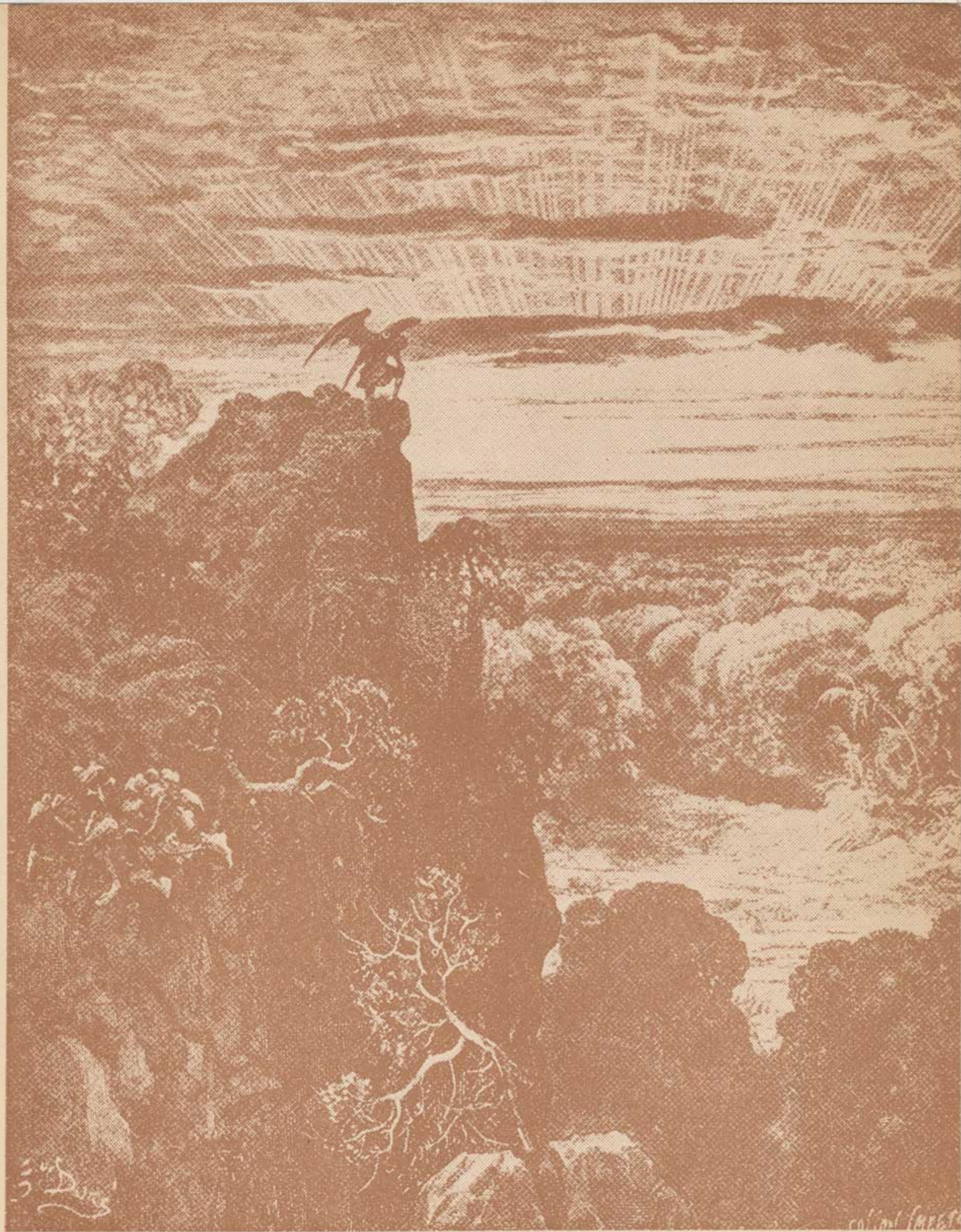
十人十色ということばがある。タデ食う虫も好き好きというコトワザもある。人によって好みも性向もさまざまということであるが、ここにご紹介する絵や写真も、ある人にとっては垂涎おくあたわさるものであっても、あまり興味をそそられない人もあるだろう。それはともかくとして……





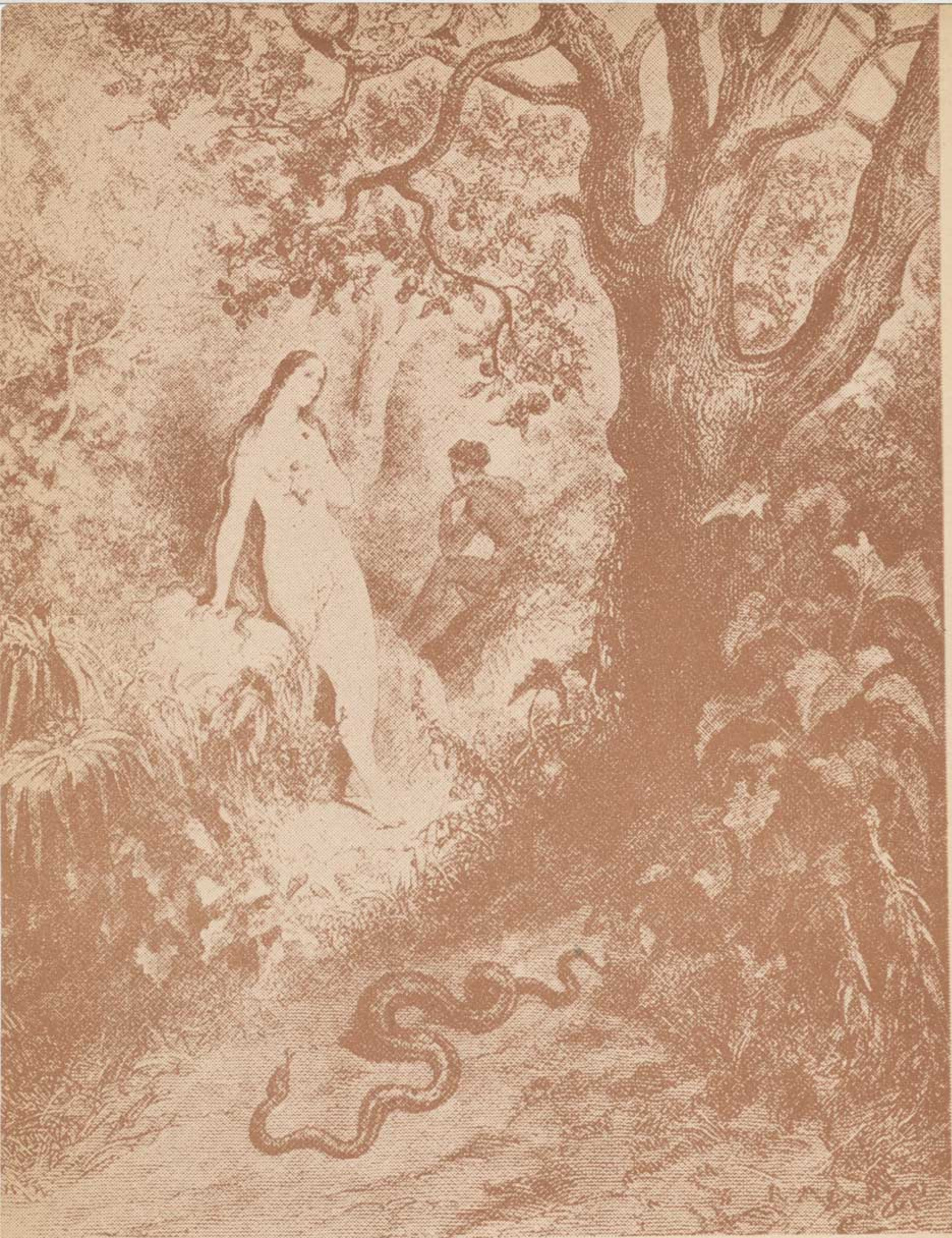


右——快樂の宮殿。階上では女を擁して酒盛りが開かれているのに、階下では裁判が行なわれ、しかも裁かれる民衆は群れをなしている。一室ではマサカリで首を切られたり、宙づりにされたりもしている。しかも地下には縛られた囚人がとじこめられ、白骨がるいると積まれている。殺人こそ最大の快樂か？
上——16世紀の版画に見る私刑の火あぶり。



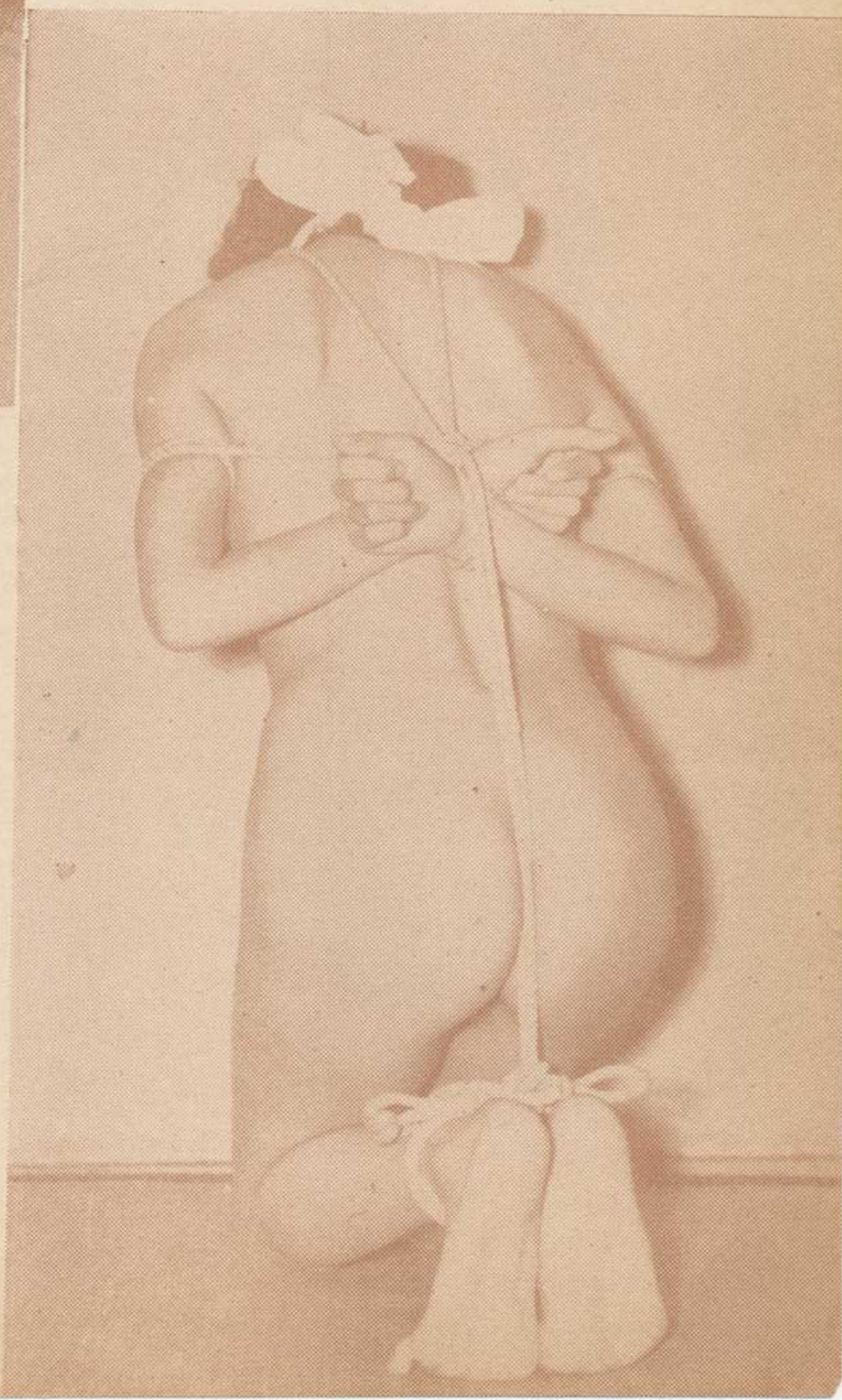
ジョン・ミルトン原作
ギュスターブ・ドーレ筆

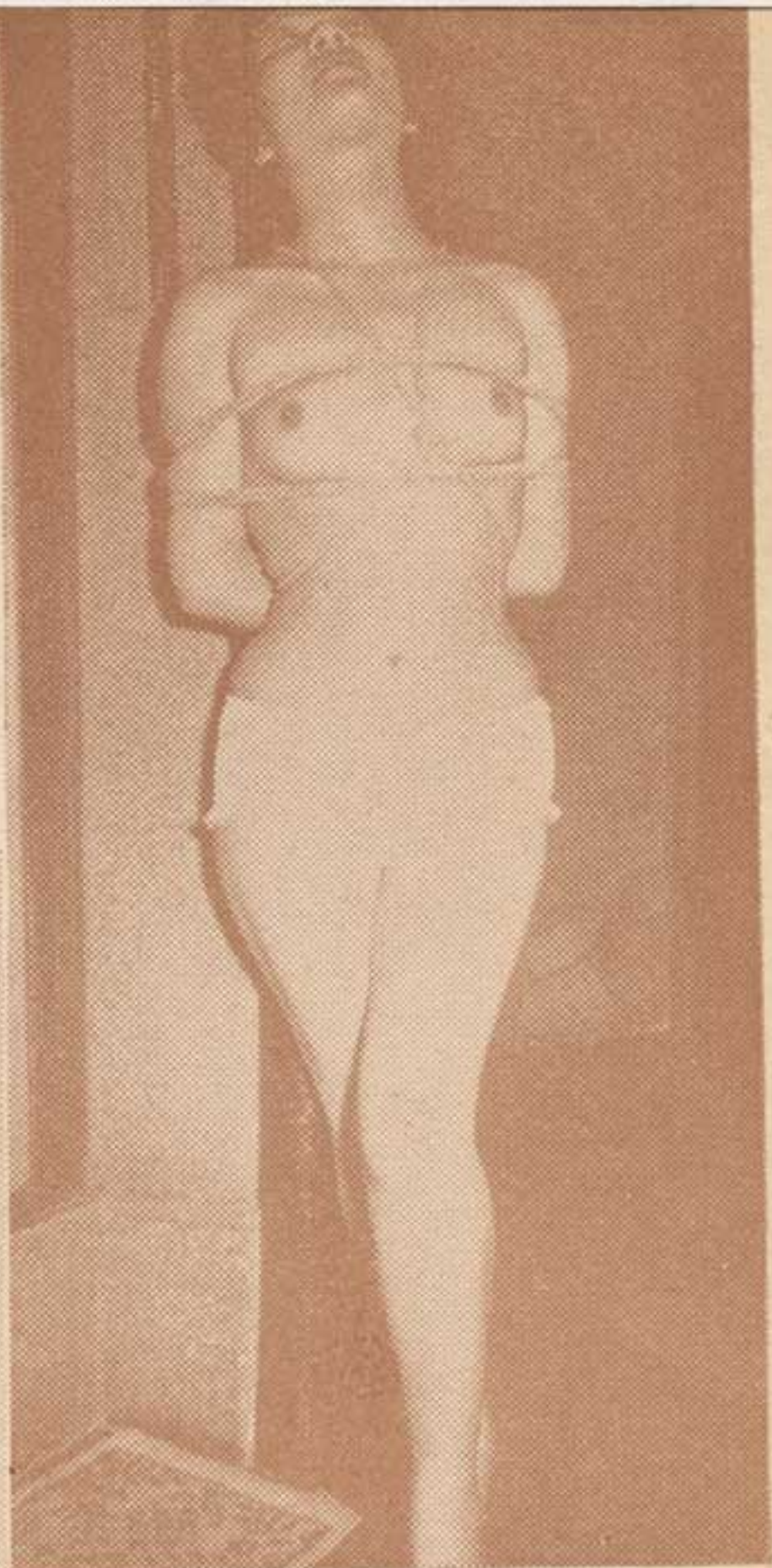
天界を追放された魔王は、新しく支配力をふるう世界を求めて遠征の途に上った。いま夕映えの雲の下、魔王は、アダムとイヴの喜戯する楽園が目下に横たわっているのを見る。



魔王は、たくみにへびに身をかえてイヴをだまし、禁断の木の実を食べさせようとした。イヴは意志が弱くも、魔王の詐術にのって、リンゴを食べ、墮落してしまう。

失楽園





なかなかいいモデルが見つからないので
苦勞してしまいます。快心の作とは言え
ませんが、これでも、苦心の末の撮影で
す。ご批判ください。(大阪)長田 実



女に打たれたり、支配されることによ
って、性的喜びを感じる男——マゾヒ
スト。シュリヒテルの描いた水彩画。